
ルーテン国英雄伝 ブラックボールの謎

ちょこみるく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルーテン国英雄伝 ブラックボールの謎

【Nコード】

N9117D

【作者名】

ちょこみるく

【あらすじ】

22の島からなるルーテン国。さまざまな部族の集まりによって繁栄していたが、エカルイア家の陰謀により国は突如乱れ始めた。国の運命を託されたのは1人のひ弱な少年ウィル。頼りないウィルだが仲間と出会い旅をしていくうちに次第に成長していく。スリル、笑い、切なさ、恋愛ありの長編冒険ファンタジー。

初めての客 1

ルーテン国英雄伝 ブラック・ボールの謎

22の島からなるルーテン国。この国は、さまざまな民族によって成り立っていた。それぞれの民族たちは、自分たちの得意な分野で社会の役割をそれぞれ担っている。この英雄伝は、他の多くの英雄伝と同じように静かな暮らしの中にある、普通の少年から始まる。

「トム、僕が勝ったら許可してくれるよね？」

ウィルは剣を顔の前に据えながら言った。

さわやかな朝の風がウィルの焦げ茶色の髪をなびかせた。

「何度も言わなくても、分かっているさ。そういうのは、勝つ自信がある時に言ってもんだぞ」

「……」

ウィルは真っ向からトムを睨みつけた。トムはウィルよりも頭一個分高い。おまけに体もがっしりしていて、やせっぽちのウィルとは対照的だ。どこの誰が見ても、勝敗が一目で分かる構図になっていた。

それでも、ウィルは恐れなかった。

前を見据え、腕を高く振り上げる。

剣の柄が太陽に照らされきらりと光った。

行くぞ！

ウィルは勢いよくトムの方に向って走り出した。

だんだんとトムが迫ってくる。

トムは余裕の表情を浮かべたまま、微動だにしない。

あと2、3歩。

ウィルは剣を腕にぐつと力を入れ、めいいっぱい振り下ろした。金属と金属のぶつかる音が、静かな山奥に響き渡る。

剣を合わせたまま、ウィルはトムを睨んだ。

相変わらず余裕の顔だ。ぶつかった衝撃で、剣を握る手に痛みが走ったが、歯を食いしばり堪えた。

トムは、ライラック色の瞳を見つめ、ふっと笑った。

「力…強くなつたな」

褒めの言葉に、ウィルは素直に喜んでしまう。

「でも、まだまだだ」

トムはそう言くと、戦意がやや落ちたウィルを後ろに跳ね飛ばした。

「うわっっ！」

ウィルはその勢いに乗って、後ろに仰向けに倒れそうになったが、何とか踏み留まることができた。

今までは、ここでウィルが倒れ試合が終わっていた。

だが、今日は、今日こそは違う。

ウィルは浮かれた。

やった！堪えることができた！

だが。

態勢をしつかりと整え、トムを見た後肩を落とした。

「ゴホッ。ゴホッ」

トムは咳をしていた。つまり咳のために、ウィルを跳ね飛ばす力が最後に緩んだのは一目瞭然だった。

でも、待てよ。

ウィルは思った。

どんな理由があれ、勝ちさえすれば許可してもらえる。

トムはまだ激しく咳き込んでいる。

チャンス！

ウィルは足を踏み込んだ。
そしてトムの手を離れ、飛び込む。

ほんの数秒のことだった。

剣を打ち付ける寸前、トムの手がぱつと視界から消えた。
そして気づいた時には、ウィルは生い茂った草の上に仰向けに倒れていた。

剣はウィルの手を離れ、遠くに飛ばされていた。

「甘いな」

トムはぴしゃりと言いつつ放った。

「それにしても、毎朝毎朝懲りないな、お前は」

ウィルの近くに歩いてくるのが、草を踏む足音で分かった。

「さあ、早くあきらめてフランクじいの所に行ってこい！」

「……」

ウィルは、ぼんやりと透き通った青空を眺めた。

白い雲がゆっくりと動いている。

また負けた。

ウィルが剣の達人トムを恐れない理由。

いつも負けているからだ。

数えきれないくらい負けている。

勝ったことは、一度もない。

今日は、勝つチャンスだったのに。

ウィルはぼんやりと思った。

そこは、いろいろな種類の鉢植えの植物がある部屋だった。

フラスコや顕微鏡など実験道具もたくさん置いてある。

見るからに難しそうな学術書も本棚に入りきらないくらいある。

頬杖をつき、ぼんやりとしているウィルの目の前で、一人の小柄な老人が懸命に何かを話している。

だが一言もウィルの耳を通過することはない。

これは毎日見られる光景だった。

ウィルはこの老人、フランクじいに午前中、薬の調合の仕方習っている。フランクじいはウィル達から100メートル程離れたところに住んでいた。

この山奥にはフランクじい、トム、そしてウィル。

この三人しか住んでいなかった。

フランクじいの授業は、恐ろしくつまらない。

毎日毎日椅子におとなしく椅子に座ってるだけでも、ウィルは十分に自分を褒めたかった。この授業で「忍耐」ということを、ウィルは一番に学んだ。

「いいですか、ウィル殿。ギザギザが不揃いなのがハリハリ草で、揃っているのがオート草だ。これをまちがえると大変なことになりますぞ。それと――」

ウィルはこれみよがしに大きなあくびをした。

がたがたのテーブルにつき、向かい合っている老人はウィルの無礼な態度を気にもとめず話し続けていた。もつともフランクじいはウィルが目の前で堂々と寝ていても授業を続けるのだが……。

ウィルは目をこすり、フランクじいをぼんやりと眺めた。

トムはフランクじいを優秀な医族の一人だと言っていた。そこはウィルも否定しない。

ただ、ウィル自身が薬学を学ぶ必要性があるということはどう考えても納得がいかなかった。トムは頑なに将来のためだと言ったが、それが役に立つ時が来るとはどうしても思えない。

何しろウィルは医族ではない。もっとも、ウィルはそんな味気ない族でなくてよかったと思っている。

ウィルはその勇ましさを誇る土族なのだ。

この世界にはたくさんの部族がある。

それぞれどこかの族に属し、それぞれの自分の族に誇りを持ち、それぞれの族がこの世界で担うべき役割を果たしていた。

正直なところウィルはあまり部族のことについては知らなかった。

医族と土族、そしてこの世界の政治を司る、王族とも呼ばれる賢族、その他にもいくつかの族を知っていたが、一般の人々の五分の一ほどしか部族の知識を持っていなかった。

ウィルは、他の事と同様に、両親のことについてもほとんど知らない。

ウィルがほんの1歳の時、亡くなったらしい。

だから寂しいとかいった感情は、全くなかった。

ふとたまに気になって、小さい頃トムに両親のことを尋ねたことも何度かあった。

だが決まってその話題になると、「今日は、勉強はかどったか？」などと言って、トムはすぐに話題をかえた。

ウィルが知っているのは、二人が病気で亡くなったということだけだ。トムはどうしても教えようとしないので、ウィルはいつからか聞き出すのをあきらめている。

トム、トム・ソルンはウィルを小さい頃から、男で一つで育ててきたが、ウィルの父親ではなかった。親戚でもない。あまり詳しいことは知らないのだが、ウィルの実の父親の親友だったと聞いた。

一枚だけお母さんとお父さん、そしてトムがソファに座ってにややかに笑っている写真があり、それはウィルとトムが住んでいる家（

家というより小屋と言う方が正しいかもしれない）に飾ってあった。この家には珍しく、豪華な金でかたどられた額縁に収められていた。写真の下には薄黄色の髪の毛の小さなラベルが貼ってあり、「ラゼルとエレンと」と黒いボールペンで書かれてある。トムの手跡だ。

とにかくウィルはこの世界のことについてほとんど何も知らなかった。

異常なほど。家の壁に貼ってあるこの世界の地図を眺めては外の世界に思いをはせ、行ってみたいと熱望したものだ、トムはいつこうにウィルを外の世界に出してくれなかった。

外の世界の様子も教えてくれなかった。

好奇心旺盛なウィルにとってはこれはとても耐え難いものだ。小さい頃はよく勝手に一人で山を降りようとしてトムにこっぴどくしかられた。

「俺に剣で勝ったら、許してやろう」

なかなか山を降りることをあきらめようとしないうィルに、トムは言った。

その日から毎朝ウィルはトムと勝負をしている。

トムがウィルに学ばせてくれるのは、フランクじいのつまらない薬学とトムが教えてくれる剣術だった。トムは素晴らしい剣使いだ。やや年をとっても衰えることのないその動きは、息を呑むほどである。この剣術は、ウィルは薬学と違ってかなり真剣に学んだ。ウィルは一見とても貧弱な体つきだが、この分野には意外と長けている。トムでさえ、剣術に関しては、ある程度ウィルを認めてくれていた。トムみたいな立派な士族になることがウィルの夢だ。

ぎゅーっとウイルのお腹が鳴った。

フランクじいには自分の古びた腕時計を見た。銀色の立派な時計だ。フランクじいには不釣り合いだと、ウイルは内心思っている。昔、フランクじいが何かの賞でもらった腕時計らしい。時計の裏には、この国の守り神といわれるペガサスの絵が刻まれていた。

「おっと、もうこんな時間。時間が過ぎるのは早いですな。今日はこれくらいでよいじやろう。ウイル様、今日のをちゃんと復習しておくのですぞ。後々役に立ちますからな」

「なんで僕は士族なのにはかばかしい薬学なんて学ばないといけないんだ」

ウイルは家に、いや小さな小屋に向かって歩く途中、ぼやいた。

今までこのことで何度となくトムに抗議してみたものの全く効果がなかった。

もっと士族として役立つものを教えてほしい。ウイルは小さなふもとの町のむこうに見える青い海を見ながら思った。

いつか、自分の剣を手に入れ、あの海を渡るんだ。あと三年。ウイルは、成人を迎えたらここを出て行ってもいいと言ってくれた。もう大人とみなされるからだ。十八歳、その時になったらこの山奥から大きな外の世界に出られるんだ！

やわらかな春風がウイルの気持ちをぐっと高揚させる。

ウイルが帰宅すると、トムはちょうど外で薪を割っていた。

「しっかり勉強したか？」

トムがウイルをちらっと見、薪を割りながら言った。

「いつもの通りさ、トム。本当に退屈だよ。それなのにフランクじ

いときたら…… フランクじいは、僕が目の前で死んでいても授業を続けるんだと思うよ。それよりお昼は？」

トムは薪割りを止め、顔をしかめてウィルを見た。

「お昼はもう用意してあるよ。スープを温めておいてくれ。それとウィル、何度も言うがばからしいと思うことでも真剣にしなければならぬ。いずれお前の役に立つのだから。」

「はいはい、分かったよ、トム。そのうちちゃんとするよ。もうお腹がペコペコさ」

ウィルは家の戸を開けながら言った。家に入ろうとするウィルに、トムの声が背後から追いかけてきた。

「今日は夕方に客がくるぞ。部屋をきれいに片付けておけよ」

その何でもないように思われる言葉がウィルの耳を通り抜けると、ウィルは硬直した。その意味不可解な言葉を理解するのに長い時間を要した。

他の人にとってはごく日常的な言葉かもしれない。

だが、ウィルにとっては、いやこの家にとっては違う。

客なんてこのちいさな家には一度も来た事がない。

フランクじいを客と呼ぶなら別だが…。

期待するのは早いぞ、ウィル・カシュー。ウィルは自分に言い聞かせた。そうだと、トムはフランクじいことを言ってるのかもしれない。

「フランクじいのことを言ってるの？」

ウィルはゆっくりふりかえって言った。その顔にはそうでなければいいという気持ちがありありと出ていた。

「いや、違う。別の人だ。かなり遠くから来るんだ」

薪をつかみながらトムは言った。そして、ゴホゴホとせきをした。

トムは風邪は最近ずっと続いている。

「誰？」

「俺の親戚さ」

トムは目に涙をにじませながら苦しそうに言った。

こんなことは今まで一度も無かった。非常事態だ。緊急事態だ。スープをお皿によそっているウィルの心は、好奇心ではちきれそうになっていた。

ウィルの少ない知人が、今日一人増えようとしている。

トムの親戚とはトムの兄弟だろうか、それとも従兄弟だろうか。

ああ、夕方が待ちきれない。

ウィルは壁にかかっている時計を見た。

午後一時。

夕方って何時だろう。

五時ぐらいだろうか、それとも早めの四時か。

遠くからっていったいどこからだろう。

家の戸が開いてトムが汗を拭きながら中に入ってきた。

「パンも切ってくれたか？」

トムが椅子に腰掛けながら言った。ウィルは全然聞いてなかった。

「トム、その親戚はどこから来るの？」

トムは少し顔をしかめて答えた。

「それは、もちろん土族たちが住んでいる島からだよ」

「突然来ることになったの？」

ウィルはパンをトムに渡しながらまた聞いた。トムはパンを受け取り、バターをぬりながら答えた。

「二週間前から分かってたさ。ほら、フランクじいがお前におれに渡すようにと封筒を持たせただろう？ あの手紙の中身がそのこと

についてだったんだ。手紙を届ける仕事をする蟻族たちは、うち宛の手紙もフランクじいのところを送るからね」

ウィルはミルクを飲んでいたがゴホゴホ咽た。

あの封筒の中身が客についてのことだったなんて。

またフランクじいのウィルの苦情かと思った。中身を見ておけばよかった。

ウィルが、名状しがたい後悔にひたっているうちに、トムは粗末な昼食を食べ終え、畑仕事をするために椅子からたちあがった。

トムは、ウィルが何を考えているか、分かっていた。

あきれたように首を横に振りながらウィルに言った。

「自分の思考にふけるのは結構なことだがちゃんと後片付けをしておいてくれ。お客を招くのにふさわしい部屋にしておけよ」

「あ、それとウィル」

トムは思い出したように言った。

「その客は何日間かここに泊まる。この家は小さいからもう部屋がないだろう。だから不便かもしれないが、ベッドをもう一つお前の部屋に置かせてもらうよ。俺の部屋は本棚でいっぱいそんな余裕がないのでね。ベッドは、物置にある古いやつしかない。後片付けが終わったら水で濡らした雑巾で拭いておいてくれ。多少はきれいになるだろうからね。ほこりまみれだったし」

ウィルはぽかんと口を開けた。数秒の間にまた新たな好奇心が山のように押し寄せた。

何日間かってどれくらい？

いったいどんな用事でわざわざ不便な思いをしてまで泊まりに来るのだろう。

しかも、僕と同じ部屋で寝るなんて。

「じゃあ、ウィルお願いだからな」

トムはウィルに質問する隙を与えないようにそうきっぱり言って、

家の隅においてあるカマとかごとをとった。

初めての客 1（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

初めての客 2

「待つて、トム」

ウィルはバつと椅子から立ち上がった。

「まだ聞きたいことがたくさん」

トムが両手を上げて、それを遮る。

「ウィル、気持ちは分かるが今日は大急ぎで客を迎える準備をしなければならぬ。数日前からしておけばよかったんだろうが、この通りどうも俺は体調が優れなくてね。気があまり進まなかったんだ」

トムはそう言うのと、さっさと外に出て行ってしまった。

ウィルはそのまましばらく立ち尽くし、やがて後片付けを始めた。

午後四時半。

ウィルはぐったりとしてベッドに横になっていた。

まだ客は来ない。

トムは客のためのご馳走を、キッチンで作っている。

ウィルは、昼食の後、めいいつぱい働いた。

物置のベッドは思ったよりもはるかにほこりまみれで、雑巾で拭くのにかなりの時間がかかった。

のびきつていても、ウィルの胸は高鳴っていた。

きつともうすぐだ。

もうすぐ客が来る。

ウィルはだんだんと、落ち着きをなくしていった。
じっとしていることに耐えられず、ベッドから起き上がった時だ。

「ドン、ドン」

戸を激しくたたく音がした。

ウィルは自分の部屋のドアをバンと乱暴に開け、びっくりしている
トムの前を通りすぎ、戸の前でピタッと静止した。

そこで大きく深呼吸。

ドアノブをにぎりしめ、ゆっくりとその手をひねる。

続いてウィルがしたことは、ばかんと口を開けることだった。

予想外の客だった。

てっきりウィルは客はトムのような中年、またはそれ以上に年のを
とった人だろうと勝手に決め付けていたからだ。

固定観念とは恐ろしいものである。

客はそういう人だとしてウィル信じて疑わなかった。

ウィルには仕方が無いことかもしれない。なぜなら、ウィルには自
分と同世代の人たちに知人は全くなかったし、そのような人たち
との接点もさらさらなかったからだ。

そういうわけで、ウィルは戸の前に立っている人物が自分と同じく
らい若い少年だったのですっかり驚いた。

その少年は全体的に痩せ型で背はウィルより十センチほど高かった
が、がっしりとしていてたくましく、優雅な髪の毛はウィルの真っ
黒な髪とは違って鮮やかな赤茶色。

服は深緑色の革の服を着ていて腰には剣が携えられていた。誰が見
ても勇ましい士族だと分かるような格好だ。

ウィルはしばらくたっても少年と向かい合ったままずっといた。間抜けにもその間口は開きっぱなし。

その少年も、そしてトムも何も言わずに固まっていた。遠くで小鳥がさえずっている。

やがて、その少年が口を開いた。にやりとした表情で。

「そんなに口を開けていたらハエが入るぜ」

ウィルはそこでやっと我に返った。

「ウィル、お客さんに失礼じゃないか。早く中に入れてあげないさい」

トムが後ろから笑いながら言った。

ウィルは恥ずかしさに顔を真っ赤にしながら、道を開ける。

少年はにやにやしながら、家に入ってきた。

「お邪魔します」

近寄ってきたに気付くと、手をトムのほうに差し出した。

「はじめまして、トム・ソルンおじさん。ローレイ・ジャティスです。お会いできて本当に光栄です。」

とても丁寧な口調だった。

心の底から「光栄です」と思ってる感じだ。

トムはにつこり笑って、差し出された手をぎゅっと握った。

「こちらこそ。急に無理なことをいって本当にすまなかった。ナニ

「は元気かい？」

「もちろん。うるさすぎるくらいですよ。トムおじさんのことをよく心配していましたよ。全然顔を見せないから何かあったんじゃないのかとか、生活がとても不便なんじゃないかとか。手紙でも何度か遊びに来るようにお誘いしたのにやっぱり来られなかったし……」

トムは困ったような顔をした。

「そのことについては十二分に説明したはずだが……」

ローレイは笑いながら軽く手を振った。

「はい、もちろんしっかりと書かれてありましたよ。でも、母はご存知だと思いますが、極度の心配性なんです。ありえないことまで勝手に妄想して心配してるんですから」

「ここに向けて出発する時だって、涙涙で……」

トムは大声をたてて笑いながら、ローレイに小さな台所のまえにあるテーブルの椅子座るように促した。

「すっかり忘れていたがナニーは小さい頃からそうだったんだ。母親に似てね」

ローレイの言うとおり、トムの妹はどうやら極度の心配性らしい。ウィルはトムの背後でぼんやりと考えた。ただここに数日間訪問するだけなのに泣くななんておかしい。

トムは居間兼台所のテーブルの椅子に座りながら、ウィルにも自分の隣に座るよう合図した。

ローレイは背筋をピンとしてトムの向かい側の椅子に座った。

自分の部屋に避難したいと思っていたウィルだったが、仕方なくトムの隣のイスに座る。

トムはウィルの肩に手をぽんと置いた。

「ローレイ、こちらはウィルだ。ウィル・カシュー。確か君は十六歳だったね。ウィル」

君より一つ年下で十五歳だよ。ウィル、こちらはローレイ・ジャテイス君。私の妹の息子、つまり私の甥にあたる。ほら、ウィル挨拶しなさい」

「よ…よろしく」

ウィルは消え入るような声で言い、うつむいた。耳がとても熱かった。

「こちらこそ、ウィル」

ローレイはにやりとしながら言った。

ウィルを馬鹿にしているのがはっきりと分かる。

ウィルはすっかり自信を失った。

こんな経験は初めてだ。

一歳しかウィルとは違わないのに、ローレイの体格はウィルとかなり違っている。

ローレイのがつしりした体つきと比べると、ウィルは痩せていてあまりにも貧弱だった。

そのことが、ウィルに大きなショックを与える。

自分の体型は普通ではないのだろうか？

ウィルはローレイをちらりちらりと盗み見ながら、考えた。

夕食時。

ウィルはずっと沈黙を守っている。

トムとローレイは初対面のはずなのに従来の友人のように会話がとてもはずんでいた。

ローレイの住んでいる島には土族の村があり、トムもその村の出身らしい。

その土族の村の話やローレイの家族の話で盛り上がっている。

今日はいつもに比べるとかなりのご馳走だった。

いつものウィルだったらすぐに平らげてしまいそうなステーキだった。

た。

食後。ウィルは、一人することがなく、ぼんやりと薬学のノートを取り出し、眺めていた。

「ウィル、ひまなようだね。お風呂に入ってきたらどうだい？」
場を離れる口実ができたことを喜びながら、ウィルはその場をそそくさと逃げ出した。

しかし、後になって、それは後悔に変わる。

お風呂から上がり居間に入った時、トムとローレイは声を顰め、二人とも深刻な顔で何やら話し合っていた。

二人ともテーブルに広げてある一枚の紙を見ながら身をかがめて話している。

ウィルの好奇心が、ポツポツと咲き始めた。

そっとトムの背後に近づく。

「それでここにエレ」

トムが何か言うのをさえぎって、ローレイがウィルに言った。

「何か御用ですか、坊や？」

顔にはあのにやりとした表情が浮かんでいる。

ウィルはびくとして、顔をしかめた。心の中で悪態をつく。

トムが驚いて、顔を上げた。

「びつくりするじゃないか。もうあがったのかい？」

「え……あ、うん」

赤くなりながらウィルは答えた。

ウィルはローレイを睨んだ。

坊やなんて、人を馬鹿にするにも程がある！

「今日は疲れたんじゃないか？たくさん働いたし。もう寝たらどうだい？」

「え、でもまだ八時だし」

「寝たほうがいいぜ。さっきだって、ぼおつとしてたじゃないか。疲れてるんだろう？」

ローレイが口を挟んだ。

そこで、即座にウィルは回れ右して自分の部屋に向かった。

一刻も早くコイツから離れたい。

それがさしあたってのウィルの、一番の願いだった。

「こんなはずじゃなかったんだ」

ベッドの上に仰向けに倒れたウィルはつぶやいた。

初めての客の訪問はウィルがドアを開けた瞬間から、めちゃくちゃになってしまった。

ローレイが来てたつた四時間だったが、ウィルは人生で最悪の四時間だと思った。

フランクじいの馬鹿げた授業よりも百倍悪い。

ウィルは、今日になって初めて自信を失くすという経験をした。

自分がどんなに世間知らずなのか、また他の少年たちからしてどんなに変わっているかを知らない。

いつもと調子がくるっていたウィルだったが、先程のローレイとトムの会話はまだ気になっていた。

「エレ……いったい何を言おうとしたんだろう？くそっ、あいつが口を挟まなければ聞けたのに」

自分の村のことをにこやかにトムに話すローレイの顔が頭の中に浮かんできた。

トムがあんなに楽しそうな顔をするのは久しぶりだ。

ここのことろずっと体調をくずしていて、そのためか若干元気がなかった。

よく فرانクじいの所へ行って診てもらい、薬もよくウィルがあずかって届けていたが一向に治らなかったのだ。

そのためフランクじいは何種類もの薬を調合してトムの病氣と奮闘していたが、今のところ効果はあまり出ていない。

トムは私ももう若くはないからねと言い、フランクじいはタチの悪い風邪だと言った。

だが、ウィルにとってはただの風邪とは到底思えなかった。

なにせ、フランクじいの薬が全然効かないのだから。

ウィルはトムの体調不良はこの山に長年こもってるせいだと勝手に予想している。

外に出て新鮮な空気を吸ったほうが絶対に体にいいはずだ、と。

だがウィルは知らなかった。

自分とウィルがこもっているこの山こそ世界に誇れる新鮮な空気を持っている場所の一つだということを。

「はあっ」

ウィルはため息をついた。

トムの体調はともかく、この山から外の世界に出たい。
今の生活はウィルにとっては毎日がとても窮屈だった。

そうだ！

ウィルはふと考えた。

この機会にトムに土族の村に移り住むことを勧めてみようか？
そして、僕も土族の村に住み、一人前の剣士になる猛特訓をするんだ！

あのムカツクやつがその村に住んでいるのは気に食わないけど、きつと僕と同じくらいの年代の友達がたくさん作れるはずだ。
みんながみんなアイツみたいに意地が悪いはずがない。

それからしばらく、ウィルは自分が土族の村に行って楽しい毎日を送る想像をして心を躍らせながら、眠りについた。

それから一週間何事もなく毎日が過ぎていった。

ただウィルにとってやっかいな者が一人一緒に暮らすようになっただけだ。

ただそれだけで、つまらない日常は何も変わらない。

ウィルはローレイとあまり話さなかったし、また話したくもなかった。

それに同じ部屋で寝起きを一緒にしているといっても、ローレイが眠りに着くのはウィルより晚かったし、朝ウィルが目覚めたときはいつも隣のベッドはすでに空なのである。

ムカツクことが無かったと言えばそれは強がりになるが 何か接する機会がある度にローレイは、ウィルをまるで親指をしゃぶっている子供のように扱った ウィルの土族の村に住むという希望がウィルの心を守った。

ある時、ウィルは思い切ってトムに土族の村に行くことを催促した。
「そうだな……。まあ、それを考えてないわけでもないんだ。久しぶりに故郷に帰りたい気もするし……」

ウィルは息を呑んだ。あれだけ期待していたにもかかわらず、こんな前向きな返答が来るとは思わなかった。

ウィルの心は躍った。

この山から外に出れるという長年の夢が、今叶おうとしているのかもしれない。

初めての客 2（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

明かされた真実 1

何事もなく一週間過ぎたのだが、ウィルには最近少し気になることがいくつかあった。

一つは、ローレイとトムがあの日のお風呂から上がった時のように、真剣に何かをよく話し合ってるということだ。

しかもひそひそ話で。

二人はウィルに聞かせまいとしているらしく、ウィルの前では決して何やら深刻な話をしようとしない。

また、ウィルが近くに来ると必ずその話を中断させるか、何か理由をつけてウィルを追っ払おうとした。

「お風呂に入ったらどうだ？」

「薬学の復習はしたのか？」

「もうそろそろ寝なさい」

追い払われれば、追い払われるほど、ウィルは話を盗み聞きするの躍起になっていった。

自分の部屋にドアに張り付いて、居間の会話を聞きたるうとしたり、お風呂からあがった後、忍び足で居間に入っていたり。

いろいろな策を考え、片っ端から実行していったにもかかわらず、成果はあまり芳しくなかった。

聞き取れた単語は、

「アンナ」

「村」

「船」

アンナという人がいるところに船に乗って向かう？

単語をつなぎあわせてもそれくらいの予想しかできない。

こんなどうでもいい話をしているわけじゃないことは、ウィルは察しがついていた。

あのムカツク少年はともかく、トムとはずっと一緒に暮らしてきた長年のつきあい。

家族だ。

トムがあんなに真剣な顔をするのは、よっぽどのことだと察するのはウィルにはさすがに容易い。

そして、もう一つ気になることがあった。

ローレイは何かしらウィルと目が合ったときは、あの意地汚い薄笑いを顔に浮かべているのだが、たまにウィルのこと鋭い目で、観察でもしているかのように、見つめていることがあった。

しかし、ウィルも見返していることに気づくと、すぐににやりとした表情になる。

その度にウィルは心の中でローレイのことを毒づいていたが、一方でその鋭い視線の意味がとても気になっていた。

「ウィル様！しっかり聞きなさるのだ。せめて風邪薬の分野だけでもマスターしないと。もう時間がないのですぞ！」

その日、フランクじいが珍しく大きな声を出した。

ウィルの回していたペンが、ポトリと落ちた。

「どうして時間がないの？」

その時フランクじいには、はっとしたような表情が一瞬浮かんだが、すぐに厳しい顔に戻った。

「医族では十五歳くらいまでには薬学の基本的な知識は もちろん風邪薬もその一つですが たいていマスターするのです。それなのにウィル様は十五歳になって一ヶ月たちなさっている」

「フランクじい」

ウィルの声にイライラをにじませた。

「僕は、医族、じゃなくて、士族、だよ」
一個一個単語を区切ってはつきりと言う。

「フン」

フランクじいは鼻をならした。フランクじいはかなりの強情な性格の持ち主だ。

「しっかりと教養がある人は、自分の族以外のことも何かと勉強するものですぞ。そしてトム様はあなたが教養がある人になることを望んでいらつしゃいます」

「トムが何と言おう」

「今日はこれで終わり」

ウィルが反論を言いかけるのさえぎって、フランクじいはきっぱりと言った。

それから、自分の前に広げてある本、『基本薬学』をパタンと閉じ、

ウィルに差し出した。

「この本をあげるから、よく家で復習しておくのですぞ」

「フランクじいはいもうこの本いらないの？」

ウィルは驚きながら、その本を受け取った。

「私が基本薬学を覚えてないとも思ってたなさるのですか？」

フランクじいが憤然としていった。

「違うよ」

ウィルは慌てて言った。

「ただ、それならどうして今までくれなかったのかなって……」

「もちろんノートに書かせて頭に叩き込ませるためです。ウィル様にはお出来にならなかったようですがの」

「そう……分かった。ありがとう。それじゃ、僕帰るね」

説教第二弾が始まる前に、ウィルは即座にフランクじいの家を飛び出した。

「いよいよですな　ラゼル様……」

元気よくかけていくウィルを窓越しに見ながら、フランクじいはつぶやく。

何も知らないウィルは駆けていく。

これから全てが変わってしまうことも知らないで……。

明かされた真実 1（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
次回ウィルの素性が明らかになります。

明かされた真実 2

「ただいま！」

ウィルは元気よくドアを開けた。

いつもと同じように。元気よく家の中に駆け込む。

居間で何やらまた話をしていたローレイとトムが、同時に顔をあげた。

「おかえり、ウィル」

この光景はもうウィルにとっては慣れっこだ。

ウィルは気分を害することなく、自分の部屋に直行した。

もしも話声がいつもより大きくて聞こえそうなら、また自分の部屋のドアに貼りついて盗み聞きを図ろうかな。

そう呑気に考えながら、ウィルは二人のいるテーブルを通り過ぎた。

正確には通り過ぎようとした。

「ウィル、話がある。ここに座ってくれないか」

ウィルはぴたりと足をとめた。驚いてトムを見る。

トムがローレイが今座っている自分の向かい側の席を示していた。

ローレイは即座に立ち上がり、トムの隣の席に座った。

「すまないね、ローレイ君」
「いえ、大丈夫ですよ」

トムは、いつもよりやや顔色が悪いように見えた。
最近では体調が芳しくないせいで、顔色が悪いのはよくあることだったが。

ウィルは警戒しながら、トムの向かい側の席に無言でついた。

ローレイは今は顔にあの厭味ったらしいニヤニヤがない。
士族の威厳をどことなく漂わせるような、引き締まった厳しい顔をしている。

嫌な予感がした。
なぜか心臓の鼓動が速くなる。

「何？ 話って……」

トムはすぐには質問に答えず、黙ってウィルを見ていた。

ウィルはローレイとトムから真顔で正視されているのがどこことなく居心地が悪く、椅子の上でお尻をつずつずとさせた。

ようやくトムが口を開いた。

「ウィル、この話をするのを私は随分先延ばしにしてきたが、もうこれ以上はダメみたいだ」

少し震えた声。

こんなトムの声をウィルは初めて聞く。
ウィルは無意識に身構えた。

「どんな話を……？」
自分でも驚いたことにかすれ声だった。

まだ経験したことのないこの張りつめた空気に、胸騒ぎを覚える。
直感が大変なことが起きると告げていた。

「時が来たんだ。お前の旅立ちの『時』が」
「え？」

「ウィル、それはお前が長年望んでいて、私が望んでいなかった『時』だ」

「何を言っているのか、全く分からないんだけど……」

「旅立ち」 この言葉が、この神秘的かつ魅力的な言葉がこの時ばかりは乾燥して聞こえた。
何の意味ももたない、空気のようなもの。

「旅立ちってどういうこと？ 僕らここの家を出るの？」

トムは大きく深呼吸をし、ぐっとウィルを見据えた。
これから戦に望む土族のように、その眼差しは士気を帯びている。

「長い物語だ。ここから話し始めるのがいいだろう。お前が旅立たねばならない理由、まずはそこからだ」

静寂がその空間を覆った。

トムの声は静寂の中で響き、そして静寂の中に消えていく。

「全ては、現在この国を治めてるエカルイア家にある」

「エカルイア家、それって王家だよな」

世間知らずのウィルでも、その名はさすがに知っている。
このルーテン国の王家。

「この世界の崇高なる支配者、賢族の誉れ高きエカルイア家」

ローレイがそこで初めて口を開いた。

ウィルはその声に嘲りの色があつたのを聞き逃さなかった。

「王家と僕達が旅立たなければならないことと、何か関係があるの？」

「大いにありだ」

トムが即答した。

「お前は知らないと思うが、賢族には二つの姓がある。正確に言う
と、あつた。お前が生まれた時はまだ、二家がこの国を治めていた。
だが、今王宮にはエカルイアという名を持つ者しかいない。理由を
知っているか？」

「もちろん、知らないよ」

「もう一つの姓をもつ一族が、耐えたからだ」

「全員死んだってこと？」

「その一族のほとんどの者が、次々と病死した」

「大変な病気だったんだね……」

「病気？」

そのローレイの言葉には、また嘲りの調子があった。

「どうして一方の族の者だけが死ぬ病気なんだ？ 公式にはそういうことになっているが、嘘であることは世界の誰もが気づいてる。

病気というよりも暗殺といった方がこの場合しつくりとくるからな」
「暗殺！？」

トムは重々しく頷いた。

「裏切りだ。昔は二つの血縁はうまくやっていて、善政をやっていた。だが、当時ある理由で両一族は仲が悪くなり、エカルイア家は一方の一族を排除しようとした。結果今はエカルイア家の独裁政治今、その一族のトップがご存知、アルノー・エカルイアだ。陰謀が働いていた時は、まだそいつの父親が王座にいたが……」

「アルノー王……」

「アルノー王は君と同年だな。この国の頂点にいる男だ」

「同年でも能天気のばかと暴君か……。こりゃ、全然違うな」
ローレイが皮肉たっぷりに言った。

「僕は能天気のばかなんかじゃない！」

ウィルが怒って言った。

「そうだったのか……。それじゃあ、世間知らずの弱虫君かい？」
ローレイがいつもの調子で、わざとおどけてみせながら言った。

「違う！！僕は」

「ばかなんかは二人ともやめるんだ。話を進めるぞ」
トムが大声を出した。

「二人とも？トム、ローレイが僕のことを」

「口を閉じるんだ、ウィル。時間を無駄にしている余裕なんて、全

くないんだ」

ウィルはローレイを睨みつけながらも、言われた通り口を閉じた。ローレイはまだうつすらニヤニヤ笑いを顔に浮かべている。

「よし、それでいい。最初この国の賢族による政治が始まったとき、さつきも言ったように賢族には二大家族がいた。ビーク家とエカルイア家。だが、四十八代の王は女王だった。女王としては2代目だ。名はクララ・ビーク。王位についてからしばらくし、クララはある青年と結婚し、諸事情により姓を変えた。クララ・カシユー」

ウィルは口をあんぐりと開けた。

偶然？

直感が未だに継続してウィルに警告を発していた。

さらに深い静寂が居間を呑みこんだ。

外で美しい声の小鳥が、さえずっている。

「そうだよ、ウィル」

トムはウィルをじっと見すえ、ウィルもまっすぐにその目を見つめ返した。

「いや……ラゼル王の息子ウィル・カシユー」

明かされた真実 2（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

明かされた真実 3

時が止まった。

「今なんて言った？」

「第一王子ウィル・カシユー」

ローレイが何事でもないかのように、きっぱりと言う。

「え……？」

「君の父親ラゼルはルーテン国の王だった」

「いや……ちよつと待って」

「賢帝だったよ。そして、私の無二の親友だった。本当に人格といい、知性といいすばらしかった。だが……」

そこでトムの表情は一段と陰しくなり、黙りこんだ。

次に口を開いたのは、ローレイだった。

「カシユー家の悲劇。僕がまだ物心つく前の時だった。大きくなって、人から聞いたことだが、今から十四年前このルーテン国の中心の都リフラーにある城、つまり王宮で原因不明の伝染病がはやってらしい。だが、おかしいのはその病気にかかるのがカシユー家の者だけなんだ。最初は、王を引退していた先王、そして王妃、後を追うように王、あとは詳しく知らないが他にも何人かのカシユー家の者が死んだらしい」

トムが首を振った。

「伝染病なんて、聞いてあきれる」

「全く同感ですよ、トムさんおじさん」

ローレイが相槌を打つ。

「それは、もう世界のみんなが思っていることです」

「エカルイア家はもうちょっとマシな口実は思いつかなかったのか？ なぜカシユー家の者だけが、伝染病にかかるんだ？ なぜそばにいたメイドや他に城に仕えていた多くの人は、だれも伝染病にかからなかった？ エカルイア家もみな健康そのものだった。陰謀だよ。誰もがそう思っている。カシユー家の者は、殺されたんだ」

ウィルは話についていくことができず、ぽかんとしていた。

「だが、二、三人は生き残ったらしい。だが、当然もう城にはいないよ。どこかで、ひっそりと身を隠して暮らしてるはずだ。君の親戚にあたる人たちだよ」

「僕の親戚……」

ウィルは、そこでたった今聞かされた話を、ゆっくり頭の中で整理してみることにした。

僕はラゼル王の息子。カシユー家の生き残り。
家族は陰謀で殺された。

トムはラゼル王のバディ。

僕は士族じゃなくて賢族、つまり俗に言う王族。
……。

そして一つの結論に達する。

「は……。あり得ないね……。あり得ないよ、トム」

「何がだね？ウィル」

トムの声は優しくかった。

「もちろん、僕が賢族の一人だということがだよ。二人して僕のことをからかってるんでしょ？」

ローレイは声に苛立ちをにじませた。

「お前つて、思ったより飲み込みが悪いな……」

トムはしばらく、ウィルを直視したまま、拳を額に当てて考え込んだ。

何かをを思案しているらしい。

その間、ウィルは自分が賢族ではないという根拠を、心の中で挙げていた。

第一、王族の一員なら、何でこんなよれよれの服を僕は着て、こんな山奥に外界とは全く接触なしですごしているんだ？

賢族は世界中と接触して、まとめるのが仕事だろ？

それに、第一王子とかいう立場なら、召使とか周りにたくさんいて、毎日ほっぺたが落ちそうなほどおいしいディナーを金のお盆に載せて運んでくるはずじゃないか。

小さい頃に読んだ、絵本の中の王子はそんな生活をおくっていたはずだ。

突然、ローレイがパチンと指を鳴らした。

「そうだ！」

そして、服の左袖をぐいっとまくりあげる。

「お前は、これが何だか知ってるか？」

その二の腕には、銀の太い腕輪がはめられていた。飾りなどはなく、ただのわっかで、肩より少し下のところにはめられている。ウィルは、その腕輪に見覚えがあった。

この色、この形……。

「これって、トムも」

「ああ、そうだ」

トムもローレイと同様に袖をまくりあげながら言った。そこには、ローレイとほとんど同じものがあつた。

ただ、トムのは年季が入っていて、さらに大きなヒビが入っている。

ウィルは見慣れていたが、なぜか自分に同じのがついているのだから、見慣れているはずのローレイは顔に驚愕の色を浮かべた。

「トムおじさんそれは」

トムはローレイを手で遮り、ウィルに向かって言った。

「ウィル、これが何なのか分かるか？」

ウィルは少し頬を膨らませた。

「知らない。トムは教えてくえなかった」

「悪かった。これは、カラーというものなんだ。このルーテン国の

人々はみなつけている。みな、生まれるとすぐにつける。これは、不思議な物質でできていてね、その人の成長とともに伸びたり縮んだりするんだよ。つまり、きついとか、ゆるいとかいうことがないんだ。そしてこの色についてだが、この腕輪の色は、そのつけている人が属している部族を表す」

「それがどうしたの？」

「腕輪をつけないのは、賢族の者たちだけなんだ」

明かされた真実 3（後書き）

読んでくださってありがとうございました

明かされた真実 4

「なぜお前はカラーをつけてない？」

ウィルは即答した。

「トムがつけてくれなかったからだ」

「違う」

ローレイが険しい顔で言った。

「お前が賢族の者だからだ。つける必要がないんだ」

「……」

「それに、お前はトムさんがどんな人だったか知っているのか？」

「どういうこと？」

「ラゼル王のバディだったんだ」

「バディ？」

「僕達士族は賢族と契約を結んでいる。それは、賢族の重要な人物に対し、政治を司る手助けをするパートナーを送るというもの。そのパートナーがバディだ。基本的には護衛だが、もちろん他の手助けも色々とする」

「第一の家臣というわけだ」

トムが横から言った。

「もちろん」

ローレイは続けた。

「バディに選ばれるのは、優秀な者たち。国王のバディは一番優秀な者が抜擢される。つまり、トムおじさんはとても優秀な剣士で、僕ら家族の誇りなんだ」

ウィルは驚いてトムを見つめた。
そこまですごい剣士だったとは、思わなかった。

「あり得ない」

ウィルは苦笑いしながら言った。

「からかうのもいい加減にしてくれ。カラーをつけてない、それがどうしたというんだ。普通では、異常なことかもしれないが、僕にとっては何の変哲もないことだ」

「どういうことだ？」

「僕は、君のような外の世界の人とは違って、この山奥に長年閉じ込められてきたんだ。だからカラーをつけてないことなんか、何の不思議もない」

その言葉を聞いて、ローレイはにやりとした。

「たった今お前は、自分が賢族の者であることのもっとも有力な証拠を口にしたぜ」

「どうしてお前はここに長年閉じ込められていた？」

ウィルは怯まなかった。

そんな理由は分かりきっている。

「トムが極度の心配性だからだよ！」

今までの不満をぶちまけるように、ウィルは声を張り上げた。

「ウィル、それは違うよ」
トムが即座に否定した。

「私は確かにお前のことをいつも心配していたが、それはお前が、そこらへんの者たちとは違うからだ。お前が普通の者だったら、とつくに山のふもとの町に行くことを許してたさ。何しろこの島はこの国のなかでもっとも治安のいいエシミス島だ。友達を作らせることぐらい何の心配もいらなかっただろう」
「……」

閉じ込められていた理由を聞かされても、まだウィルはトム達の話
を信じる事ができなかった。

あり得ない。
あり得ない。
あり得ない。
絶対ありえない。

「いい加減に認めろよ」

ローレイはうんざりしたように言った。

「お前が俺たちの話を否定するということは、お前の父親、立派な賢帝だったらしいが、その方も、そして士族にとって最高の名誉であるバディの称号を得たトムさんをも否定することになるんだぞ！

？」
「う……」

痛いところをつかれた。

父親はともかく、トムのことを出されてはウィルはもう何も言えない。

「ウィル、私の目を見るんだ」

ウィルはゆつくりと視線をトムの顔をに合わせた。

「私のことが信じられないのかい？ 私がこんなに真剣に話しているのに、冗談を言ってるんでも？」

トムはまっすぐにウィルを見ている。

ウィルにはその視線が痛かった。

しかし、そらすこともできない。

しばしの沈黙と静止。

ウィルはついに折れた。

「分かった。認めるよ……。とりあえず」

ウィルは力なく言った。

「僕は王族、そしてトムはすんごい剣士」

「ただすごいってもんじゃない！」

ローレイが声を張り上げた。

その顔は、その厭味ったらしいいつもの顔から想像できないほど、輝いている。

「武芸の世界では、世界の頂点に立つ男だ。士族はもっとも武芸に優れた部族。そしてバディの称号を得られるのは、一族で頂点に立つ者だけ。トムさんは、さらにその歴代バディの中でもひとときわ優

れていたと聞いている」

ローレイが興奮しているのをウィルは肌で感じ取った。

「そんなにトムはすごいのか……」

「やめてくれ！ 私はバディ失格なんだ」

突然声をあげたトムに、ローレイとウィルは驚いた。

「どうして？」

ウィルが驚いて聞いた。

「私はお前のお父さんを守り抜くことが出来なかった」

「ラゼル王は原因不明のご病気でお亡くなりになったんです。トムおじさんのせいでは」

「いや」

トムはローレイをさえぎった。

「確かにエレンが亡くなった時には、全く効く薬がなかった。だがラゼルの時には、死ぬ少し前に病気の進行を遅らせる薬ができたんだ。私は届けることが出来なかった。私は、バディ失格なんだ。みすみすラゼルを死なしてしまった」

トムの声は少し震えていた。

「でも」

ウィルはトムを慰めたくて必死になった。思いがけず、わずかな薬学の知識が役に立つ。

「お父さんの病気はとても進行していたんだ。死ぬ寸前だったんですよ？その薬ができたのは。それならどちらにしろ無理だ」

「だが」

「薬を届けたところで、きつとお父さんはそんなに生きられなかったよ」

「確かに数日長く生きられる程の効果しかなかったかもしれない。でも、その数日で世の中が変わっていたのかもしれないんだ。エカルイア家が政治を握るのを阻止出来たかもしれない」トムは両手で自分の髪を掴んでいた。

「もっと言えば、エカルイア家が絡んでいるに違いないその病気をに感染するのを防げたかもしれない」

ローレイが静かに言った。

「母が言っていました。あの病気はまだ解明されていないと。医族の者達が長年必死で研究しても、未だに治す薬ができていない病気で。トムおじさん、そして誰にも防ぐことは出来なかったでしょう」

「そうだよ！」

ウィルは初めてローレイに賛同した。

「僕達士族は皆今でもトムおじさんのことを誇りに思っています」

「ありがとう」

トムは悲しそうに笑いながら、肩をすくめた。

「でも今は話をすすめよう。話さなければいけないことが、まだ山ほどある」

明かされた真実 4（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

明かされた真実 5

- 1 . アルノーの横暴をとめる
- 2 . そのためにペガサスを見つける

ウィルがしなければならぬことを、トムは単純明快にこの2つにまとめあげた。

たったこれだけのことだとも言うように。

「ちよつと待つて」

ウィルはさすがにあきれて笑っていた。

「そんな簡単にトムは言うけど、アルノーの横暴をとめるっただって、相手は現国王でしょ？　たくさんの軍隊も持っている。適うはずがないよね？　ハハっ……それにペガサスを見つけて、ちよつと待つてよ……。だいたいペガサスって実在する生き物なの？　確かにこの国の守り神として人々に知られてるのも僕は知ってるけど、実在するとは聞いたことがない……。それも僕が無知なせいなの？」

「いや」

答えたのは、真顔のローレイ。

「俺も実在しないと思っていた。世界の9割以上の人実在するとは思っていない。守り神ではあるが、それはこの世界の象徴とかぐらいにしか思っていないだろう」

「王族の者とそれと一握りの周りの者だけがこの国の、今は1国しかないから、この世界のことになるが、その秘密を知ることができる」

トムの声には揺るぎがない。
バディ。

国王の第一の家臣、いや片腕とでも言うべきか。

ウィルは悟った。

トムは知っている。

「でも……でも、僕が旅にでたところで、僕一人じゃどうすることも……」

「お前一人じゃない。ローレイ君もいる。お前のバディだ」

ウィルは自分の耳を疑った。

「……。はっ？ え……誰が？」

「ここにいるローレイ君だよ。わざわざお前のために来てくれた」
言葉がでないウィルに向かって、トムは続けた。

「まだ若いが非常に優秀な剣士だ。すごく心強い」

「ありがとうございます。トムおじさんにそう言われるなんてとても光栄です」

ローレイはトムにうやうやしく言った後、すぐに表情を変えウィルに向かってにやっとした。

最悪だ！

ウィルは思った。

よりによって何でこんなやつが？

「僕にはバディを選ぶ権利はないの？」

「バディは士族の村で選出され、長老によって任命される。それに
例えお前が選ぶとしても、ローレイ以上にいいバディはいないだろ
う」

ウィルは下唇を噛んだ。

まあ、ここは我慢しても。

「でも僕にはトムもいる！ そうだろう？」

ウィルは自分を鼓舞するように言った。

トムさえいれば何とかなる、ウィルはそう思った。

だがトムの次の言葉はウィルを再び啞然とさせた。

「私は行けないんだ」

「ど…どうして？」

ウィルが驚いて聞いたとき、カチャリと音がした。

ローレイがスプーンを置いたのだ。

「そのことに関しては、僕も前々から気になっていました」

「私はもう年をとってしまったている。昔のようには体が動かないだ
ろう」

「そんなことない！」

ウィルは必死に言った。

「毎週僕に剣術を教えてくれてるじゃないか！ いつもすごい剣術
を見せてくれるじゃないか！」

「私も行きたいのは山々なんだ」

トムの顔は苦渋に満ちていた。

「でも、私はお前のバディじゃない。お前のお父さんのバディだ」
「でも！」

「それに私は今病気を患っている。それはお前も承知だろう？ ずっと治っていない」

ウィルは黙った。

確かにそうだ。

フランクじいの薬が全く効いていないようだった。

「だがもしこの病気が治ったら、そしたらお前の旅に同行しよう。

お前の護衛の一人として」

ウィルは呆然と、トムを眺めた。

病気のトムをつれ回すのは、さすがに気がとがめる。

だがショックは大きい。

トムと別々になる！

これまでトムとはいつも一緒だったのに！

不安がウィルを体の奥から襲い始めたが、ウィルはそれをそのまま無理やり丸呑みにした。

今は考えまい。

「トムおじさんは土族の村に帰って静養なさるんですね」

トムは頷いた。

「お前たちを来週見送った後、フランクと村に移り住むつもりだ」

「来週……」

ウィルは呟いた。

「本当はもう1、2年先のはずだった。だが、土族の村からの便りで無視できないことがあったんだ。そのことについては、ローレイ君のほうが私よりも詳しいだろう」

「ええ、事の詳細は長老から伺っています」

ローレイは少し身を乗り出して言った。

「土族は密偵を各地に派遣しています」

「密偵？何のために」

ウィルが聞いた。

「もちろん、エカルイア家の動きを知るため。土族は常に賢族に忠誠を尽くしてきたが、

今は縁を切っている。だが、横暴を防ぐため情報網今でもをはりめぐらしてはいるんだ。そして今回の気になる情報とは、ポルテフラ島に怪しげな動きがあるというもの」

「ポルテフラ島？」

ウィルはトムを見て言った。

「トムから聞いたことがある。確か枯れた島って」

「ああその通りだ」

トムが頷いた。

「何故かは知らないが、あの島の生物は多くが死んでしまったと聞いている。別名死の

島だ。あの島にはもう人は近づかないと聞いていたが……」

「はい、その通りだったんですが、最近王国の船が度々訪れている

そうなんです。それも人目を避けているかのように、夜に上陸するんです。こちらが派遣しているスパイの情報によると、船でその島に行くのは王国の船では珍しく十数人だとか。そのためその怪しい動きを詳しく洗うのは困難なんです」

「ということは、僕達は旅に出たら、まずポルテフラ島に向かうの？ その謎の動きを説明するために？」

「いや、そうではない」

ローレイが言った。

「エカルイア家の者たちが怪しげな動きをしているのは確かに気になることだが、その動きもお前がさつさと王の地位につけば封じられる。だから先に都に……」

「でも、そう簡単には僕は王になれない！ なれたとしたら、それは奇跡中の奇跡だ。ものすごい奇跡が起こらないと、トムに言われたことは現実にはならない」

ウィルが蒼白になりながら言った。

トムは否定しなかった。

「確かに奇跡とか何かそういうものがないと、この世界は救えない。危険な旅だ。かつ過酷であるのも確かだ。ただでさえ、王の試練とはそれは大変なものだ」

「王の試練？」

「お前がこれから挑むことになる試練だよ。賢族の者が玉座につくには、まず王の試練と言われる旅に出て、その勇氣、知性、行動力など、王として必要な資質をペガサスに承認してもらわなければならない

らない」

「承認がなければ……」

「ああ、正式な王にはなれない。今の国王アルノーは承認を得ていない。旅にも出ていないからな。だからやつは正式な王ではない。その証拠にやつは歴代の王たちが持っていた力を持っていないからな」

「力？」

「いや……そんなことは今はどうでもいい。いいか、この王の試練は、国が乱れていない時に行われたとしてもそれは厳しいものだった。命を落とす者も、挫折するものもいた」

「命を落とすもの！？」

「ああ、そうだ。しかし、お前はただでさえ大変な試練を、この国が乱れた時代に行わなければならない……」

明かされた真実 5（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

旅立ち 1

告知から一週間で、ウィルは今までの知識の量を超えるほど多くのことを学んだ。

一週間はあつという間に過ぎ、いよいよ明日が出発の日になった。

今、ウィルは荷造りをしている。

持つて行くのは必要最低限にしろと、トムから言われた。

ベッドに広げられ衣服を取りあげた時、ある包みが音をたてて、床に転がった。

一週間前にトムから手渡された、王家の木箱。

その蓋には、この国の守り神ペガサスが彫られている。

「でも何の手掛かりもないのに、どうやって探し始めるんだい？」
1週間前そうウィルが聞いた時、トムは棚の引き出しからこの木箱を取り出してきたのだ。

トムの話では、ウィルのお父さん、つまりラゼル王が死んだ時に、突如この木箱が枕元に現れたらしい。

確かに長い歴史を感じさせる風情をまとっている。

だが何か不思議な力を持っているようには見えない。

試練へと導く木箱。

この木箱を手にした時に試練が始まる、とトムは言った。
ということは、もう試練は始まっている！

胃がふわつと持ち上がるような感覚。

いけない。

ウィルは自分に言い聞かせた。

深く考えたら、怖くなるだけだ。

自分が逃避しているということは、分かっていた。

情けないと思いもした。でも今のウィルには、全てを受け入れることは不可能である。

ウィルは木箱もリュックに詰め込んだ。

ガチャつとドアが開いて、トムが入ってきた。

「荷造りは進んでるか？」

「うん、もう少しで終わるよ」

「そうか……」

気まずい沈黙が流れた。ウィルは、何を言えいいか分からなかったので、黙々と荷造りを進めた。

今日は朝から、二人ともろくな会話をしていない。

「これが何か知っているか？」

トムが差し出したのは水晶だった。だが普通の水晶ではない。上に白い小さなつまみがあり、中には銀色に光る液体が入っていた。

「使い方は詳しく知らないけど、何なのかは知っているよ。ルクでしょ？」

「その通り。ゴホッ…これはルクというこの国の現通貨だ。来て見てごらん」

ウィルは立ち上がってトムに近寄り、覗き込んだ。

「このつまみをひねると、順に大きさの違う3つの穴が現れる」

説明をしながらトムは、実際につまみをひねって見せた。穴は順に大きくなっていった。

「一番最初が一番小さい穴から出てくる一滴が1ルクだ。他の二つは、別に軽量力

ツプで量らな…ゴホッ…ければならない。高額のを買う時は一番大きい穴を使

うといい。分かったか？」

ウィルは無言で頷いた。

「よし、それでいい…ゴホッ、ゴホッ」

トムは激しく咳をした。トムの病気は日増しに悪くなっているようだった。

「すまん。ゴホッ、それでこの中にはご覧の通りあまり多く入っていない。だから、自分で…ゴホッ…稼げ…ゴホッ」

「どうやって？」

「薬草を摘んで、薬を…ゴホッ…煎じて売るんだ」

「それでトムとフランクじいは…」

「要らないと思っていた知識が、いつどんな形で役に立つことになるか、それは誰も悟ることができない。肝に銘じておきなさい」

ウィルはゆつくりと頷いた。

トムの説教を聞くのは、明日から当分お預けになる。

「だが…お前のお父さんは、そして他の歴代の王たちも試練を楽しんでいた」

「え？」

「確かに危険な旅ではあるし、何から手をつければいいのか分からず八方ふさがりになることもあった。だが、彼らは旅を楽しんでいた。お前のお父さんはよく言ってたよ」

そこでトムは懐かしむように微笑んだ。

「試練だからと言って、楽しんじゃいけないという道理があるのかい？　つとな」

「試練を楽しむ……」

よほどの勇気がある人じゃないと口にできない言葉だと、ウィルが思った。

試練を乗り越えてきた人たちは、猛者の集まりだったのかもしれない。

「まあ、話はこの辺でやめておこう。あとはお前が見つけなければならぬことだ」

「うん……」

試練の前に試練の秘密を知ってしまったものは、試練を乗り越えることはできない。

そういう定めがあるらしい。

試練を乗り越えることができないということは、ペガサスに承認してもらえないということ。

なんて余計な規則なんだ。

ウィルは心の中でつぶやいた。

旅立ち 1（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
次回やっと旅立ちです。（TOT）

旅立ち 2

次の日、ウィルはいつもよりも、かなり早く目が覚めた。
まだ外は暗い。

隣のベッドから、ローレイの寝息が聞こえる。

ローレイはウィルに背中をを向けて寝ている。

ウィルはその背中をぼんやりと見つめた。

1歳しか変わらないのに、自分とローレイが体つきも精神的なものも全然違うことが、嫌でもこの一週間で分かった。

ウィルが旅立ちの日が近くなればなるほど、落ち着きが無くなり不安が増していつているのに対し、ローレイは出発を明日に控えても悠然と構えていた。

いつかここを出るんだ！

今まで何度こう思っただろうか。

太陽に照らされてキラキラと美しく輝く海を眺めながら、希望で胸を膨らませていた。

だが、こんな形でこの山奥を出ることになろうとは思ひもしなかった。

希望なんて少しでもあるのだろうか。

自分の目の前に、壮大な世界が広がろうとしている。ずっと待ち望んでいた「時」が、来ようとしている。

だが、もうすぐ訪れようとしている劇的な変化を前にして、ウィルはひたすらおびえ、うずくまるばかりだった。

自分を情けないと思ひもしたし、激しい自己嫌悪に陥りもしたが、今のウィルにはすべてを受け入れることは到底無理だった。

朝食時。

みな無言でひたすら食べていた。

カチャリ、カチャリとスプーンやフォークが食器に当たる音だけが、鳴り響く。

ウィルは、この一週間よりも増して食欲が無かった。

舌が正常に機能していないのだろうか。

口に何を入れても味がしない。それでも、ウィルは無理矢理朝食を詰め込んだ。

唐突にトムが口を開いた。

「船が出るのは12時。それまでに、まだ時間がある。ウィル、この後少し2人で散歩をしないか？」

外に出ると、朝日が眩しかった。

澄み渡った青空に雲の白さがよく映えている。

「とうとうこの日が来てしまったな」

トムは苦笑いをしながら言った。

「お前はずっとこの『時』が来ることを望んでいたが、外の世界がに出たらきつとこのエシミス島が恋しくなるだろう……ゴホッ、ゴホッ」

「全然よくならないね」

ウィルは、トムをじっと見ながら言った。

「ん？」

「病気だよ。咳がまだひどい」

「そうかな」

トムは弱々しく笑った。

「でも今日は調子がいいほうだ。体がいつもよりも軽い」

二人は並んで、ゆっくりと歩いた。

二人とも、自分たちがどこに向かっているか、言わなくても分かっていた。

この先に海が広く見渡せる場所がある。

「ずっと帰りがかったんじゃない？」

ウィルがこの一週間ずっと聞いてみたいと思っていた質問。なぜかなかなか言いだすことができなかった。

「どこに？」

「士族の村に」

「……確かにふるさとが恋しくなる時がなかったって言ったら嘘になるが、俺はこの生活がとても好きだった」

「閉じ込められていたのに？ 僕のせいで自由を奪われていたのに？」
トムは、ウィルが何を思っているか理解したらしく、顔をしかめた。

「ウィル、私はお前といられて幸せだった。これからでもできることなら一緒に行きたかったんだ。お前を実の息子のように思っている。それはお前もよく分かっているだろう？」

ウィルはそっぽを向いた。

「トムは僕がいなかったら、どこへでも自由に生きることができたんだ」

「俺は自由だったさ。もともと。自由だったからここに君と留まることを選んだ」

「とにかく気をつけるんだぞ。たまには手紙をくれ。士族の村の住所を書いた紙を、この前渡しただろう？宿から送ることができるよ」

ウィルは別の方を向いたまま、無言で頷いた。

「よし。それはそうと、さしあたっての目…ゴホッ…目的地ちゃんと覚えていくかい？」

トムは明るい調子をつくりながら言った。

「覚えているよ。華族の人のところだろう？僕のお母さんの妹の…

…」

「そうだ」

トムは頷いた。

「お前のおばに当たる人だ。私も昔よくお世話になったよ。とても親切な人だった。手紙でお前のことをちゃんと知らせてある。きつとお前のことを、よくしてくれるだろう。ぜひ俺がよろしくと言つてたことを伝えておいてくれ」

「分かつ」

「トムさま！ウィル殿！」

向こうから、フランクじいが、はあはあ言いながら走って来た。手には、ずだ袋を持っている。

「フランクじい」

フランクじいは、ウィル達のところまで来ると、息が整うまで両手を膝に当てて下を向いていた。

「フランクじい、どうしたの？」

「ウィル殿……」

フランクじいは、顔をあげた。

「お別れを言いに来たのです。それと、これを渡しに……」

フランクじいは、手に持っていたずだ袋をウィルに差し出した。

「何これ？」

ウィルはうさんくさそうにずだ袋を見ながら聞いた。

「酔い止め、風邪薬などの薬が入っています。売れば少しは生活の足しになるでしょう」

「ありがとうございます」

ウィルはずだ袋を受け取った。

フランクじいの気遣いが、とても嬉しかった。

授業は恐ろしいくらいつまらなかったが、思えばフランクじいにも随分お世話になってきた。ウィルは胸が一杯になり、ずだ袋をぎゅっと握りしめた。

ポトリ。

ウィルの額に何かが当たった。

雨だ。

突然雨が、ザーッと音をたてながら降りだした。

ウィルは空を見上げた。

「晴れているのに……」

3人は、濡れるのもかまわずそこに突っ立っていた。

ウィルは、3人とも同じことを思っていることが、分かった。

美しい。

緑が雨に濡れ、太陽に照らされ一層みずみずしく輝いている。

でもその一方で、なぜか胸騒ぎがした。

不気味だったのだ。

晴れと雨が混じるといふ滅多にない現象が、ウィルの不安を駆り立てる。

やがて雨が止んだ。

「トムおじさん！」

今度はローレイが走って来た。

少し顔が青ざめている。

ウィルは、すぐに何かが起きたことを悟った。

トムも何か察知したようで、こちらからローレイの方に駆け寄った。

ローレイはトムのそばに來ると、間髪を入れずに言った。

「トムおじさん、下の町に王国の者達が来ています！町の人が言うには、何かの偵察でこの島に。土族のこの前の報告のとおり……」

トムはゆっくりと息を吐いた。

そして言った。

「すぐに出発だ。船に乗り込んで隠れておくんだ！」

一同は一斉に走り出した。

旅立ち 2（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

旅立ち 3

トムとウィル、ローレイは町に向かって走っていた。

「いいか！客船のところについたら、すぐに中に入れてもらうんだ。チケットは購入してある。ほら」

トムは、走りながらチケットを2枚差出した。

ウィルは受取ろうと手を出したが、横からローレイがチケットを先に取った。

ウィルがチケットを安全に保管する能力もないと考えているらしい。ウィルは、黙ったまま前を向いて走り続けた。リュックが思ったよりも重く、息が切れる。

「トム、何の偵察でここに？」

「分からないのか」

答えたのはローレイだった。

「お前を奴らは探しているんだ。お前はやつらにとって、邪魔な存在だからな！」

ウィルは血の気が引いた。

「大丈夫だ。見つかりはしないよ。お前がラゼルの子だと判断する材料を持っていないんだから」

トムはウィルを安心させるように言った。

それでも、ウィルは走るスピードを少し上げた。

ようやく町に入った時、ウィルは人が多いのに驚いた。

今までに何度か来たことがあるが、自分の記憶がまちがっていないければ、もう少し静かな町だったはずだ。しばらくして、ウィルはそわそわしている人が多いのに気づいた。ひそひそと立ち話をしたり、相手に耳打ちをしたりしている人がやけに目立つ。

「王国の者たちが来たから驚いているんだよ」

トムは、ウィルが周りの様子に疑問を抱いているのが分かったらしい。

「この島は前にも言ったとおり、田舎でとても…ゴホッ…静かな町だ。王国の者が来るなんてこと…ゴホッ…はめったにない」

「トムおじさん！」

ローレイが突然立ち止まった。

「前方から……」

ローレイに言われて、初めてウィルは気づいた。

水色の軍服を着た者達が、こっちに闊歩して来ている。道の真ん中にできていた人だかりも、その者たちが近付くと、両脇に消えていった。ウィルは震え上がった。ここで、僕は捕まってしまうのだろうか……。

「大丈夫だ。さっきも言っただろう？」

トムが落ち着きをはらった声で言った。

「あいつらはお前の顔を知らない。きつと私のことも気付かないだろう。さあ、脇の人々の所に紛れ込むんだ」

3人は脇にいる人々の中に滑り込んだ。ウィルは大丈夫だと分かっている。でも怖かった。近くにはいた大柄の男の後ろに隠れた。

「何の偵察だと思う？あんだ」

横に立っていたエプロンを着た女性が、大柄な男に聞いた。どうやら夫婦らしい。

「さあ、誰も知っている者はいないんだ。誰かが悪いことをしたんじゃないか？それで、そいつを探しに来ているとか……」

「悪いことって、わざわざ王国の者が十数人もお出ましなんてどれほど……」

「ああ、もしそうならよっぽど悪いことをしたんだ。捕まったら死刑じゃないか？」

王国の者達の列が近付いてきた。

近くの人々の話し声がぴたりと止み、あたりは静かになった。

闊歩する足音だけが聞こえる。

ウィルは男の影からそっと覗いた。水色の軍服がすぐ近くに見えた。肩にはワッペンがついている。

ペガサスの絵、つまり王家の紋章だ。

ウィルは恐怖心も忘れて、食い入るように彼らを見つめた。

その時だ。

彼らの一人がこちらを向き、一瞬ウィルと目が合った。どきりとした。

相手はかなり若い。

ウィルとあまり年齢が変わらない。なぜか不思議な感じだ。

彼は、すぐに視線をもとに戻した。

何事もなくその一団は通り過ぎ、人々の話し声が次第に大きくなっていく。

隣でトムがふーっと息を吐いた。

「さあ、さつさと船乗り場へ行こう」

3人は再び走りだした。

「まだ出発までに2時間ほどありますぜ」

その船員はなまった話し方をした。

「いいんですかい？王国の者たちが来ると言って、町は大騒ぎしてますわ。見物しないでいいんですかい？」

「かまわない」トムはそっけなく言った。

ローレイはチケットをその船員に渡した。

「125号室。入って三つ目の部屋ですわ。まちがえねーように」

ウィルはトムを振り返った。

トムは微笑んでいた。

「笑顔で別れることにしよう。ウィル元気でな。手紙を忘れるなよ」
ウィルは頷いた。

何か言おうと思った。

だが言葉が見つからない。

後ろから、船員たちが荷物を運び入れながら、威勢のいい掛け声をかけているのが聞こえる。

「今までありがとう」

ウィルは口ごもりながら、なんとかそれだけを言った。
本当は、言いたいことがたくさんあった。
いろいろな感情が体の奥からぐつとこみあげてきている。
でも、言葉にうまく言い表せない……。

ウィルは困惑して、トムを見上げた。

トムはゆっくりと頷いた。

ウィルは悟った。

そう。

いつだって。

トムは分かってくれている。

唯一の家族で唯一のウィルの理解者。

そして今、僕はこの人から離れようとしている。

別離の悲しみと恐怖がウィルの心を一杯にし、ウィルは騒ぎたいと
いう強烈な気持ちにかられた。

しかしウィルが次にしたことは、唇を噛んでトムに背を向け、船に
向かって歩き出したことだった。

それがウィルの精いっぱいの理性だった。

唇を血が出るほど強く噛んだ。

こんな時にトムを困らせてはいけない。

その気持ちだけが、ウィルを何とか奮い立たせた。

トムは、背後から心配そうにウィルの後ろ姿を見ていた。

はっとするほどひ弱な背中。
頼りない肩。

トムは目を涙でうるませた。

「ローレイ君……」

「分かっていきます。僕に任せてください。何年もこの日のために修行を積んできたんです」

ローレイはトムを励ますように言った。

「あいつは……あいつは、ああ見えても……ゴホッ……今はまだ頼りなくても」

「分かっていきます。心配しないでください。僕は土族です。さらにトムおじさんの甥です。」

その精神は、まだ完璧とは言えなくても、しっかり受け継いでいるつもりです。そして、あいつが成長したら、その時は、トムおじさんから言われたとおり……」

ローレイは腰に提げている剣をぎゅっと握りしめた。

「うん、ローレイ君。君がいるから、だいぶ……ゴホッ……安心できる。ありがとう」

トムは再び笑顔を浮かべた。

「こちらこそ、短い間でしたがありがとうございました。トムおじさんに会うことができて本当に光栄でした。お体をお大事に」

ローレイは回れ右をし、船の中へ向かった。
さっそうとした、揺るぎない歩調で。

かくしてウィルの壮大な冒険が、幕を開けた。

旅立ち 3（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

2人の少女 1

「暇だなあ」

ウィルは小さく独り言を言った。

ここ4日間、ウィルはほとんどデッキの上で過ごした。

海を眺める以外することがなかったのだ。

最初の日は何もかも新しく、興味をそえられるものばかりだったが、すぐにあきてしまった。

一番興味をそそられたのは、飛族^{ひやく}。

飛族、別名 蟻族^{ありぞく}は、平均的に身長が低い族で、主に郵便の仕事を請け負っている。

驚いたことに、彼らは海に漂^{ただよ}う船にも郵便物を届ける。

「飛族」という名の通り、彼らは飛んで仕事をしている。だが、羽が生えているわけではない。羽を使っているのだ。正確に言うと、彼らは大ワシに乗って、この世界を飛び回る。彼ら以外に大ワシを扱える人はほとんどいない。大ワシの大きさはここによってそれぞれだが、大人は最低でも2メートルある。

ウィルは最初大ワシを見たとき、驚いて尻もちをついてしまった。

（ローレイはその瞬間をバッチリ見ていた）

「彼らは世界で一番働き者の族よ。あいつらは、ああ見えてかなり金持ちなんだぜ」

そうケンは言った。

ケンはこの船の船員で、チケット受付をしていた男だ。人なつっこい性格の持ち主で、ウィルがデッキにいる時に何度も話しかけてきて、今ではすっかり友達になっている。

「おめえさん、名前は？」

ケンにそう聞かれた時、ウィルはとまどった。初日のことだ。トムの厳しい声を思い出した。

他人に自分の正体を明かしてはいけない。本名も絶対教えるな！

「えっと……」

「ウォルト・キャラハンだ」

ウィルは振り返った。ローレイが立っていた。ぶすつとした顔をしている。

「そ……そうなんだ。僕の名前はウィ……ウォルト・キャリ……キャ……
……キャラハン！」

ウィルは慌てて言った。

ローレイは、そのままその場を去って行った。

「そうか」

ケンにはつこりして言った。

かなり鈍感らしく、ウィルのぎこちない反応を何とも思わなかったらしい。

「俺はケン・オハラ。よろしく。これから一週間仲良くやろうぜ」

もう一人友達ができた。

友達といっても3歳の子だ。

名前はカミーユ・オジエ。

母親に抱かれながら、船酔いで気分が悪くて泣いているのをウィルは見つけた。ウィルは酔い止めの薬を譲ることを申し出た。

「いいんですか？」

母親は目を輝かせて言った。

だがその母親は、ただでは薬を受け取ろうとしなかった。

ウィルは困って、その場を通りかかったケンに相談したところ、ケンは薬の値段の相場を教えてくれた。それで取引は無事に終わった。

それ以来、カミーユはウィルを見かけると、「お兄ちゃん！」と言って、手を振ってくれるようになった。

ウィルは再び溜息をついた。ためいき ケンが友達になったとはいえ、ケンは仕事があつてずつと話はできない。カミーユは幼すぎる。ローレイは問題外。尻もちをついた所を見られて以来、ウィルはいつそうローレイを避けていた。

離れているつもりだった。

だが、実際は違う。ローレイは絶えずウィルのことを自分の視野内にいれていた。もちろんウィルに気づかれないところからだが。ウィルが自分の主としていくら不服でも、ローレイは自分のなすベきことを理解していた。

ウィルとローレイが、精神的に全く違うのは、実は当然のことである。

ウィルは長年山奥でのんびり暮してきたが、ローレイは剣を持ち上げることもままならないくらい幼い時から、修行を積み重ねてきた。今自分がいるポジションを掴むために、日々の鍛錬を少しも怠らなかつた。

ウィルはバディがローレイだと分かった時大いに失望をしたが、ローレイがそれ以上に失望したことは、容易に測り知れよう。

賢族けんぞくかつラゼル王の息子とあつて、それなりに期待は大きかつた。まさか甘つたれた、無知の少年だとは思わなかつた。

仕方のないことだ、ローレイはすぐに思った。こんな山奥で世界から隔離されて暮らしていたら、誰だつて……。

そこで、ローレイは少しでも自分の立場を慰めるために、ウィルを観察して、何か賢族の素質のようなものを探すことに、専念し始め

た。今のところ、^{いまだ}尽く失望に終わっているが……。

「はあ」

ローレイもまた、ウィルと同じように溜息をついた。ローレイはウィルより気丈とはいえ、不安がないわけではない。現実をより知っているため、むしろその不安は大きかった。

これから自分たちがやろうとしていることは、1%でも成功する確率があるのだろうか。無茶なことだとあきらめて、エカルイア家の横暴に関しては何か他の策を練るほうがいいんじゃないだろうか。

いや。

長老はきっぱりと言った。ローレイがエシミス島に旅立つ前のことだ。

我々士族や他の族の者が動くとなると、かなり目立つ。特に士族は、エカルイア家から危険視されている。スパイも続けるのが非常に困難になってきている。海ももはやエカルイア家の監視下。よって怪しまれるような行動はできないし、他の族との連携もうまくはできない。下手に動くと戦争が起きる。そしたら多くの犠牲者が出て、取り返しのつかないことになるだろう。

長老はローレイの目をまっすぐ見て言った。

ローレイ、なるべく小さく事を済ませるのがいいんだ。関わる人の数を減らす。そうすれば、犠牲者の数も減らすことができる。このことを肝に銘じておけ。

確かにその通りだ、とローレイは思った。だが、ローレイは納得できない。

どうしてわざわざこのへボを選ばなければならないんだ？
こうなった理由は、2つ考えられた。

1つは、ウィルがこんな無能な奴だと誰も思わなかったこと。

もう1つは、こんな責任の重い仕事をやりたいと思う人がいなかった。

また、ローレイは溜息をつく。

酔い止めではなく、溜息止めの薬はあるのだろうか。

ローレイはぼんやりと考えた。

2人の少女 1（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

よろしければ、小説紹介のページで投票をお願いします。

2人の少女 2

「ドン、ドン、ドン」

誰かが激しく部屋のドアをたたいた。

船に乗って4日目の朝。ウィルはまだ着替えの途中だった。ウィルがローレイを見ると、ローレイは顎でしゃくってドアを開けるよう合図した。

ウィルは指図にむっとしながらも急いで着替えて、ドアを開けた。

立っていたのはウィルと同じくらいの年の少女だった。頭の上から薄汚いマントをすっぽりとかぶっていたが、肩に優雅にかかっているブロンドの髪にとても不釣り合いである。

「何のようですか？」

「あなたが酔い止めの薬を持っていると聞いて……」

少女は息を弾ませて言った。

「私の連れが、酔いが激しくて大変なの。少し分けてもらえないかしら。もちろんルクはちゃんと払うわ」

少し気取ったような話し方だった。差し出した水晶には、身なりに似合わずかなり入っている。三千ルクのメモリ近くまで入っていた。

「かまわないですよ」

ウィルはベッドの所にある薬を取りに行った。

「でも、少ししかありません。これで最後になります。はい、どうぞ」

「どれくらい飲めばいいのかしら？」

少女は受け取った袋を持ち上げて言った。

「一日に二回です。朝と夕に一つまみずつ。三日分はあると思います」

「三日分……」

少女は心配そうに言った。

「まあ、仕方ないわね。ないよりはマシだわ」

少女は自分のバッグに袋をしまった。そのバッグが、華やかな飾りが施してあり、見るからに高価な品物であることにウィルは気付いた。

「それで、ええーっと。いくらかしら。二百ルクくらい？それよりもっと？」

「いいえ」

ウィルは驚いていった。

「二十ルクで結構です」

「二十ルク？」

少女は目を丸くした。

「あら意外と安いよね」

ウィルの水晶に二十ルク移すと、少女はお礼を言って去っていった。ウィルが部屋の方に向き直ると、ローレイがじっとドアをにらんでいるのが目に入った。

「何だよ？」

「さっきのやつ……」

ローレイはそのまま黙り込んでしまった。決まってこうだ、ウィルは苛立ちながら思った。き誰も何も教えてくれない。

ウィルはその理由が分かっていた。
まるつきり信用されていないのだ。
能無しだと思われる。

その日は雨の日だったので、ウィルは部屋の中にいた。

もちろん、ムカツクローレイも一緒だ。ウィルは、「基本薬学」の本を開いた。まだルクに余裕はあるが、いつ不足するか分からない。ルクを貯めて損はないだろう。

読み始めて10分もたたない時。

「ドン、ドン、ドン」

またドアをたたく音がした。

ウィルがまたドアを開けると、立っていたのは先程の少女だった。今度はもう一人別の少女が後ろに立っている。後ろの少女は、先ほど薬を買いにきた少女の髪が優雅にカールしているのに対し、ストレートの黒髪だった。

ウィルはドキリとした。

もしかして、渡す薬の種類を間違えたのだろうか？
それで酔いが悪化して、クリームをつけにきたとか？

「な…何か？」

「ずうずうしいことは十分承知よ」

少女は、承知しているとは思えない口調で言った。

「だけど、助けが必要な。しばらく、この部屋にいらせてもらえないかしら？」

「ええ…っ」と

クレームでなくて、ウィルはほっとしたが、それと同時に思わぬ要求に困惑した。

「駄目だ^{だめ}」

後ろから鋭い声がした。もちろんローレイだ。

「俺たちは見ず知らずの人間をややすと中に入れるほど、無用心のバカじゃない。他をあたってくれ」

「…だそうです」

ウィルは申し訳なさそうに言った。

だが、少女は引き下がらなかった。

「他はあたしたちが信賴できないのよ。お願い、ちゃんと事情は話すわ。ルクもいくらだって払う」

少女はウィルの手を掴んだ。

「ね、お願い」

ウィルは手を振り払うことができず、困り切って後ろを振り返った。

「駄目だ」

ローレイは迷わず繰り返した。

「俺たちは、ただでさえ人よりも用心」

「あ！」

突然後ろのほうに立っていた少女が、小さく叫んだ。

「ローズ。あの男がこっちに向かってくるわ。何か書類を読んでいて、私たちにはまだ気づいてはいないけど。どうしよう！ 気づかれるわ」

「もう！」

ローズと呼ばれた子はそう言うと、突然ウィルを突き飛ばし、後ろ

の子の手を掴んで部屋の中に入り、ドアをボタンとしめた。

ウィルは当然後ろにひっくり返り、この船では記念すべき2回目の尻もちをつくことになった。

「はあ、なんとか助かったわ」

ローズはほっと胸を撫で下ろした。横で黒髪の少女がおろおろとしている。

ウィルは立ち上がりながら、ブーブーとローズに向かって抗議した。ローズは全く意に介さないようで、にっこりした。

「あ、私はローズ。ローズ・アルカデルト。こっちはリイ。リイ・ミンスー。よろしく」

「おい」

ローレイが食ってかかった。

「俺たちは、君らにかまっている暇はないんだ。下手にめんどろなことにまきこまれたくない。今すぐに出て行ってくれ。俺が剣を抜く前に」

リイとローズから紹介された子は、怯えて数歩後ろに下がった。だが、ローズの方はというと、怯えるどころか数歩前に歩み寄った。

「あら、脅しているつもり？」

ローズは顎をつんと上げた。

「めんどろに巻き込まれたくないと言ったけど、無駄よ。明日の午後には、この船に乗っている人全員が巻き込まれるわ！」

「どういう意味だ？」

ローレイは眉をひそめた。

「ここからは取引よ。私たちは、あなた達に重大な情報を教える。

代わりにあなたたちは、私たちをかくまう」

「その情報が、俺達にとって重大かどうかはわからないじゃないか」
「今さっき言ったでしょ！」

ローズはイライラした調子で言った。

「船に乗っている人全員が巻き込まれるの」

「あの……」

ローズの背後に立っていた、リイが言った。

「本当に聞いていた方がいいと思います。もしかしたら、逃れる手段が何かあるかもしれない……。うまく言えないですけど、本当に重大なことです。信じてください」

リイはじつとローレイを見つめた。

さすがのローレイもリイの必死な様子に少し考えてるようだ。

「君たちのカラーは？」

「肌色。つまり、平族^{へいぞく}よ」

ローズが答えた。

「平族？」

「ええ、悪い？　もしかしてあなたたちは平族奴隷派の人達？」

ローズは軽蔑するように言った。

「平族奴隷派？　何それ？」

ウィルが聞いた。

「ご存知ないのですか？」

リイが目を丸くして言った。

「平族奴隷派というのは、簡単に言えば、私たち平族が他の族の奴隷となるべき身分だと考えている人達のことを指すんです。平族奴隷派は今のところ少数派ですが、最近増えてきているんです。あなたたちは……」

そこでリイは口をつぐみ、不安そうにウィルを見た。

「もちろん反対だよ！ そんなのひどい！」

ウィルはその話に憤慨しながら言った。

リイがにつこりした。

「あなたは？」

ローズがローレイにツンとした表情で聞いた。

「もちろん反対派だ。しかし……」

「しかし？」

「それとこれとは話が別だ。まだ君たちの取引を飲んだわけではない」

ローズはフンと鼻をならした。

「あなた、踏ん切りが悪いわね」

「疑問に思うことがある。別に軽蔑しているわけではないが、平族の人たちは貧しい人が多い。なのに、お前たちは大人でもないのにルクをたくさん持ち、そのような（ローレイはローズのバッグを指差した）高価なバッグを引っさげている」

「大人でもないって、それはあなた達も同じでしょ？ それに、このお金もバッグも紛れもなく私たちのものよ。盗んだりなんかしていない。命を賭けてもいいわ！」

ウィルは、ぼかんとしてローズを眺めていた。

今まで女の子とかかわったことがないため、ローズが珍しかった。

ローレイが必死に考えをめぐらしている間、ウィルは女の子ってみんなこうなのだろうか、と呑気^{のんき}に考えてた。

「取引成立ということでもいいかしら？」

ローズは左側の髪を耳にかけながら言った。

「ああ、そうしよう」

ローレイはしぶしぶ認めた。

「それでは、まずこちらの情報からね」

ローズはここで大きく息を吸った。

「明日の午後、この船は海賊に襲われるわ!」

2人の少女 2（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

アクセス数が思ったよりも多くて、感激しています。

ですが、まだ評価が0なので、よろしければ一言でもいいのでコメントお願いします！

2人の少女 3

「今なんて」

「いや」

ウィルが聞き返そうとしたところを、ローレイが遮った。

「その情報はどこから手に入れた？ 信憑性はどれくらいある？ 正確な時間はわかるのか？ そして」

「ストップ、ストップ！」

ローズが手を上げてうんざりしたように言った。

「ちゃんと答えるから一問ずつきいてくれる？ まず情報源はどこからという？」

「さつき私が、こつちに来ると言っていた男です」
リイが後を引き取って言った。

「ですが、あの男から話を聞いたわけではなく、あの男に届けられた手紙を読んで知ったんです。私たちはあなた方とは違って大部屋に宿泊しています。つまり、他の人も一緒に寝るわけです。隣があの男でした」

「さつき君はその男に見つかる大変みたいなのを言っていたよな？ それは、どうしてだ？」

ローレイが聞いた。

「ローズが落ちている手紙を見つけて、読んだんです。手紙はその男のベッドの下に落ちていました。ローズが読んでいる時、その男は部屋にはいませんでした。けれど、帰って来たんです」

「あたしはとつさに今手紙を拾ったばかりのような振りをしたわ！

でも、その男は察したみたい」

ローズは項垂れた。うなだ

リイはその横で小刻みに震えながら手で腕をさすっていた。

「それ以来私たち、あの男に監視されているみたいで……」

「手紙には何て書いてあったの？」

ウィルが恐々（こわごわ）と聞いた。

「仲間からの手紙だったわ」

ローズが答えた。

「こちらは順調。明日の午後、予定通りこの船を襲う。この前決められた持ち場に必ずいるように。取引相手に金を渡すのは、バヤン島に着いた後。襲撃時に何かまずいことがあれば、赤の服を着てデツキに立っている」

「正確な時間は書いていなかったんだな」

「ええ」

ローズは頷いた。うなず

「他に仲間は？」

「見たところでは、もう一人いると思う。その男のもう一方の隣の人。趣味の悪いデザインの毛糸の帽子をかぶった男で、あたしは二人がひそひそ話で何度か話しているのを見たわ」

「その帽子男が、手紙に書かれてあった『取引相手』か？」

ローズは首を振った。

「そこまでは分からないわ」

「私の推測では……」

リイがためらいながら言った。

「推測では？」

「この船の船員が取引相手ではないかと思っています。何の取引なのか、これも推測の域です。けれどももし私が海賊ならお金を出して、船に関する詳しい情報を手に入れようと思います」

「確かにその通りだな」

ローレイは頷いた。

「だが、その話が全部真実だと示す証拠はあるか？」

ローレイは眉をひそめながら言った。

「飲みこみが悪いわね!!」

ローズがまたもやうんざりしたように言う。

「あたしたちが、あなた達に必死に助けを求めている。これが大きな証拠よ！早くどうにかしないと、あたしたちは明日捕らえられるのよ！ まんまとあのアホ顔の男たちに！」

ローレイは右手で顎を掴みながら、辺りを往ったり来たりし始めた。しばらく4人とも黙りこくつたままだった。

聞こえるのはローレイの足音のみ。

ふと足音が止んだ。

ローレイは大きくふーっと息を吐いた。

そして。

「ここを脱出するしかないな」

「脱出……」

ウィルは蒼くなりながらつぶやいた。

どうして僕はこんなについていないのだろうか……。

これからの旅は、ずっとこんな風に続いて行くのだろうか。もしそうなら、ゲームオーバーはそう遠くない未来にやってくる可能性が高い……。

「あの……」

リイだ。

「脱出はダメだと思います」

「どうしてそう思うんだ？」

「脱出ボートはもうあの男が壊している可能性が高いと思うんです。手紙の内容から、入念に計画を立てていたことが窺うかがえますし……。

それに、ボートで漕こぎ出すのも得策だとは思えません。海に関する専門知識を兼ね備えているならまだしも、素人がすると遭難そうなんする可能性が高いと思います」

「確かにボートで脱出するのは危険だわ」

ローズが賛同した。

「それならどうするの？ やすやすと捕まるの？」

ウィルが聞いた。

「もちろん、そうならないように何とか案を考えるのよ!!」

ローレイは再び往ったり来たりをし始めた。

「あの……」

もちろん、今度もリイだ。

「何だ？」

「私に考えがあるんです。少しリスクが高いけど、何もしないで捕まるよりはマシだと思います」

「考えを聞かせてもらおうか。君なら信頼できそうだ」

「君ならって、ちょっと誰と比較して言ってるのよ!」

ローズがローレイに食ってかかった。「なら」というところに皮肉

が込められていたのを、聞き逃さなかったらしい。

ローレイはローズを気にも留めず、リイに話すよう合図した。

「あの……」

今度はリイではなく、ウィルだ。

ウィルは無視されないように、手を挙げて言った。

「何よ？」

ローズが機嫌の悪い声を出した。

「僕まだ分からないことがたくさん……」

「何が分からないのよ？」

聞かぬは一生の恥だ。ウィルは自分にそう言い聞かせて、口を開いた。

「海賊とは一体どんなことをするのか。それと手紙に書いてあった、バヤン島ってどこにあつてどんなところなのか。僕は……訳ありで普通の人よりも物事をよく知らないんだ」

ウィルは俯きながら付け加えた。

ローレイはやれやれといったように頭を振りながら、ベッドに腰かけた。

「君を相手にすると、時間がかかるな」

「はい？ 常識がないっていつても限度があるでしょうが！ 22の島を全部知らない人はざらにいるけど、バヤン島を知らない人はめったにお目にかかれないわ」

ローズは感心したように言ったが、それがウィルをかなりへこませた。

聞くは一時の地獄……。

「ローズ、失礼よ。訳ありのご様子なのに……。私が教えてあげますね」

ウィルは嬉しくて感謝の眼差しまなざしをリイに向けた。
親切な人だ。

こんな人が正真正銘の女の子に違いない。

「海賊は野族やぞくの者たちの一つの集団なんです」

「野族？」

「野族とはならず物の集団です。もともと、野族という族は存在していなかったんですが、さまざまな族から集まった者達が、自分たちのカラーを灰色に染めて、野族と名乗ったんです。野族はいろいろな悪事に手を染める者が多く」

「多いというかほとんど全員でしょ？」

ローズが口を挟んだ。

リイは頷いた。

「そのとおりね。それで、海賊とは一般的に野族で海で悪事を働く者達のことを指すんです。具体的には船を襲って盗みを働くのはもちろん、人身売買も行っています」

「人身売買！？」

「ええ」

リイの顔に影が差した。

「先程話した平族奴隷派の中心は野族の者達で、平族を手当たりしだい捕まえては奴隷市にかけるんです。最近では、あまり力のない族の者も市場に狩りだされます」

「市に出された後、どうなるの？」

「貴族の者達が買うのよ」

答えたのはローズだった。苦々しそうな顔をしている。

「貴族と野族は表立っては関わらないけど、裏では密接な関係を結んでいるわ。上品な顔をして踏ふん反そり返っているくせに、裏でやることはやってるのよね」

「明日の午後、僕たちは捕まったら……」

「私は確実に市場行きです。あなたたちは、どうかは分かりません。私、あなた方のカラーを知りませんから……」

「そうよ！」

ローズは突然思い出したように言った。

「私たち、まだあなた達の名前とカラーを聞いていないわ！」

「言う必要があるのか？」

ローレイが抑揚のない声で聞いた。

いつのまにかベッドに仰向けに寝ている。

「当然よ！ 私達はちゃんと名乗ったじゃない！ 人には言わせておいて、自分達は言わないつもり？」

「俺はやすやすと人に名乗らない。名乗るのは必要性がある時だけだ」

「卑怯者！ 私達には名乗らせておいて」

「嫌なら名乗らなければよかったんだろ」

ウィルは近くにいるローズの熱が上がっていくのを感じた。
助けを求めてリィを見る。

「ローズ、落ち着いて。何か事情があるみたいだし、仕方ないじゃない。とにかく、今は自分たちの身を守る策を練るのが先よ」

「そうだな」

その時だ。

「ドンドン」

ドアをノックする音がした。

「誰かしら？」

ローズが小声で言った。

例の男ではないかと、警戒しているのが分かる。

ウィルはローレイも警戒しているのを背中を感じた。

しかし。

「おいウォルト！ いねえのか？ ウォルト！」
ケンだ。

「大丈夫だよ。船員のケンだ」

そばで、ローズとリイが力を抜くのが分かった。

ウィルはドアを開けた。

「寝てたのかい？」

ケンは笑って言った。

「おや、友達？」

「うん」

ウィルはローズ達をちらと振り返りながら言った。

同時に目の隅でまだ警戒を解いていないローレイを捕らえた。

「ほらよ」

ケンは一枚の紙をウィルに渡した。

何かのプログラムが載っている。

「何これ？」

「今日ディナーパーティがあるんだ！ それはその時の催しのプログラムよお。第二食堂で。船長も顔をだすぞ」

「へえ」

「音楽の演奏とかもある。楽しいからみんなで来いや。きっと知り合いも増えるぞ。王都リフラーがあるオーラムステツラ島にはまだ6日ほどかかるから、知り合いを増やして楽しんだほうが得だぜ」

オーラムステツラ島。

おばさんの家があるところだが、エカルイア家と貴族もいる。世界の中心。

「分かった。ありがとう」

ケンは頷くと、去って行った。

「どうするの？出るの？」

ローズがプログラムの紙を覗^{のぞ}きながら言った。

「この状態では出れないんじゃない？」

ウィルは惜しそくに言った。

音楽演奏を聴いたことがないので、ぜひとも参加したかったのだ。

「出席したほうがいいと思います」

リイが言った。

「え？」

「だって、出席しなかったら逆に危ないと思います。特にあの男。私達は奴隷市には最適だから、絶対に逃げられたくないはず。多分このパーティーにはほとんどの人が出席するでしょ？そしたら、男にとつては人に見られず私達を捕まえておく絶好のチャンスになります」

「なるほどね。人と一緒にいる方が安全ね。男達はまだ他の人々に襲来のことを知られたくないはずだから」

ローズが頷きながら言った。

「そうだな」

ローレイも納得したようだ。

やった！

音楽の演奏が聴ける！

ウィルは能天気喜んだ。

「それはそうと」

ローズがウィルの方を向いた。

「あなた、名前はウォルトっていうのね。苗字は？名前くらいいいでしょ？呼ぶ時に困るわ」

「え…えつと……」

「ウォルト・キャラハンだ」

ローレイが脅すような目つきでウィルを見ながら言った。

「名前くらいはいいだろう。俺はローレイ・ジャティス」

「歳は？ 私とリイは二人とも15歳よ」

「き…君たちと同じ歳だよ。ただローレイは1つ上」

「ふ〜ん」

ローズは何かを探るような目で、ウィルを覗きこんだ。

ウィルは冷汗がたれた。隠し事するのは、得意ではない。

「さてと」

ローレイが切り出した。

「ディナーパーティまでまだ時間がある。作戦会議をしようか？」
ウィルとローズは、同時に膨れ面をした。

リイに特定して言われたセリフだと、はっきり分かったからだ。

2人の少女 3（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
よろしければ、感想をください。

ディナーパーティ 1

「簡単に整理すると、2つの策があります」

リイが言った。

一同はベッドに腰かけていた。

ウィルのベッドにローズとリイ、向かい合わせのローレイのベッドにローレイとウィルが座っている。

リイ以外の3人は静かに話を聞いていた。

リイは、ローズのはもとより、早くもウィルとローレイの信頼をも獲得している。

「先程脱出の話があったけど、まずその前に船長さんとか他の人に話すこと。そして、この船の進行方向を変えさせる。あともう1つは、隠れる。脱出案はさっきも言ったようにやめた方がいいと思います」

そこでリイは話を切り、他の人の反応を待った。

「そうだな……」

ローレイは腕組みをして考え込んでいた。

「最初の作戦はより簡単で安全かもしれないけど、私達の話信じてくれるかしら？」

ローズは首をかしげながら言った。

「私もそれを考えました。私達まだ若すぎて、信じてくれる可能性は低いと思います。そもそも、私達があなた達に助けを求めた理由は、あなた達も子供だったからです。大人の人は相手にしてくれないと予想したからです」

「手紙を入手すれば、立派な証拠になるんじゃない？」
ウィルが聞いた。

「確かに……。キャラハンさんの言うとおりですけど」

「ウォルトでいいよ。丁寧語も使わないで。同じ歳なんだから」

リイは一瞬困惑したらしく口をつぐんだが、すぐにウィルに向かってにっこりした。

「ありがとう、キャ……。ウォルト」

「俺に対しても同じようにしてくれ。それはそうと、さつき何か言いかけてたな」

「あ、はい。えっと……手紙のことだし……だったわね。もう、手紙は焼かれて無いんじゃないかと思って……」

「確かに、そうね。私が読んだ後だしね。それに持っていたとしても、隠すことも容易だしね」

「でも、試してみる価値はあると思うの。特に今日はディナーパーティだから」

リイはウィルのそばに置いてあった、ディナーパーティの案内をちらと見ながら言った。

「ディナーパーティがどうかしたの？」

「さつきディナーパーティに出席しないと狙われる可能性があるって言ってたでしょ？人がいないから。それを、私達が利用するの。」

大部屋に侵入するのが、容易になると思うわ。ただ……」

「俺かこいつがしないといけない……だな？」

ローレイはウィルを親指でくいつと指さした。

リイが申し訳なさそうに頷く。

「私かローズが食堂にいなかったら、あの男が探しにくるかもしれないので」

「かまわない。俺がやる。お前はこいつらと一緒にディナーパーティに出席しているんだ」

ローレイはウィルに向かって言った。

「分かった」

ウィルは何でもないように答えたが、内心すごくほっとしていた。
「でも無い可能性が高いだろ。無かったらどうするんだ？」

ローレイは立ち上がりながら言った。

「それでも、とりあえず船長に言ってみたら？ 失敗しても危険はないでしょ？」

ローズが言った。

「そうね。まあ、駄目でしょうけど。それからのことは、ディナーパーティーの後で考えましょう。襲来するのは明日の午後で書いてあったし……」

「午後で一体どれくらいの時間に来るんだろう？ 暗くなってからかな？」

ウィルは不安げに聞いた。

「それは無いと思うわ」

「どうして？」

「ローズが言った手紙の内容を覚えてる？ 何か問題があったら、赤い服を着てデッキに立つようになっていう件^{くだり}。もし襲来が夜だったら、あの男が赤の服を着ているかどうか判別しにくいでしょ？」

「どうして白の服にできなかったんだろう。そしたら、夜でも見えるのに。夜の方が襲いやすいと思うんだけど……」

「おそらく、原因は船員ね」

「船員？」

リイは頷いた。

「うん。船員の服装は」

「白だ！」

ウィルはそう言ったあと、口を閉じリイをじっと見つめた。

「リイって、さっきから思ってたんだけど、本当に頭いいんだね。僕と同じ年なのに……」

リイはそう言われると、ぱっと頬を赤らめた。

「あ……ありがとう」

「もう一つ、夕方に襲う理由があると思うわ」

ローズだ。

「何？」

「奴隷市は夜に行われるのが決まりなの。法的には認められてないことだからね。ま、今の王は見えて見ぬふりを決め込んでいるけどね」
「見て見ぬふりならまだいい。アルノー王はその奴隷市を推奨しているというウワサを俺は聞いたことがある」

ローレイが厳しい顔つきをしている。

ウィルは自分の足元を見つめた。

ローレイの言うウワサとは、おそらく士族のスパイから得た情報。ということとは、ほぼ確実にアルノーは奴隷市を……。

ひどい。

ウィルは唇を噛みしめた。

今まで、アルノーの横暴とか聞いても、あまりピンとこなかったのが正直なところだ。

でも、今平族であるリイを目の前にして怯えている様子を見ると、アルノーの存在が悪い意味で増してくる。

それと同時に、自分にかかっているプレッシャーの重さが胃にズンとのしかかる。

「さて、行こうか」

ローレイがそう言ったのは、陽が沈み始めたころ。ディナーパーティーの時間。

一同は無言だった。襲来はまだだとしても、やはり緊張はする。

「できるだけすぐに戻って来る。ついでに非常時のボートも見てく

るが、まあ駄目だろうな」

「あの、ローレイ？」

リイがおずおずと聞いた。

「なんだ？」

「もし、ボートが壊されてなく、あなたにも余裕があったら、ボートを一つこの部屋に持ってきてくれませんか。なるべく、人に見つからないように……。大変危険だと思いますが、でも私良いことを思いついたんです」

ローレイは頷いた。

「分かった」

それから、ローレイはウィルの方を振り向いた。

「お前は、ディナーパーティの会場を決して離れるな。分かったか？」

まるで父親が子供を諭すような口調だ。

「分かってるよ」

ウィルはむくれながら、つぶやいた。

ローレイはウィルを一瞥した後、そのまま軽い足取りで部屋を出て行った。

食堂は予想以上に綺麗に飾り付けられていた。

カーテンやテーブルクロスなども上等なものに代えられており、音楽演奏が行われるステージも立派に揃えられている。

「すごい！」

ウィルは感嘆した。

「そうかしら？」

そう言ったのは、ローズだ。あまり驚いていない様子だ。

人も、こんなに船に乗っていたのかと思うくらい、集まっていた。

「よお、遅かったな。ウォルト。来ねえんじゃねえかと思ったぜ」
ケンがにこにこしながら、近づいてきた。
手には不思議な形をした楽器を持っている。

「ケン！その楽器は何？ケンも音楽演奏をするの」ウィルはまじまじと楽器を見ながら聞いた。

「おめえさん、知らねえのか？我ら船族は皆楽器を演奏するんだぜ。海の上での演奏は最高だからな。それで、これはピーフォという楽器よ。笛の仲間だ」

ケンは、ピーフォをウィルに差し出した。

ピーフォは蛇みたいなクネクネした形をしていた。

「この楽器は全部こんな形をしているの？」

「私、この楽器知っているわ」

横からローズが口を挟んだ。

「確か、木の枝の中をくり抜いて作る楽器よね。木の名前もピーフォじゃなかった？」

「その通りだ、お嬢さん」

ケンは感心したふうだった。

「この楽器の製造法を知っている人は、船族以外はほとんどいないと思ってたんだが……」

「あの、ケンさん？今日は立食パーティなんですか？」

リイがあたりを見回しながら、聞いた。

「おお、そうだ。存分に楽しんでくれ。おっと、俺は船長室に行かないといけねえんだった」

「楽しみにしてるよ。演奏」

そう言つて、ウィルはケンにピーフォを返した。

「ああ、また後でな」

ケンはそう言つと、その場を去つて行つた。

ウィルは、改めて会場を見渡した。

どのテーブルにもおいしそうな料理が並んでいる。

料理の良い香りが、ウィルの鼻孔をくすぐった。

「さあ、食べようよ」

ウィルは後の二人に嬉しそうに言った。

人々の賑わい、素敵に飾られた会場、立派な音楽ステージ、よだれが垂れそうな料理。

これらを前にして緊張感を持つてというのは、ウィルには無理な話だ。周りの人々を見ると、もう皿を手に取り、食事にありついている。

ウィル達一行も、他の人がいないテーブルに寄り、食べ始めることにした。

「こ……こんひゃにおいひい……も……もひよを食びえたのは……初めてだよ！」

ウィルは、口いっぱいにパスタを詰めながらも、一生懸命に話そうとした。

あまりのおいしさに、ウィルは心から感動したのだ。

「そうかしら……。それより、その下品な食べ方やめなさい！ 見てるこつちが恥ずかしいわ！」

ウィルはゴクリと食べ物を飲み込むと憐れむように言った。

「君って感受性が乏しいんだね」

この幸せが味わえないなんて、と本気でかわいそうに思ったのだ。

だが、ローズはフンと鼻をならし、キッとウィルをにらみつける。

「よくもそう能天気でいられるわね。もしかしたら、私達はバヤン島に連れて」

「ああ、そうだった！」

ウィルは、ローズを全く無視してリイの方を向いた。

「まだバヤン島のことを聞いていなかったね」

「そうだったわね」

リイはグラスの水を一口飲むと、それをテーブルに置いた。

「バヤン島はね、野族の島なの。野族の者達の聖地とでも言うのかしら。この世界で二番目に危険な島なの」

「二番目？」

ウィルは首をかしげた。

「ええ、一番目は枯れた島と言われている」

「ポルテフラ島！」

珍しく自分が知っていることだったので、ウィルはやや興奮して言った。

「大きい声出さないでよ。誰でも知っていることよ。ポルテフラ島なんて」

ローズは皿の上の肉をフォークでつつきながら言った。

無視されたことに相当機嫌を悪くしたらしく、声には毒が含まれていた。

「ローズ」

リイは落ち着いた声で、ローズをたしなめた。
だが効果はない。

「ウォルト、あんたバヤン島がどこらへんにあるか知ってるの？」

「知らないよ」

ウィルはローズから目をそらしながら言った。

まともに見ると、迫力があって怖い。

「あんた一体どういう教育受けてきたのよ！ あのね、バヤン島はこの船が旅だったエシミス島とオーラムステッラ島のちょうど中間にあるの。今日はこの船がたつて4日目。オーラムステッラ島まではあと6日ほどかかるって、あのケンという船員が言ってたわよね。つまり、バヤン島はこの船の近くにあるということなのよ」

「そうか。だから、明日この船を襲うのか。その方が都合がいいから」

ウィルは、怯えるどころか、むしろ感心したように言った。

今は、何を言われても現実のこととして認識できない。

何しろこんなにすばらしいパーティの最中なのだから。

ローズは呆れたように頭を振ると、食べることに専念し始めた。ウィルに何を言っても無駄だと思ったらしい。

「あ！　ローズ、男たちがいたわ！　ほらあそこ」

リイはそう言って食堂の一角を指した。

ウィルが急いで見ると、図体の大きい男2人が、対照的に立派な服を着た一人の老人と談笑している。

男たちは、ウィル達に背を向けるようにして立っており、2人のうち1人はスキンヘッドで、もう一人は髪がぼうぼうに伸びていた。少し離れた背後にはケンが立っている。

ケンはウィルと目が合うとウィンクをし、手で老人を示した。

「あのおじいさん、きっと船長さんだわ」

リイが小声で言った。

「何か情報を聞き出してるのかしら」

ウィルの横でローズも船長達を、じっと見ている。

やがて、会話が終ったらしく髪が伸びているほうの大男がこちらのほうを向いた。

ひげもぼうぼうに生えている。

ローズとリイはとっさに、男に対して背を向けたが、ウィルが見たところ、男はローズ達に気づいてないようだ。

ウィルは皿を手に持ったまま、男たちをじっと凝視し続けた。

スキンヘッドの男は近くのテーブルに寄り、ワインをグラスに注ぎ始めた。

毛むくじらの男も近づき、自分のグラスを差し出した。

二人はにやにやしながら、グラスを片手に何やら語りだした。

談笑している二人を見て、ウィルは背筋がゾクつとするのを感じた。

さっきの幸福感はいつの間にか消えている。

男達が怖かったからではない。

突然激しい嫌悪感が、ウィルの体を駆け巡ったからだ。

急に食欲がなくなつて（既に十分食べていたのだが）、ウィルが皿をそつとテーブルに置いたとき、パツパカパーンと楽器の音がした。ステージの方からだ。ステージの壇上には、華やかな衣装を着た船長が立っていた。にっこりと乗客達に笑いかけている。

「みなさん、こんにちは。そして、初めまして。私はこの船の船長を務めさせていただいている、ニケ・ドーラと申します」

そこでドーラ船長は口をいったん閉じ、にっこりとして乗客達を見回した。

「エシミス島を発つてから今までの日々は、花の月らしい非常に穏やかな気候でした。波も荒れることなく、比較的快適に過ごせたのではないのでしょうか？」

この世界の一年は、4つの月に分かれている。穏やかな気候で花の咲き乱れる、花の月。年中でもっとも暑くなる、海の月。木々が美しく紅葉する、山の月。年中でもっとも寒くなり雪も吹き荒れる、風の月。1つの月は101日。今日は、花の月87日。もうすぐ、海の月がやってくる。

「皆さんに残念なお知らせがあります」

ドーラ船長はやや声を落して言った。

「明日、このうらかな天気がくずれるとのことです。蟻族から新聞を受け取った方の中で、既にご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが。風が吹き荒れ、雨も激しくなるそうです」

「最悪ね……。私達、閉じ込められたって感じじゃない？」

ローズが唇を噛みながら言った。
会場の乗客達も、不安そうな顔をしてガヤガヤと話しをし始めていた。

こちらは、豪雨に船が耐えられるかどうかを心配しているのだが。

「ご心配には及びません！」

ドーラ船長は声を張り上げて言った。

会場は再びしんとした。

「もちろん、大丈夫ですとも。私が、自身を持って断言させて頂きます。過去にもこの愛しい私の船は、すさまじい嵐の数をなんなくぐりぬけてきたのです。明日の豪雨なんかには、きっとびくともしないでしょう」

再びドーラ船長は、乗客達に笑いかけた。

会場が、少しずつ落ち着きを取り戻す。

「さて、そろそろお待ちかねの音楽ステージを始めましょう！」

会場が割れんばかりの拍手で溢れた。

だが、その拍手にウィルは加わっていなかった。

相変わらず一点に目が吸い寄せられていたからだ。

もちろん、あの男達。

スキンヘッドの男がポンと相方の背中をたたいているのが見える。

そして、ゆつくりと食堂の出口の方に向かって歩き出した。

「ちょっとウォルト！」

ローズはそう言うのと、ウィルの袖を掴んでぐいと引き寄せた。

「何ぼさつとしてるのよ！ほら、あの子がさつきからあなたに手を振ってるわよ！」

見ると、カミーユだった。

無邪気に大きく手を振っている。

ウィルはあいまいに笑って答えると、またすぐに出口の方に視線を戻した。

男は既に外に消えていた。

ウィルは胸騒ぎがした。

「すてきな演奏ね」

隣でリイがうつとりして言った。

もう、演奏が始まってるらしい。

でも、ウィルの耳には全く届かない。

何か忘れているような……。

ケンが体を大きく揺らしながらピアノを弾いている。

とても気持ちよさそうだ。

ウィルは自分に問いかけた。

何か忘れてる。

何を？

思いだせ。

ドーラ船長はステージの横に置いてあるイスに座り、目を閉じて体をわずかに左右に揺らしながら聴いている。

あいつらは食堂を出ていった。

何かまずいことでも？

……。

ローレイ！

「ローズ！リイ！スキンヘッドの男が、さっき会場を出て行ったん

だ。ローレイが危ないんじゃない……」

「そうなの？」

リイはこわごとと辺りを見回して言った。

「目が合うのが怖くて、全然見てなかったわ」

カミーユの笑い声が遠くで聞こえる。

ますますウィルは焦った。

「どうしよう。ローレイが危険だよ。知らせないといけないんじゃないや

……」

「ちよつと待って！ 馬鹿もほどにして！」

演奏を聴き入っていたローズだが、即座にウィルに意識を集中させた。

「下手に動かない方がいいわ。動く方がずっと危険よ！確かにローレイはちよつとピンチだけど、アイツなら大丈夫だと思うわ」

「そんなこと、分からないだろう？」

ウィルは完全に落ち着きを失っていた。

もしもローレイに何かあったら、この旅は早くもゲームオーバーだ。

「ウォルト、ローズの言う通りだわ」

リイがなだめるように言った。

「今はローレイを信じることが一番無難よ。私達にとっても、ローレイにとっても。ローレイがどんな人か、会ったばかりで全然知らないけど、腰に剣を3本もさげてくるくらいだから、剣術がすぐれてるんじゃない？」

「3本？」

ウィルはそこで一旦落ち着き、眉をひそめた。

確かエシミス島に最初来た時は、剣は2本だった。

トムから剣をもらったのだろうか……。

一曲目の演奏が終わり、会場は拍手で再び溢れた。
ピーっと口を鳴らす人もいる。
すごい盛り上がりだ。

ローズとリイも再びステージの方を向き、拍手に加わった。

ウィルは大きく頭を振った。

剣のことなんて今考えるべきことじゃない。

「とにかくここにじっとしてなさい！」

拍手をため、ローズが振り向きざまに押さえつけるようそう言ったとき、ウィルの姿は既にそこにはなかった。

ディナーパーティ 1（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
今いろいろと忙しい時期で、次の更新も遅くなると思います。

ディナーパーティ 2

ウィルは廊下を走っていた。食堂はあんなにもにぎやかだったのに、ここは静かだ。人は全く見当たらない。

「あのバカ、一体何を考えているのかしら？」

食堂でのローズの怒りの一言。正解は何も。ウィルは何も全く考えていなかった。ただローレイのところに向かって走っていた。これからどうするかとか、自分が行って何になるかとか、そんな考えはウィルの頭の中には全くなかった。ゆえに当然足音のことも考えない。ドタドタと大きな音を立てながら、ウィルは大部屋に向かって行った。

「ローレイ！」

これもまたウィルは大声をあげて、部屋の中に突入した。返答はない。

ローレイを含め、誰もいなかった。多くのベッドと乗客たちの荷物だけがそこにはあった。ウィルはその場に、立ちすくむ。そして、肩を落とした。

そこでもうやく自分の無鉄砲な行動に気づいた。いったい何をしに僕は駆けてきたのだろうか。

僕が応援に来たところで、どうにかなるのだろうか。

答えは、どう頑張っても否だった。むしろ足手まといになったかもしれない。だいたいあの男が食堂を出たからと言って、何がそんなに危険なんだ？ローレイと鉢合わせしたって、手紙をとるところさえ見られなければ大丈夫じゃないか。きっとローレイのことだから、もう食堂に戻っているに違いない。

ウィルは回れ右して、食堂に向かってとぼとぼ歩き始めた。きつとローレイやローズにいろいろうるさく言われ、馬鹿にされるに違いない。言われるだろうことを想像すると、ウィルの歩調はより遅

くなつた。

「ドン！！」

ウィルの足はピタッと停止した。階下から何かが壊れるような音が聞こえた。

数秒後。

「ドン！！」

また同じ音だ。木が折れるような音。ここでこんなに聞こえるのだから、きつと下で何かが激しく損傷しているに違いない。ウィルは耳をすませた。

「ドン！！」

食堂に行きたくないという強い気持ちだが、ウィルに素敵な選択肢を与えた。そしてウィルは誘惑に負け、また無鉄砲な行動に出始めた。

一方食堂では、ローズとリイがひそひそと緊急会議を開いていた。

「ウォルト、本当に大丈夫かしら」

リイが溜息をついていった。

「私が演奏にうつとりしていなければ、こんなことにはならなかったのに」

「何言ってるのよ！」

ローズは憤然として言った。

「あのバカが悪いのよ。何の考えもなしに、しかもたいして役に立たないくせに走り出すから。全くのアホよ！」

「役立たずかどうかは、分からないでしょ？」リイはなだめるように言った。

「分かり切ってるわ！外見に出てるじゃない。あれは100%役立たずよ。それより私が一番心配なのはね、」

リイが声のボリュームを落とすよう手で示したので、ローズは声をひそめて言った。

「あいつがローレイの足を引っ張って危険な事態にならないかってこと」

「でも手紙を押収する現場さえ見られなければ、何も危険なことにはならないと思うわ」

「そもそもあの男はどうして食堂を出たのかしら？」

「分からないわ」リイは肩をすくめた。

「単純な理由の可能性が高いと思うわ。ひと眠りしたいとか……。

単純でない場合を考えるなら……」

「考えるなら？」ローズが先を促した。

「みんなが食堂に集まっているうちに、ボートを壊す……とか？」

「まだ壊してなかったらということ？でも、それは真夜中でもいいわよね。壊すくらいあのバカでかい男達なら数秒でしょ？どうせボートなんて2、3隻だろうし……」

「そうよね。いくらなんでも考えすぎよね。とりあえず、私達は帰ってくるのを待ちましょう」

「ええ」ローズは頷いた。

「全然心配することないわ。直にローレイもあのバカも帰ってくるわ」

その頃、「あのバカ」と言われた少年は、は大きな音をさつきから出している部屋の前にたどりついていてた。そこは上の階に比べて薄暗く、廊下には等間隔に小さなランプが取り付けられていた。ウィルは息をひそめ、耳をすませてじっと立っていた。ドアはわずかに数センチ開いており、中から光が漏れている。相変わらずで「ドン！」という音は、同じペース続いていた。加えて、ここからは中の人の足音も聞こえた。どうやら一人しかいないようだ。「ドン！」という音の後に数歩動く音が、これも同じペースで繰り返されていた。ウィルは深呼吸したあと、吸い寄せられるように一歩ドアに近づき、そっとノブに手をかけた。自分の心臓がバクバクしているの

が聞こえる。ウィルの頭の中の一部が先ほどから、危険信号を出していた。だが、好奇心の方が断然強い。心が今の緊迫した状況で満たされる。このたまらないスリル感。ここ数日の憂さを晴らすのに最適だ。

別にのぞき見るくらい、何の危険もないさ。ウィルは自分の頭の片隅に語りかけた。溜まりに溜まっていたストレスが、ウィルの理性を狂わせた。バレなければ、どうってことないじゃないか。

ウィルはノブをぎゅっと握りしめた。ノブは冷たく、ひやっとした。続けて、10センチ程ドアをひき、ウィルは顔を隙間にぐっと近づけた。

音の発信者は、ある程度予想はついていたが、あのスキンヘッドの男だった。ウィルに背をむける形で立っていた。ドアの隙間が小さいため、男の右半分しか見えなかった。男は筋肉が盛り上がった太い右腕を勢いよく下におろして大きな音を立てている。そして、何かをまたいで一歩前に進み、また右腕を振り上げた。同じ動作が3回続いたあと、ウィルはもっと中をよく見ようとドアをさらに開いた。

あつと声が出そうになるのを、ウィルは何とかこらえた。目に入っただのは、真つ二つに折られたボート達の残骸だった。部屋は思ったよりも広く、多くのボートが積み重ねられていることが分かった。もう男の全身が見えた。ウィルが顔つつこんで部屋を見渡している間にも、男はボートを壊し続けた。

ローレイはこのことを知っているのだろうか。ウィルがそう考えた。ちょうどその時。男がふいに動きをとめた。ドアのところから10メートルくらい離れたところ。ウィルの体も緊張で硬直した。

「おかしい」男はうなるように独り言を言った。

「あと4隻。壊したのが15隻だから、全部で19隻ということになる。20隻と聞いていたのに……。数え間違えたか？」そして男は太い毛むくじゃらの左の足を一歩下げ、こちらに向き直ろうとし

た。

ウィルはビクつとして、すぐに首をひっこめた。そこまでは良かった。だが慌てすぎてドアをボタンと閉めてしまった。

「誰だ？誰かそこにいるのか？」

予想通り、男の鋭い声がした。続けて、こっちに向かってくる足音が聞こえる。

ウィルは逃げようとした。だが、足が動かない。ウィルはドアを絶望した目で見つめた。逃げろという頭の命令を体が聞いてくれない。根が生えたかのように、ウィルはその場に立ち尽くしていた。

足音がせまってくる。

あと4、5歩でアウトだ。動いてもないのに息がはやい。心臓の音がバクバクと聞こえる。

あと2歩。

ウィルはぎゅっと目を閉じた。

見つかる！

ディナーパーティ 2（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

次の更新を来週中にできるようがんばります。
よろしければ感想をください。

ディナーパーティ 3

次の瞬間ウィルは体がぐいつと何者かに引つ張られるのを感じた。体が大きく揺れ、何者かの強い力が自分の体に加わる。それでもウィルは目をつぶったままだった。

捕まってしまった。ウィルはそう思った。口を腕でふさがれているのが、目を開けなくてもわかる。自分を押さえている者の息を、すぐ近くで感じる。息の生暖かさを、肌で感じる。

頭の中は真っ白で、ウィルは何者かになされるがままになっていた。

食堂で。

「あまりにも遅くないかしら。ウォルトとローレイ……」

ローズはまた食堂の入口を振り返りながら言った。

演奏の間もう何度も振り返っている。さっきは強気で大丈夫だろうと言ったものの、やはり時間がたつと不安になってくる。リイも同様だ。

「そうよね……。もう演奏会もあと少しで終わるというのにね。確かウィルトが出て行ったのは最初のほうよね？」

「ええ」ローズは手に持っていた、演奏会のプログラムを開きながら言った。

「確かケン達のピーフォアの演奏が終わったぐらいじゃなかったかしら……」

「ということとは、最初の演奏よね」

そこでリイは少し首をかしげた。

「今はプログラム四番よ。まだ三曲しか進んでないわ」

「本当だわ！ たった三曲……。もうかなりの時間がたった気がするのに……」

「私も同じ気持ちよ」リイは頷きながら言った。

「でも、もう少しこのままウォルト達を待ちましょう。今はそれが

「一番いいと思うわ」

「なんだ？誰もいない。逃げたか？」

ウィルは目を閉じたまま、あの男の声を聞いた。だが奇妙なことに、近くではなく少し離れたところから聞こえる。変だ。自分をすぐ後ろで押さえているはずなのに……。

どうなっているんだ？

状況を理解したい気持ちと恐怖心の間で揺れていた針が、ついに一方をさして止まる。ウィルはゆつくりと目を開けた。だが効果はなかった。目を開けても、あたりは真っ暗で目を閉じているのと変わらなかったからだ。軽く腕を動かそうとしたが、自分の背中で押さえられていて、相当力を入れないと動かせないことが分かった。また少し離れたところから、男の独り言が聞こえてきた。

「まあいい。あの人が取引人なのだから。誰がどうわめいたって、どうにもならないさ」

男が部屋に戻る足音が聞こえた。男がますますウィルから離れたことが、足音の大きさで分かった。その数秒後、またあの「ドン！」という音が聞こえてきた。

ウィルはゆつくりと、今の状況を整理し始めた。

男は僕から少し離れているところにいる。

男は僕を見つけていない。

僕は何者かに捕まっている。

分かることはこれだけだ。

結局僕は今危険な状態にいるのだろうか。

次の「ドン！」という音が聞こえたとき、ウィルは瞬時に覚悟を決めた。

そして、3回目の「ドン！」

ウィルは自分の口を押さえている腕に、思いっきり噛みついた。すると、ウィルの口を押さえていた腕の力がさらに強くなり、ウィルは呼吸もまともにできないほどになった。ウィルの頭で今までで

一番強い危険信号が発信され、ウィルは無我夢中でもがき始めた。手と足を大きくバタつかせ、なんとか逃れようとした。目には涙が浮かんできた。

「おい、動くな。見つかるだろうが」

後ろからささやき声が聞こえ、ウィルはピタリと動きをとめた。聞き覚えがある声だ。誰？この声は誰だっけ？

「話してやるから、さわぐなよ。見つかったらもうからな」

ゆっくりと押さえていた腕が、ウィルの顔から離れる。ウィルはすぐに振り返らなかった。相手が誰なのか分かったからだ。

「ケン！」

「なんでここにいるの？」

ウィルは驚いて聞いた。自分では声をかなり落して聞いたつもりだが、つい大きい声が出てしまった。

ケンは質問には答えず人差し指を口の前で立て、静かにするよう合図した。部屋が暗くて、その表情はよく見えない。

「一体なぜここに？」

ウィルは、ポリウムをぐっと下げてまた聞いた。

「それは、後でだ」

ケンがそう囁いたのと同時に。

「ドン！」

今までのよりも一際大きな音だった。隣の部屋から聞こえる。壁が薄いのだろうか？壁を一枚はさんでいるとは思えないくらい、破壊音はよく聞こえた。

「終わった。壊し残しはないな」

スキンヘッド男の声だ。声もまた筒抜けだ。向こうの音が筒抜けということとは、こちらの音も向こうに対して筒抜けということ。ウィルは息をすることにも気を配った。ケンもまるで石のように固まっ

ていた。やがて部屋から出ていく男の足音が聞こえた。廊下の板がきしむ音も聞こえる。その足音が階段の向こうに消えるまで、ウィルとケンは身動き一つしなかった。

足音が完全に消え、静けさだけが部屋に残される。

「もう行ってしまったみたいだね」ウィルは、ほっとしながら言った。

「ああ」ケンの声にはまだ警戒心がにじみ出ていた。

「あ、さっきは助けてくれてありがとう。どうなることかと思ったよ。なんでここにいたの？」

すぐに返事は返って来なかった。ケンは部屋の入口のほうに向かい、ドアの前で停止した。

パツと部屋が明るくなる。電気をつけたらしい。

「それはこっちが聞きたい質問だな」

そう言ってこちらを向いたケンの顔には、いつものにやかな表情はなかった。

「僕がどうしてここにいたかということ？」

「そうだ」

「え……ええと……」

ウィルは困惑して、そのまま口を閉じた。本当のことを言っても大丈夫だろうか。ウィルは、ケンの顔をまじまじと見つめながら考えた。ケンはまっすぐこちらを向いている。ウィルの頭にローレイの厳しい顔が浮かんだ。ローレイがいなければ分からない。でも、ケンなら信用できる。何しろ僕を助けてくれたんだから。よし、軽くなら大丈夫だろう……。

「あいつが怪しいって、みんなで話していたんだ。だから、つけてきた。なぜ演奏会の時に食堂を出ていくのか気になったから」

「怪しい？なぜそう思ったんだ？」

「ええと……僕たちはもしかしたらあいつは野族で、この船を襲おうとしている野族の仲間じゃないかって思ったんだ。だって……」ウィルはここで一旦口を閉じた。

手紙のことは言っていないのだろうか。ローレイの顔がまたもや浮かぶ。ケンはウィルがまた続けるのを、黙ったまま待っている。これ以上ローレイを怒らせる要因を作りたくない。もう十分だ。ウィルは思った。念には念を！

「えっと、だつ…だつて、み…見た目があ…怪しいから。本当にあの髪形とか怪しいよ！もつとも、髪はないけど……。でも、怪しい！とにかく怪しんだ！ケンだつてそう思うでしょ？」

「怪しいかどうかはさておき、見た目で判断するのはどうかと思うがな…俺は」

ケンは探るような目つきでウィルを見た。その視線が、ウィルには痛く感じられる。何も悪いことしていないのに、こんな風に質問をうけるのは嫌だ。

「でも、今見たとおりあいつはボートを壊していたじゃないか。ケンも見たでしょ？」

「ああ、まあな。その壁に穴が開いているだろう？」

ケンはウィルの背後の壁を指した。ボートが置いている部屋とこちらの部屋を隔てている部屋だ。刺した先には、確かにちょうど掌くらいの大きさの四角い穴が開いている。だから音がよく聞こえたのか。ウィルは納得した。

「どうしてここに来てたの？」

「あの穴は俺が、さっき誤って開けてしまったんだ。ここは船長室だ。見れば分かるだろうが」

そこで、始めてウィルは部屋を見回した。確かに船長室だ。窓際の一軒のランプ。金の装飾が施してあるシャンデリア。立派で大きな机。航海に関する本がたくさん並べられている本棚。誰か特別の人を招き入れた時のためだろうか。上品なソファや天板にガラスをあしらったローテーブルが置いてあった。同じ船の部屋とは思えない豪華さだったが、今は壁に穴が開いているため、少し間抜けに見えた。「ディナーパーティが始まる前、隣のボートの部屋で、そうじをしていたんだ。梯子を動かそうとして、横に抱えた時、ふいにバラン

スを崩してよろけちまって、梯子の片方の足が壁を突き抜けてしまっただんだ」

そこでケンはいつものケンらしく、にかつと笑った。

「隣は船長の部屋だからな、さすがに言い出せずこっそり演奏会的时候会に修理をしにきたんだ。破片がこっちの船長室に飛び散ってたからそれらを拾い、そして穴をきれいに四角にしたんだ。修理しやすいように。そしたら、あいつがやってきた。もちろん止めようとも思ったが、俺も船長の部屋に潜んでいたとなるとさすがに止めづらい。俺も何をしていたんだということになるからな。だから電気を急いで消して、穴から様子を窺ってたんだ」

「壊していくのをただずつと見てたの？」ウイルは驚いて聞いた。

「ケンなら止めることができたと思うのに。船長室にいた理由なんて、後で説明すれば分かってもらえたはずだよ」

ケンは横に首を振った。

「お前さんが言うことももつともだと思う。だがドーラ船長は俺のあこがれの人だ。だから船長の名誉を少しでも汚すようなことはしたくない。あの時俺が隣の部屋に飛び込んでいってたら、きっと殴り合いになって騒動になったはずだ。ディナーパーティの人達にも聞こえるかもしれん。そんなことはできない。俺は後で他の乗客に知られないよう、また不安を与えないよう、こっそりと船長と話し合っつて片付けるつもりだ。だから心配するな。それと」

そこでケンは膝を床につき、呆氣にとられているウイルの手をがしつと掴んだ。

「このことは、他の客にはふせておいてくれ！お願いだ。この通りだ！」

「やめてよ、ケン」ウイルは慌てて言った。

「言わない！誰にも言わない！約束するよ」

「本当か？」

「うん。もちろんだ。それにしても」

ウイルはそこで少し首をかしげた。

「ケンは本当にドーラ船長のことを尊敬してるんだね。その人の名誉のことを一番に気を配るなんて」

「もちろんだ」

ケンはゆっくりと立ち上がりながら言った。

「あの人は凄い人だ。どんな嵐の航海も成功させなされた。危険な冒険をたくさんしなされた。俺達船員のあこがれ中のあこがれだ。それに」

ここでケンは軽く溜息をついた。

「船長はあと少しで引退なさるんだ。俺達にこの前おっしゃった。海の人生をそろそろ終えようかと。だから、俺が船長と共に海に居られるのもあとわずかだ」

ケンは真剣な面持ちだった。

ウィルは何と言えいいか分からず、黙っていた。ただケンの船長への深い思いはなんとなく理解できた。

「話を戻すぞ。先ほどお前さんが言った、あの男が野族でこの船を襲う手助けをしているという考えは確かにしっくりくるわな。そして、あの船を壊す理由も説明がつくし」

ウィルは黙って頷いた。

「とにかく俺が何とかする。お前さんは安心して、早く戻れ。今なら演奏会の後に出される、デザートに間に合うぞ。フルーツがたくさん乗った特大ケーキも出されるんだ」

「助かるよ、ケン」

ウィルは心をこめて言った。

「本当にありがとう。さっきも助けてくれて僕は本当に」

「ガチャッ」

船長室のドアが突然開いた。

誰かがドアのところに立っている。

ウィルはそれを見もせず、目を閉じた。頭に浮かぶのは特大ケーキ。

色とりどりのフルーツと真っ白の生クリーム。
ふんわりとしたスポンジ。
多分お預けだ。

ウィルの束の間の夢はむなしくもこの瞬間に散ってしまった。

ディナーパーティ 3（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

ドアに立っていた人物と野族の襲来。
一つの山場ですので、がんばります。

デイナーパーティ 4

「お前は確か…ウォルトの……」

ケンがドアのところに立っている人物を見てそう言った時、ウィルはドアの方を見ないまま大きく溜息をついた。先程の危険とは別の危険の到来。見なくなつて、誰だか分かる。しかもその人から発せられている怒りのオーラもはっきりと肌で感じる事ができる。

ドアに立っている人物が数歩、ウィルに近づくのが分かった。

ウィルは軽く息を、だがゆっくりと吸った。そして。

「ごめん、ローレイ。ぼ…僕つい……」

恐ろしくてまともにローレイの顔を見ることができなかった。

しばらく重苦しい沈黙が流れた。ケンはその場の状況がよく理解できないらしく、不思議そうにローレイとウィルの顔を見比べていた。ウィルがおそろおそろローレイの顔を見ると、ちょうどローレイは口を開くところだった。

発せられた言葉はとても簡潔だった。

「戻れ。部屋に。今すぐに」

有無を言わせない絶対的な響きがそこにはあった。その顔には静かだが、激しい怒りが秘められているのが分かる。

「あの…ローレイ」

「早く!!」

ウィルはローレイの鋭い声にびくつとすると、間髪を入れずに部屋を飛び出した。

自分達の部屋に飛び込み、勢いよくボタンとドアを閉めてから、ウィルはやつと一息ついた。そして部屋の中を往ったり来たりしながら、ローレイの先程の表情を思い浮かべた。

「殺されることはないんだから」

ウィルは自分に言い聞かせた。だが何の慰めにもならない。食べ損

ねたケーキのことは当に頭から消え去っていた。

待つ。これがこんなにも辛いことだとはウィルは今まで気付かなかった。ただ何もせずじつとしているだけなんて……。ローレイはその後、食堂に戻ったのだろうか。パーティはそろそろ終わるころだろうか。ローレイはこの部屋に帰ってきて、どれくらい僕を叱りつけるんだろうか。

ウィルはふいに歩き回るのを止め、ベッドに座り込んだ。

こんなはずじゃなかった

心に浮かぶこの言葉をウィルはどうしても打ち消すことはでいなかった。幼い時分からあんなにも世界に旅立つことを夢見ていた。だけれどその旅立ちはこのなものではなかったんだ。もつと自由に溢れていたはずだ。もつと輝いていた。もつと眩しかった。現実はと言うと、「自由」なんてどこにもない。それどころか、途方もなく重い課題をつきつけられて、今はこっぴどく叱られるのをただただ待っているだけ。

ウィルはパタンと上半身をベッドに倒し、腕を不格好に広げたまま、目を閉じた。

運がよければ、ウィルはぼんやりと考えた。

運が良ければ、リイがローレイの説教をうまくとりなしてくれるかもしれない。それにしても、待つというのは本当に……。

「おい！起きるんだ、この間抜け！おい！」

気がつくと、ローレイがウィルを揺さぶっていた。いつの間にか、ウィルは眠りに落ちてしまっていたらしい。

「あ……僕……」

「部屋に戻れと言ったが、寝ていいとは言っていないぞ」

ローレイはそう言つと、ウィルを揺さぶるのをベッドから一歩後ろに下がった。

ウィルは意識がまだぼんやりとしていたが、ゆっくりと上体を起こした。

ローレイの背後に、腕組みをしているローズと不安そうな顔をしているリイが見えた。

「僕、つい寝ちゃったんだ」

ウィルは誰かにではなく、自分に向かって言った。頭の回転は、まだ鈍い。

「よくもこんな状況で、そこまですやすやと寝れるわね、この能天気！」

ローズが眉をピクピク動かしながら言った。

「仕方がないじゃないか。眠いものは眠いんだから」

ウィルは欠伸交じりに、のんびりと答えた。

その場の4人にしばしの沈黙が訪れた。頭が機能してない者が1名、呆れて言葉が出ない者が2名。皆の後ろで、おろおろしている者が1名。

やがてウィルの頭の中の歯車がゆっくりと動き出す。

「あ……」

ウィルはようやく大事なことを思い出した。この部屋に戻ることになったきっかけ。自分が非常に危険な状態にさらされていたこと。

「あ……僕さつきは」

ウィルはここでおずおずとローレイを見上げた。

「さつきは、ごめんなさい。僕とつさに」

「もういい」

ローレイはふいと顔をそむけた。

「今悠長にお前のぐだぐだした言い訳や反省を聞いている余裕はないんだ。もうすぐ真夜中。あとちょっとで日付が変わるんだぞ」

「そんなに？」

ウィルは驚いた。僕はそんなにぐっすり寝ていたんだろうか。

ローレイは溜息をついた。本音を言つと、多少ウィルを怒鳴りつけるよていだったが、ウィルの能天気ぶりに呆れて、怒る気力も失せ

てしまった。こいつは本当にあの賢帝、ラゼル王の息子なのだろうか。ローレイはそう思わずにはいられなかった。

「とにかくまず状況整理から始めましょう」

リイが急かすように言った。

「そうね」ローズが頷いた。

「まずはローレイ、あなたから話して」

ローレイは大きく息を吸うと話し始めた。

「俺は部屋を出た後、手紙を確認に大部屋に向かった。探したが予想した通り、そこには無かった。他の手掛かりとかも見つからなかった。あきらめて立ち去ろうとした時、あのスキンヘッドの男が目に入った。後をつけてみると、さっきも話したように」

「救命ボートを壊していた」

リイが後をひきとって言った。

「その通りだ。だが見つかるわけにもいかず、見ていても仕方ないから食堂に向かった」

「だけど、ウォルトが食堂にいなかった」

リイが続けた。

「それでローレイは、ウォルトを探しにまた食堂を出た」

ローレイは頷いた。

「食堂はどうだったの？」

ウィルが聞いた。

「特に何も無かったわ」ローズが答えた。

「パーティの終わりあたりでスキンヘッドの男は帰ってきた。相手の男の方はずっと食堂にいて、船長と楽しそうに話していたわ。きつと自分達を信用させようとしているのよ」

「ありえるわね」

リイは顔を曇らせながら言った。

ローレイはウィルの方に向き直った。

「次はお前だ。ウォルト。全部話すんだ」

ウィルは食堂を飛び出した後のことを語り始めた。大部屋に行った

こと。大きな物音が階下から聞こえたこと。男に見つかりそうになったこと。そして、ケンに助けられたこと。

ディナーパーティ 4（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

よろしければ、ブログにも遊びに来てください

野族襲来 1

ウィルはデッキにただ一人でいた。デッキの手すりに両腕を乗せ、どこまでも広がっている海を眺めていた。美しい景色とは言い難いが、航海を始めて初めて見る景色だった。寝た方がいいと分かっていたが眠れなかった。理由はいくつかある。先程熟睡してしまったこと、またローズにベッドをとられたこと。（「男なら当然ですよ！」そう言つて、ローズはウィルに一枚のバスタオルを渡した。）そしてもう一つ、さっきの綿密な話し合いのことを考えずにはいられないこと。

嵐が来る前だからなのか、雨は降っていないものの、波がやや荒かった。雲に覆われて、星も月も全く見えない。暗すぎて雲の形も見えない。

あいつは、何かおかしい。もう近づくな。

ウィルが自分の小さな冒険話を語り終えた直後の、ローレイの言葉。リイもローズもローレイに同意した。ショックだった。そんなはずはない。ウィルは信じていた。

ケンがあの子達の仲間だなんて、絶対にない。ありえない。第一僕を助けてくれたじゃないか。

男達の手引をしていることが分かるとマズイからな。

ケンは偶然船長室にいたんだ。別にあのスキンヘッド男を手助けしていたわけではない。船長室の壁に誤って穴を開けてしまって、修理をしようとしてあの場にいたんだ

乗客のことを第一に考えなければならぬ船員なのに、それを

止めようとしなんて、ましてや報告しようとしなんておかしいじゃないか。

ケン船長の名誉を守りたかったんだ。

俺が怪しんでいる一番の原因は、最初あのスキンヘッド男をつけた時、俺も隣の船長室に忍び込んだんだ。もちろん誰もいなかった。俺は軽く偵察をした。海賊らは襲来後間違はなく最初に船長室に押し入ると思ったからな。そして窓に近寄った時、カーテンに一本のロープが巻きつけられているのを見つけた。一応カーテンを縛るひもでカモフラージュされていたが。ロープは窓の外に垂らされていた。何があったか分かるか？

ローレイはウィル、リイ、ローズを順に見渡して言った。

ロープの先には、一隻の救命ボートがあったんだ。ボートはロープを切りさえすれば、すぐに水面に置けるよう設置されている。あいつは自分だけ逃げるために、ボートを隠したに違いない。船長室は絶好の隠し場所だ。あの部屋にはベッドがなかった。つまり夜、船長は別の部屋で寝るということだ。そして、明日は嵐。嵐の時に窓を開けようとするバカはいない。もっとも嵐のような一大事るときには、船長は船長室にこもっていたりしないが……。

船長専用の救命ボートかもしれないじゃないか。

ウィルは必死になって言った。

隣に救命ボート室があるのに、どうしてわざわざ自分の部屋の隣におく必要がある？

ウィルはまだ反論しようとした。

ねえ、ウォルト。

リイは優しく言った。

私にもローレイにもはっきりとは状況が分からないの。だけどいろいろ考えてみるとケンさんはちよつと怪しい、そうでしょ？ウォルト、あなた言ったわよね？スキンヘッド男はこの船の船員に手引きがいたことを示す発言をしたって。それがケンではないという証拠はどこにもないわ。

この時ばかりは、リイの言葉もウィルには刺のように感じられた。

いずれにせよ、たった半日。その間近づかなければいいことなのよ。襲来が起こったその後は、接触している暇なんてないだろうし。ケンが手引き人かどうかはつきりとは分からないけど、用心して損することはないでしょ？あなたの気持も分かるけど……。

リイは僕の気持を分かっている。ウィルは思った。船に飛び乗ってから、孤独感に苛まれ続けていた。それを和らげてくれたのが、他でもないケンだった。初めて言葉を交わした時のあの屈託のない笑顔を今でも鮮明に思い出せる。カミーユも僕を元気づけてくれたけど、何と言ってもまだ流暢に話すことができないくらい幼い子供だ。ケンはウィルにとって初めての友達だった。野族の襲来が避けられないというのなら、せめてケンには逃げて欲しい。ウィルはそう思っていた。それなのに……。

「大丈夫だよ。この船は嵐に負けないよ」

ウィルは突然の声にびくつとした。いつの間にか、横にドーラ船長がいた。暗くて顔がぼんやりとしか見えなかったが、雰囲気で微笑んでいるのが分かる。ケンのことでの考えに熱中しすぎて、自分に

近づいて来るのに全く気がつかなかった。

「別に嵐を恐れているわけではないんです。ただ僕は…ちょっと眠れなくて」

「ほほう！」

ドーラ船長はウイルを見下ろした。ディナーパーティーでは気付かなかったが、ウイルよりもずっと背が高く、すらつとしていた。

「ディナーパーティーですこし食べ過ぎたのかな？」

ウイルは心臓の鼓動が早まるのを感じながら、ドーラ船長を見上げた。この一か八かの計画は明日の朝食時にする予定だった。でも考えてみると絶好のチャンス。ローレイもきつと怒らないだろう。

「あの…ドーラ船長？」

「何かね？」

「信じてもらえないかもしれませんが…明日の昼か夕方、海の野族がつまり海賊がこの船を襲う計画があるんです」

ウイルはじつとドーラ船長を見つめながら、答えを待ったがすぐには返って来なかった。最初にウイルの耳に届いたのは、答えではなく笑いだった。

「ほっほっほっ……」

暗闇の中でもドーラ船長の灰色のひげが震えているのが分かった。

「本当なんです！」

ウイル顔を真っ赤にしながら答えた。

「信じてください。船長と今日ディナーパーティーで話していた大男二人が野族の一味なんです」

「知っているとも」

「え？」

ウイルは驚いて口をぽかんと開けた。

「あの二人が野族の者と知っているのじゃよ。だがな、あの二人もこの船にちゃんとお金を払って乗船している。だからわしにとって、あの二人も客には変わらない」

「でも」

「それにじゃ」ドーラ船長はウィルを遮って話を続けた。

「野族の計画とやらはこの世界に無数に存在している。その危機をわしは乗り越えてきた。計画の有無にかかわらずわしは、常に安全面に気を配っている。我ら船族の誇りにかけて、この青色の腕輪にかけて、わしはこの航海を必ず成功してみせる」

そこでドーラ船長は自分の左肩をポンと軽くたたいた。

「でも」

ウィルはなおも食い下がった。

「救命ボートが壊されたんですよ！もし襲われたら」

「あー、君も見てしまったんだね。わしもディナーパーティーの後、船員のケン・オハラから報告を受けたよ。全くけしからん話だ。救命ボート代を下船時にきっちり払ってもらうつもりじゃ」

「不安じゃないんですか？」

ウィルは啞然として聞いた。

ドーラ船長は相変わらず微笑んでいた。

「どうしてもわしのことが信じられないようじゃな」

「いや…そういうわけでは」

ウィルは口ごもった。

「実はもうすぐわしは船の上の生活にピリオドを打つんじや。だからこそ、残された短い船上生活をわしは、よりいっそう大切に思っておる。どうしても心配なら話すが……」

そこでドーラ船長は一瞬間を置いた。

「航路を少し変えた」

「え？」

ウィルは肩の力が抜けるのを感じた。

「他の乗客達には無駄な心配をさせたくないんで言うてはおらんが、少し遠回りをしておる。君も心配は無用じゃ。第一わしがこのように寝ずの番をしているのは、なぜかと思うかね？」

「ごめんなさい」

ウィルは素直に謝った。

あの人は凄い人だ。どんな嵐の航海も成功させなされた。危険な冒険をたくさんしなされた。俺達船員のおこがれ中のおこがれだ。頭にケンの声が反すうした。僕達は、案外この難をなんなく超えられるかもしれない。

「さてわしはコーヒーを一杯飲んで来るとしようかな」

「え？」

ウィルははっと我に返った。

「コーヒーじゃよ。君もどうかね？」

「あ…僕は結構です。コーヒーはあまり好きじゃなくて…。あ、あのありがとうございます」

「そうか」

ドーラ船長は少し残念そうに言った。

「そうじゃな。安心して、もう君も寝るが良い。あ、そうじゃ言い忘れておった」

ドーラ船長は髭を手でいじりながら言った。

「今君に話したことは、他の乗客には黙っておいてくれ。先にも言ったように、無駄な心配はかけたくないのだな」

ウィルは頷いた。

「分かりました。お約束します」

「それじゃあ、また朝食で」

ドーラ船長はそう言うつと、その場を後にした。

ウィルはその後ろ姿を見つめた。ケンがドーラ船長を尊敬している理由が少し分かったような気がした。

その時ドーラ船長が行った方向とは、別の方向から人影が現れた。

野族襲来 1（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

野族襲来 2

「ごめんなさい。盗み聞きするつもりはなかったんだけど……」
声でリイだと、ウィルははっきり分かった。

「別に構わないよ。むしろ今のことを話す手間が省けて良かったよ」
リイが暗がりの中でにつこり笑うのが分かった。リイは先ほどドーラ船長が立っていたところに来て、ウィルと同じように両腕をデッキに乗せた。

「ねえ、もしかして僕たち案外野族の襲来を回避できるんじゃない？」

「ドーラ船長の言ったことを信用して言っているの？」
リイの声はやや硬かった。

「そ…そうだけど」

「ねえ、ウォルト」

そこでリイは小さく息をはいた。

「信用したくなる気持ちは、私にもよく分かるけど、油断しない方がいいと思うわ。きっとローレイも私と同じことを言うはずよ。考慮するのに値しないと……」

「どうして？」

ウィルは驚いて聞いた。

「確かにドーラ船長は船族で有名な方で素晴らしい人だと思うけど、野族はね、ウォルト、あなたは知らないかもしれないけど、優れた船族の人達を過去に多く負かしているの。きっと船を乗っ取られた船長達は、襲撃される前ドーラ船長と同じことを考えていたと思うわ。野族なんかにやすやす船を奪われやしないと」

ウィルは黙ってリイの声に耳を傾けていた。

「航路を変えたからと言ったって」

リイはウィルの心を見透かしたかのように言った。

「手引きがこの船にいる以上、何の役にも立たないと思うわ。デイ

ナーパーティの前に飛族の者がやって来ていたし、連絡を取ること
もそう難しくはないと思うわ」

ウィルは気持ちしが再び沈んでいくのが分かった。

リーの言うことは全く正しいように思えた。ならばやはり明日の午
後、野族は……。

じわじわと恐怖心が押し寄せる。

「怖い？」

リーがひっそりとした声で聞いた。

ちょうどその時、厚い雲の間から月の光がさし、リーとウィルの間
をも照らした。

ぼやけていたリーの顔がはっきりと見える。

嵐がやって来る前の、生暖かい風がリーとウィルの髪をなびかせる。

「普通の人なら怖いんじゃないの？」

ウィルは目を海の方にそらしながら言った。

月明かりのせいで、空の厚い雲がずっと広がっているのが分かる。

ちらりと横を見ると、リーはその雲をじっと眺めていた。雲は広く
広がっているが、リーが見ているのは真正面の一点だけ。まるで今
にも自分を襲おうとしている者に、対峙しているように。リーも自
分と同じ気持ちであることをウィルは悟った。だが、リーはまっす
ぐに前を見つめている。ウィルも視線をゆっくりと雲に移した。リ
イは少なくとも僕よりは勇気がある。

「リーやローズと出会ってから、一日もたっていないなんて信じられ
ないな」

ウィルはぼつりと言った。

「そうね」リーはウィルの方に視線を戻しながら、静かに言った。

「私も同じ気持ちよ。ウォルトやローレイといると、まるでずっと
一緒に旅してきた仲間みたいに、安心した気持ちになれる」

リーは微笑しながら、ウィルをじっと見つめた。その思慮深い眼差
しは、優しくも強かった。月の光に照らされて、リーの明るい茶色

の目はいつそう美しく見えた。

「明日の夜、いや明後日の夜も、一緒に旅できていたらいいね」

「つまり、襲撃をうまく逃げ切れればいいね、ということでしょ？」

「うん、そういうこと。でも…そうなる可能性はどれくらい僕たちにはあるのかな？」

ウィルはわざと明日の朝食には何が出されるか予想するような、何気ない調子で聞いた。

「分からないわ」

リイもウィルと同じ調子で答えた。

「でも」そこでリイはふうつと息をはいた。

「きつととても難しいに違いないわ」

「おもしろいじゃないか」

突然背後から声がした。振り返るとローレイが立っていた。暗くてよく表情は見えない。

「おもしろいじゃないか」

ローレイは繰り返すのと同時に、数歩前に出た。月明りにその顔が照らされる。驚いたことに、ローレイは笑みを浮かべていた。

「ここ数日の退屈を紛らわすのにはちょうどいいスリルだ。俺は絶対にマヌケな海賊どもに捕まったりしない。士族としての名誉にかけても、きつと逃れてみせる。俺達は」

ローレイは、まっすぐウィルを見た。

「こんな所で、足踏みをしている時間はないんだ」

ウィルもまっすぐにローレイを見つめ返し、そして悟った。

ローレイは普通の人ではないらしい。

一人前の士族とは皆こうなのだろうか。

悔しいけど、勇気があって、冷静で、頼もしいということを認めざるをおえない。

僕もそうになりたい。

ウィルは強くそう思った。

野族襲来 2（後書き）

ブログにてキャラクター人気投票を始めました。
ぜひ遊びに来てください！

野族襲来 3

4人は客室でその時が来るのをじっと待っていた。ウィルは自分のベッドに寝転がり、ローズとリイは反対側にあるローレイのベッドに腰かけていた。ローレイは窓に寄り、外を眺めていた。

船は既に嵐の中に飲み込まれていた。船外では風が女性の叫び声に似た音を出して吹いていた。ときどき雷鳴が鳴り響き、雨は激しく船に打ち付けていた。

計画は十分すぎるほど話し合った。

だがウィルには欠陥がありすぎるように思えた。やすやす成功するとはどうしても思えない。第一、野族が襲来するというのに、部屋にじっとしていいのだろうか。僕達は一体何のために何を待っているのだろうか。

ウィルは先程の食堂での昼食を思い出した。ドーラ船長はケンなど他の船員と食事をとっていた。一晚寝ていないせいだろうか、やや疲れているように見えた。船長から自分の目の前の野菜スープに視線を戻すとき、ウィルはケンと目が合った。ケンはウィルを見てにっこり笑った。ウィルは曖昧に笑い返すと、急いでスープを飲み始めた。色とりどりの野菜が入っていてとてもおいしそうなスープだったのに、味が全く分からなかった。船長とケンの微笑が頭を過り、胸がちくちくと痛んだ。

「もう一度言うが、忘れ物はないな」

ローレイの言葉でウィルは我に返った。こんな時に。ウィルは思った。こんな大事な時にばおっとするなんて。

「ないよ。ちゃんと何回も確認した」

ウィルはそう言うと、上体を起こし足元に置いてあるリュックを持

ち上げた。夜、部屋に散乱していた持ち物を全て詰めておいたのだ。ずっと冷静だったローレイもこの時ばかりは、少し神経をとがらせているようにみえた。その右手は常に腰に下げている三本の剣の柄に置かれていた。

その時は前置きもなくやってきた。

「た…大変だ！船長はどこだ？船長に早く！」

その声は、ウィル達の部屋のすぐ外で聞こえた。ウィルの心臓の心拍数が急激に増えた。

ついに……。

「どうしたんだ？」

部屋の外で別の声がした。

「顔が真っ青だぞ」

「トニー。大変…緊急事態だ！やつらだ。や…野族のやつらが前方から2隻、後方から1隻でこの船に向かってきている！」

男はかなり焦っているようだった。

トニーと呼ばれた男は、大声をあげた。

「何だと？本当か？そんな、まさか。この嵐の時に」

「そのまさかだ。とにかく、客を避難させなければ」

「分かった。乗客達は俺に任せろ。お前は船長を探せ。食堂に向かったはずだ」

「分かった」

一人の男が足早に立ち去る足音が聞こえた。

ウィルはローレイを見た。ローレイは目でまだだという合図をおくった。

「トニーどうかしたのか？」

また別の船員が来たらしい。

「野族だ。ハサミうちらしい」

「嘘だろ？」

「いや、本当だ。さあ、こうしちゃいられない。乗客達を救命ボ-

ト室に避難させなければ。アンジェロ、お前も手伝ってくれ」

「何を言っているんだ、トニー。お前知らないのか？」

「何だ？」

「救命ボートは何者かによって全部壊されちゃったんだ」

「まさか。一体どうすれば？」

「この嵐だ。野族のやつらも手こずるに違いない」

「相手は3隻もあるんだ、アンジェロ。それにやつらの船は我々の船よりも格上……」

「くそ。だがとにかく皆に知らせるべきだ。仲間にも緊急集合命令を！」

「そうだな。手分けして呼びかけよう」

そう言うと、トニーとアンジェロは大声を出しながら、走りだした。

「大変だ！野族の襲来だ！」

「船員は緊急に操縦室に集まれ！緊急事態だ！」

部屋の中においても、次第に騒ぎが大きくなっていることが分かった。船員たちの大声にまじって、女性の悲鳴や子供の泣く声が聞こえた。ウィル達が予想したとおり、いや計画通りに混乱が始まった。

聞こえてくる声や物音からして、既に廊下が人であふれ返っているのが難なく想像できる。

「さてそろそろ出発だ」

部屋の外の騒ぎとは対照的に、ローレイの言葉はとても静かだった。ウィルは無言でリュックを背負って立ちあがり、リイとローズもそれに倣った。

そして、一行はローレイ、ウィル、ローズ、リイの順で部屋の外に出た。

いいか、計画はあくまで計画だ。

ローレイの言葉がウィルの頭の中で反芻する。

どんな障害物があっても、振り切って前に進むんだ。

それは目標とかそんな生ぬるいものではなく、命令だった。

何も言われない限り、俺から離れるな。そして、離れると言われたら、即座に離れるんだ。決して振り返るな。

廊下は既に想像通り、人であふれ返っていた。障害とまでは言えないかもしれないが、ウィル一行はまっすぐに進むのに若干苦労した。人々の叫びや悲鳴が他の全ての音を飲み込んでいた。ウィルはその混乱ぶりにややたじろいたが、ローレイのすぐ後ろにピタリと張り付いたまま進んだ。4人は黙りこくって、進むことだけに集中していた。

障害物。

ウィルは歩きながら考えた。頭に思い浮かぶのは、恐ろしい野族の姿。筋肉が盛り上がった腕の先には、大きなタガーが手に握られている。僕は上手く乗り越えることができるのだろうか。いや、僕達は皆無事に……。考え込むにつれ、ウィルには周りの喧騒が聞こえなくなっていた。恐怖心のためだろうか、自分の時間と周りの時間が食い違っている気がする。廊下がいつもより狭く思えるのは気のせいだろうか。ウィルは足元に目を落とした。足は動いている。僕の頭よりも、足はやるべきことをしっかりと認識しているらしい。だからなのだろうか、さつきから歩いているという感覚がない……。

とにかく進むことだけ考えればいいんだ。

ウィルは自分に言い聞かせた。
今は進むことに集中しなければ……。

障害物。それは僕達がその手から逃れなければならない、野族たち。

だけではなかった。

「ウ、ウォルトさん」

その声は、周りの騒ぎにもかかわらずウィルの耳にしっかりと届いた。

足もとから声のする方へと目を動かす。

ひどく怯えた顔つきをした女性。髪が少し乱れている。その女性の腕にはカミーユが抱かれている。

「オ…オジエさん」

ウィルは無意識に足を止め、その女性とカミーユを見つめた。カミーユは事態をよく理解していないらしく、「おにいちゃん」と言っているウィルにつこり笑いかけた。

後ろから着いてきたローズとリイも足を止める。

「ど…どうなっているのかしら」

オジエ夫人の声は震えていた。

「誰かが…野族…海賊がこの船を襲うなんて言っているのが聞こえたんだけど、まさかそんな……」

オジエ夫人の緑色の瞳がまっすぐにウィルに向けられる。その瞳は訴えていた。嘘だと言ってください、と。

ウィルは何を言うべきか分からず、また何かを言うべきかどうかも分からず、オジエ夫人を見つめ返した。

「何をしているのよ！ローレイの言ったことをもう忘れたの」

ローズがウィルの肩を押しながら言った。

「気持は分かるけど、進むのよ。どんな障害物があっても、進むことだけを考えるのよ」

リイもローズの背後から一歩踏み出し、ウィルに言った。

「早く前に進まなければ。取り返しのつかないことに」

「まあ、あなた達……」

オジエ夫人は3人を交互に見て言った。

「どこかに行くんですか。この騒ぎの中、一体どこに……？」

オジエ夫人の顔に残っていたわずかな色も消えていった。カミーユは母親の様子がおかしいのを感じ取ったらしく、不安そうに母親の顔を見つめた。

「おい！」

3メートル離れたところから、ローレイの鋭い声が飛んできた。

「何をしている？！早く来るんだ！こんな時に。来るんだ。命令だぞ」

そうだ進まなければならない。

ウィルは自分に言い聞かせた。

進むんだ。

だが、足が言うことを聞かない。

「あの……」

ウィルの横から、ローズがオジエ夫人に話しかけた。

「私達は急いで行かなければならない所があるんです。だから……これで失礼させていただきます」

ローズはそう言うと、ウィルをぐいぐい前へ押し始めた。押しの力

により、ウィルの足が一步動く。ウィルはそれでもオジエ夫人をそしてカミールを見つめていた。

「リイも手伝って!」

ローズが叫んだ。だが。

「リイ?」

ローズの声に何かを感じ、ウィルは振り向いた。

リイは泣いていた。自分の腕で自分を抱きしめるようにして立っていた。

野族襲来 3（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

野族襲来 4

「リイ……」

ローズは今度は問いかけと言うよりも、つぶやくように言った。

ウィルはリイの様子が急変したことに驚き、リイの目を見つめた。

茶色の目にはローズもウィルも映っていない。どこか遠くを見ているような目。

「いや……」

小さな悲鳴と同時にリイは床に座り込んだ。両手を耳にあて、震えている。

「どうしたんですか。何が起こっているんですか。教えてください！」

リイの尋常ではない様子に、オジエ夫人は不安を大きくしたようだった。

ウィルは困り果てて、その場に立ち尽くした。周囲の騒ぎはより大きくなっていく。

「リイ、立つのよ。早く行かなきゃ」

最初に動いたのは、ローズだった。

リイの左腕を鷲づかみにすると、無理矢理立たせた。

リイは体を震わせ俯いていたものの、全く抵抗することもなく、ローズにひかれるがまま、前へ進んだ。

「さあ、あんたも行くのよ！早く！」

ローズはウィルの横まで来ると、脅すような目つきでウィルを見ながら言った。

「失敗は許されないわよ！」

そしてもう一步ローズが前へ踏み出そうとした時、外からドンという、何かが破損するような鈍い音が聞こえた。同時に船が大きく傾く。

人々の悲鳴が上がった。オジエ夫人もカミーユをしつかりと抱きな

がら、周りの悲鳴に加わった。

ローズはバランスを失い、前に転びかけたが、危機一髪ウィルの胸倉を掴み、態勢を立て直した。

ウィルは掴まれた勢いで前につんのめりになり、そのまま廊下の壁に顔から激突した。

幸い、船は徐々に態勢をもとに戻した。

ウィルは目を涙で潤ませ、鼻をさすりながらもほっとした…のは束の間だった。

「時間がない」

次にウィルの服を掴んだのは、ローレイだった。

「今のはこの船が捕らえられた音だ。ローズ！」

ローレイは顎で先に行くよう、合図した。

ローズはローレイに黙って頷くと、まだ体を震わせているリイの腕を掴み、走りだした。

「さあ、行くんのだ。俺が一番後ろを歩く」

有無を言わせない口調。

ウィルもローズの後に続いて、走りだした。

が、進まない。

何事かとウィルは後ろを振り返った。

すぐそこには、オジエ夫人の顔。その左手はウィルの服の裾を掴んでいた。

「どこに行くんですか？ 私達も連れて行ってください。お願いします。私達を助けて」

オジエ夫人は顔を真っ赤にし、泣いていた。

「夫が…この子の父親がオーラムステツラ島で待っているんです。

この子は一度も父親に――

「今すぐに離せ」ローレイは唸るように言った。

「女だからと言って、俺は容赦はしない」

夫人は取り乱し膝を床についていたものの、カミーユを抱く右腕と、ウイルの裾を掴む手は微動だにしなかった。

「お願いし――」

夫人の声は、デッキの方からのすさまじい人々の悲鳴に掻き消された。

ドタドタと逃げ惑う人々の足音も聞こえる。

鈍いウイルでも今すぐに逃げなければならないということが、はっきりと分かった。

「オジエさん。すみません。離して――」

ウイルが言い終わらないうちに、オジエ夫人の体が大きく傾いた。ローレイが横からオジエ夫人を思い切り押したのだ。ようやくオジエ夫人の手がウイルから離れる。オジエ夫人が床に倒れるのと同時に、カミーユが火がついたように泣きだした。

ローレイは即座に左手でウイルの腕を掴み走りだした。右手は剣の柄の上に置かれている。

デッキからの騒ぎがすぐそこまで迫ってきているのが分かったが、ウイルは気にならなかった。

それよりも何よりもウイルの背中を追いかける、オジエ夫人の嗚咽とカミーユの泣き声。

心臓が張り裂けそうだった。

仕方がない。僕にはどうにもできない。

ウイルは自分に言い聞かせた。

けれど、涙で視界がぼやけるのを防ぐことはできなかった。

ウイルとローレイは階段を下り廊下を走って、なんとかローズとリイに追いついた。

ローレイはウイルの腕を放すと、まだ力を無くした状態で、ローズに助けられていたリイを支えた。リイは熱があるかのように、ぐったりとしていた。

「俺がリイを連れていく。船長室はすぐそこだ。早く先に行け」

ローズは黙って頷くと、前に進もうとした。だが一歩踏み出したまま、止まった。

「おう。讓ちゃん、大部屋で一緒だったな。最近は見かけなかったが」

ローズの前に立ちはだかっていたのは、スキンヘッドの男だった。

「どこに行くつもりか知らないが、逃がさねえぞ。働き盛りの4人市場では高い値がつくからなあ」

男はにんまり笑うと、右手をゆっくり上げた。手には大きなナイフが握られている。

「傷つけられたくないなら、おとなしくロープに縛られるんだ」

そう言くと、男は左手で腰に携えているロープをポンとたたいた。

ここまでなんだろうか。ウィルはナイフを見つめながら思った。男が戦い慣れしているということは、ナイフの使いこまれている感じからも難なく想像できる。僕達には到底勝てっこ…。

「チツ」

こんな緊迫した状況の時に、味方側から舌打ちが聞こえるなんて、ウィルは露ほども思わなかった。

ウィルが振り返ると、ちょうどローレイはリイをローズに預けているところだった。

リイを受け取ると、ローズは怯えた目でローレイを見上げた。

「一体どうするつもり……」

ローレイは何も答えなかった。だがその瞬間、ウィルはローレイの手が剣の柄にあてられるのを見た。

次のローレイの動作を、ウィルは見ることはできなかった。ただ顔で、すぐ横を通るローレイの風を感じただけだった。全ては2、3秒のうちに起こった。ローレイの踏み込みの音。金属と金属がぶつかる音。何かが壁にぶつかる音。剣が空を切る音。ウィルが慌てて

男の方を振り返った時には、事は終わってしまったていた。ポタリ。

床に真つ赤な血が一滴落ちる。そしてまたポタリポタリと二滴、三滴。

スキンヘッドの男は、左腕で右腕を押さえていた。血は男の右腕から出ているらしい。右手に握られていたナイフは、男のすぐ横の壁に突き刺さっていた。

「勝負あつたな」

ローレイは剣を男の顔に向けながら言った。

「くそ！」

男は顔をそむけた。

「潔くロープを差し出せ」

ローレイは剣をいつそう男の顔に近づけながら言った。

男は観念したらしく、おとなしく従った。

ローレイのその後の動作も素早く、ウィルは思わず見とれてしまった。

まず男の腕を縛り、口もロープで塞ぐと、船長室の隣にある救命ボート室に男を連れていき、最後に足を縛って部屋の戸を閉めた。3分もかけずに、ローレイはこれらのことを器用にやってのけた。

ローレイが凄い実力の持ち主だと分かっていたつもりだが、実際に目の当たりにするとウィルはただ唖然とするしかなかった。ローズを見ると、ウィルと同じように驚いているのが分かった。

「さあ、時間がない。船長室に入れ」

ローレイは何事もなかったかのように言うと、再びリイをローズから受取り、歩き出した。

ウィルとローズは同時に我に返り、後に続いた。

野族襲来 4（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

野族襲来 5

船長室には誰もいなかった。

「よし！俺がボートに乗った後、リイを次に乗らせるんだ」

ローレイが窓に歩み寄りながら言った。

ウィルもゆっくりと窓に歩み寄る。

外はひどい嵐。一隻の救命ボートに乗り移るなんて、いくら隠れるためとは言え、自殺行為ではないだろうか。

ローレイはカーテンを指差した。

「その前にロープを少し緩めて、ボートを水面に置く必要があるな」
「私がやるわ」

ローレイが手が塞がっているので、ローズが前に進み出た。
「慎重にやれよ」

ローレイはリイを支えながら、顔だけ窓から外に出した。

「ボートが水面に浮かんだら、言ってちょうだいね」

ローズは慎重にロープをほどき、緩め始めた。

ローレイが横で「ゆっくり、そのまま」などと、掛け声をかける。

ローレイもローズも顔が今までにないくらい真剣である。

「よし！いいぞ。ロープをまたカーテンにキック結びつけるんだ」
強い雨と風が窓から入ってくる。波は高い。

階上からは人々の足音や悲鳴が聞こえてくる。

ウィルはなぜか取り残されている気がした。自分だけ緊急事態というステージにいないような感じがする。

「ウィル、リイを！」

ウィルは前に進み出てローレイからリイを預かった。リイは目を閉じていたが息遣いが若干荒く、少し熱を帯びているようだった。

「行くぞ！」

ローレイは窓の枠に飛び乗ると、一瞬もためらうことなく向こう側に姿を消した。

ウィルは息をのみ、窓から身を乗り出した。

ローレイは荒れ狂う波の上のボートに、なんとかバランスとりながら立っていた。

足元には雨にぬれた革袋が置いてあった。ボートをここに隠していた人が準備した物だろう。

「さあ、リイを」

「分かった！」

外の嵐の音に負けないよう、ウィルはローレイに叫ぶと、すぐさまリイに話しかけた。

「リイ？今からボートに移すけど、大丈夫？」

リイはうつすらと目を開けると、小さい声で返事をした。

「…ごめんなさい。一気に船酔いがきたみたいで……。大丈夫よ」
リイは小さく息を吸うと、ふらふらとウィルを離れ自分の足で立った。

ウィルはなおも肩を持って、支え続けた。

ローズも急いで駆け寄ると、リイを支えるのを手伝った。

「ローレイ、行くわよ！」

ローズが外に向かって叫んだ。

「分かった！」

大声で返事が返ってくる。

「大丈夫よ」

リイはウィル達に支えられながら窓枠に飛び乗ると、少し微笑んだ。動作が弱々しかったものの、リイもためらうことなく、慎重にロープを伝って降りはじめた。

足がボートに着くまで、あと数十センチというところになると、ローレイが後ろからリイが抱きかかえるようにしてボートに降ろした。
「私、先に行くわよ」

ローズがそうウィルに言った時には、既に枠に乗っていた。

「あんた、すぐ来なさいよ」

ローズはウィルに釘を刺すように言うと、ボートに降りはじめた。

どうやらウィルの恐怖心を見透かしていたらしい。

ローズもローレイに助けられてボートに乗ると、ウィルに向かって叫んだ。

「いいわよ！早く来て！」

ウィルは溜息をつきながら、手を窓枠にかけた。

やるしかないんだよ、ウィル。

自分にそう言い聞かせながら、目を閉じ、大きく息を吸う。

そして腕に力を入れ窓枠に飛び乗ろうとした時、閉めていた船長室のドアがバーンと大きな音をたてて開いた。

どうして僕はいつもこうなんだ？

後ろを振り返らず、すぐにもボートに飛び乗るべきと頭の隅では分かっていたが、体が言うことを聞かなかった。

ウィルはゆっくりと振り返った。

ドアのところに立っていたのは、ドーラ船長。

「お…お前は何しているんだ。そ…そこで」

船長の声は震えていた。その顔は蒼白だった。

ウィルはもつともな質問だと思った。今自分がいる部屋は、この目の前に立っている人の部屋だ。

船長は足早にウィルに近づいて来た。

ウィルは正直に逃げようとしていることを言おうと思った。ドーラ船長はこの緊急事態に責任を感じ、少しでも客を安全に逃したい、そう考えているはずだ。

すぐ近くまで来たドーラ船長を見上げ、口を開こうとした時、世界が突然傾いた。

世界ではなく自分が傾いたのだと気づいたのは、ウィルが床に倒れた後だった。

ウィルは驚いて、自分を突き飛ばした張本人を振り返った。

ドーラ船長は窓から上半身を乗り出していた。

「お前達は何をしているんだ。この…」

ウィルはドーラ船長の蒼白な顔が、一気に赤くなるのを見た。ドーラ船長は外にいるローレイ達に向かって、大声で叫んだ。

「この泥棒！今すぐにその船を降りるんだ。その船は私の者だ。くそ。野族どもからもらったルクも乗せてあるというのに」

ウィルは信じられない思いでドーラ船長を見つめた。

「手引き」は目の前にいる、ドーラ船長だった。

ありえない。

ケンがあんなにも尊敬していたのに。船長の名誉をあんなにも守ろうとしていたのに。

怒りが沸々と込み上げる。

「船長のくせに……。信じられない。この」

ウィルは感情任せに大声をあげた。

「人でなし！！」

ドーラ船長はウィルの大声にピクリとすると、ようやく視線をウィルに戻した。

まるで骨董品を品定めするかのような目で、ウィルを眺めた。

ウィルがやばいと思った時には、もう手遅れだった。

ウィルはドーラ船長に腕をつかまれ、白髪が生えている老人とは思えない力で引き起こされた。

そして気づいた時には、顔の前に綺麗に磨かれているナイフが突きつけられていた。

「おい！その泥棒！」

ドーラ船長は外のローレイ達に向かって、大声で言った。

「早く降りるんだ。さもないと、この小僧の命はないぞ」

その多くのしわが刻まれた顔には、薄笑いが浮かんでいた。

「くそ！」

救命ボートの上で上手くバランスをとりながら立っていたローレイは、唾を吐いた。

「どうするの？」

ローズが座ったまま、ローレイを見上げた。

「とにかくあいつを助けないと……」

「俺が行く」

ローレイはロープを手にとりながら言った。

「さっさと片付けてくる。その間に俺のリュックの中の浮き袋を身につけておけ。リイにも着せておいてくれ」

そう言つてロープに足をかけた時、今までのよりも一際強い風が救命ボートを襲った。

救命ボートは風に流され、ローレイはバランスを失つてボートに倒れた。

「早くいかないとあいつが……」

ローズは立ち上がり、ロープを手繰り寄せるようにひっぱった。

すぐにローレイも立ち上がり、ローズを手伝った。

ゆっくりと船はもとの所に戻っていった。

あともう少し。ローズが唇を噛んで、腕に全身の力をこめた。

だが次の瞬間ローズは悲鳴をあげながら、後ろに倒れた。

風で倒れたのではなかった。

波でもない。

ボートをつなぎとめていたロープが切れてしまったのだった。

一方ドーラ船長はウィルにナイフをあてたまま、窓から2メートル離れたところでローレイ達が上がってくるのを待っていた。外がど

うなっているのか、全く分からなかった。ローレイ達が上がってくる気配も一向に感じない。

「早くしないと、この小僧の命はないぞ」

再びドーラ船長が叫んだ。ナイフが数センチウィルの顔に近づいた。ウィルは目を閉じた。

ローレイはどういう手段をとるのだろうか。また僕のせいでこんなことに……。

でもローレイならきっと上手くやってくれるに違いない。

ナイフを当てられていても、ウィルは自分でも驚くほど冷静だった。もちろん心臓はバクバクと猛スピードで動いていたが、パニックに陥ったりはしなかった。

もしかしたらドーラ船長の何がなんでもボートを取り返したいという必死の気持を感じ取っていたからかもしれないが、それと同時にローレイのことを知らず知らずのうちに深く信頼していたからでもあった。

自分が置いて行かれるという疑念は、これっばちも湧かなかった。

ローレイは必ず助けに来てくれる。

「何をするんだ」

驚きのまじったドーラ船長の声が聞こえたのと同時に、ウィルの体は自由になった。

振り返ると、ドーラ船長は何者かに羽交い締めに使われていた。

ウィルはその者の顔を見て叫んだ。

「ケン！」

野族襲来 5（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
感想お待ちしています。

野族襲来 6

ドーラ船長はウィルが叫ぶと、血相を変えた。

「お…お前よくも船長に向かって……」

ドーラ船長はケンから逃れようとものがきながら言った。

「何が船長だ！」

ケンは、ドーラ船長を締めている腕の力をいつそう強くした。

「客を野族の者どもに売る船長が、船族がいつてえどこにいる？ 恥ずかしくねえのか。海色の腕輪の誇りはどうした？ 一人だけ逃げようとするなんて……」

「離すんだ。離せ。私が好きでこんなことをしたとでも……？」

「あんたが好きでやったことだろうが、何か理由があったことだろうが関係ない。あんたはこの船を売った。それが事実だ。お前の名誉なんか、もうこの海の上に存在しない」

ケンは涙に目を浮かべていた。ドーラ船長はあきらめずにもがき続けている。だが、ケンの力にはかなわない。

「俺は最後まであんたを信じようとした。ディナーパーティーの始まる前。俺はそうじと嵐が来るんで救命ボートの状態を調べるため隣の部屋を訪れた。綺麗に並べてあったボートが乱れていたことや壁に穴が開いていることから誰かがこの部屋に入ったことが、俺にはすぐに分かった。梯子を動かして棚の上にあった浮き袋が少しとられていたことも分かった。不思議に思ったが、俺はそこまで驚きはしなかった。嵐に怯えた客が、この部屋に忍び込んでくすねたのだろうと思ったのだ。本当に驚いたのは、音が隣から聞こえて壁の穴を覗いた時だよ。あんたがボートを苦勞しながら窓の外に隠すのを、俺は見たんだ。あんたはボートを運ぶのに夢中で、気付かなかったと思うが」

ドーラ船長はそこで、ぴたりともがくのをやめた。ウィルは息をひそめて、ケンの話に聞き入った。

ケンが続けた。

「それでも俺は何か理由があつてのことだろうと、無理矢理自分を納得させた。それだけあんたを尊敬していたんだ。だがディナーパーティの時。野族をあんたにも毛嫌いしていたあんただ。見るからに泥腕輪のあの男達と話しているのが、俺の目にどれほど異様に映つたのか分かるだろう。怪しいと思い、食堂を出た禿頭の男をつけてみたら……。それでも、俺はお前への疑いを消そうとした。それなのに……。それなのに」

「うるさい！ 黙れ！！」

ドーラ船長が叫んだ。ウィルは驚いてびくつとした。

「何も知らないくせに、偉そうにするな。ケン・オハラ。私の妻と娘は原因不明の病気で床についている。薬はまだ開発されていない。このままでは命も危うい。ただ風の噂で、その病気を遅らせる薬がある聞いた。だが薬を欲している者は五万といて、手に入れるには途方もない額のルクが……。私の貯金したルクでは全然及ばない」

船長は急に声の調子を変えた。もう抵抗はしていない。

「お願いだ。行かせてくれ。妻と娘が私を待っている」

ドーラ船長は必死だった。必死の願いだった。

ウィルは船長に怒りを感じる一方で、同情せずにはいられなかった。

「俺はさっき言ったはずだ」

ケンは怒りを押し殺しながら言った。

「どんな理由があろうとも、お前はこの船を売ったのは事実だ。何の変りもない。海を渡る者として決してやってはなんねえことを、あんたはやった。俺は許さねえ。あんたは俺と一緒に、客と一緒に野族の捕虜になるんだ。絶対に逃さない」

ケンの意志の固い言葉に、ドーラ船長は全身の全ての力が抜けたようだった。

だらりと頂垂れ、つぶやいた。

「ナタリー。メイ」

窓の外から叫び声が聞こえた。ローズの声だ。

「ウォルト！無事なの？ウォルト！」

ウィルは振り返って叫んだ。

「ああ、無事だ。ケンが助けてくれた！」

そしてウィルは視線をまたケンに戻した。

ケンも窓の方を顎でくいつと指した。

「行け、早く行くん。今野族の者達は上で捕獲をしている」

そこでケンは歯を食いしばった。

「それが終わったら、ここにも降りて来るだろう。さあ、行くん」

「ウォルト、大丈夫ならすぐ来て！！ボートがもう……」

ウィルはローズの声にまた振り返ったが、さっきと同じようにすぐにケンに視線を戻した。

「ケン。僕……」

ケンは大声をあげた。

「いいから行くん！お前だけでも助かるんだ。行け！行くん」
「！」

ウィルは口をつぐんだ。そしてくるりと向きを返ると、窓のところに走った。

窓の枠に上ると、ボートをつないでいたロープが切れているのが分かった。

だが代わりにローレイが先に大きな鉤針のついたロープを窓の縁にかけ、なんとかボートを船につなぎとめている。

ローレイがウィルを見上げて言った。

「鉤針を外してから、すぐに飛び降りろ！」

ウィルは最後にもう一度ケンを振り返った。

ケンは笑っていた。

「じゃあ、またな。ウォルト」

ケンは何でもないように別れの挨拶をした。明日も会う予定の友人に挨拶するかのよう。またすぐに会えるかのよう。

ウィルは胸がいつぱいになり、そのために言葉が出なかった。

ケンもカミーユも見捨てて、僕は一体どこに行くのだろうか。
何をするために、自分だけ助かるのだろうか。

答えは出なかった。

ウィルは鉤針を外した。

そして目を閉じ、飛び降りた。

野族襲来 6 (後書き)

読んでくださってありがとうございます。
感想お待ちしています。

天性

「海賊船よ！」

ローズの指の先には、3隻の中の1隻の野族の船があった。

ウィル達が乗っていた、客船とは随分雰囲気や造りが違っていた。

海賊船は客船よりも大きく、デザインが粗雑だったが全体的にがっしりとしていた。

海賊の船だった。

海賊船から客船にかけて板が架けてあり、野族の者達が客船にそれを使って乗り込んで行ったことが分かる。

ウィルが窓から飛び降りると、ローレイは剣を船から抜いた。

救命ボートは荒い波のおかげで急スピードで海賊船に向かっている。

「あれに私達乗り込むね」

ローズがひっそりとした声で確認した。

「ああ」

ローレイが答えた。

「船に残っているのは少ないだろうし、救命ボート室とかには人はいないだろう」

「それにしても」

ウィルが浮き袋を身につけながら、言った。

「僕達ラッキーだね？自分達でこがなくても、この波がああ船まで連れて行ってくれるんだから。結構速いスピードで」

海賊船まであと2メートル程。

「そうでもないみたいよ！」

ローズが悲鳴のような叫び声をあげた。

荒波を走るボートは速すぎた。

「突撃だわ！」

「飛び込め！」

ローレイは叫ぶと、リイを腕の下にかかえ海に飛び込んだ。
ローズとウィルも間髪入れずに飛び込んだ。

4人は海賊船に衝突せずに済んだが、乗り手がなくなった救命ボートはそういかなかった。

救命ボートが海賊船にぶつかり、鈍い音がした。

ウィルは泳いだことなど一度もなかったが、直前に身につけた浮き袋のおかげで助かった。

ウィルは感動して、隣に浮いていたローズに話しかけた。

「浮き袋って、本当に優れものだよね？」

「良かったわ！荷物が無事だった。やっぱりついてるわ！」

見事に無視された。

ローズの後について、足を不器用にバタつかせながらウィルはボートに近づいた。

波が荒いたため、ほんのちよつとの距離でも近づくのに苦労した。
縁をつかんでボートの中を除くと、真ん中に大きな亀裂が入っていた。

「本当にラッキーだった。各自荷物をとるんだ」

ローレイはそう言つと自分とリイの分をとった。

続いてローズとウィルが荷物を手に取った。

「良かった……」

急に黙り込んだウィルを見て、ローズが不思議そうに聞いた。

「違う……」

「え？」

「これ、僕のじゃない」

ウィルが手にしたのは、ボートにもともと乗せてあった革袋だった。つまり、ドーラ船長が準備していたもの。

もう一度ボートの中を確認する。
ない。

ボートの上には何も乗っていない。

ウィルは顔から血の気がひいていくを感じた。

薬や『基本薬学』の本なんてどうでもいい。

そんなの糞くらえだ。

ルク……。

ローレイも持っているからなんとかなるだろう。

ウィルはボートの向こう側にいるローレイを必死の面持ちで見つめた。

ローレイは気づいたらしく、同様に顔が真っ青になっていった。

「どうしたの？ そんなに大切なものが入ってたの？」

ローズがローレイとウィルとを交互に見比べながら聞く。

波が船に激しくぶつかり、大量の水しぶきがウィル達にふってきた。

大切な物。

そうさ。

大切さ。

僕達にとっては唯一の道標だったんだ。

この国の守護神、そして王家の紋章pegasusが刻まれた、古びた木箱。

絶対に失ってははいけなかった。

大きな波のせいでウィルの身体がふわっと浮き上がる。同時にウィルの胃も浮き上がるような感じがした。

「あら？」

ふと我に返ると、ローズが目を細めてウィルを見ていた。
「何？」

短い言葉に大きな絶望感をこめて、ウィルは聞いた。

「あんた、持っているじゃない」
「何を？」

ウィルは今度はいらいらしながら聞いた。

「リュックよ。あんたの背中！」

ウィルはいきおいよく首を回る限界まで回した。

あった。

ウィルはリュックをしっかりと自分で背負っていた。

服が水を吸収し重くなっていたので、リュックの重みに気づかなかったのだ。

そういえば、浮き袋を身につけるので精いっぱい、下ろす時間がなかったんだ。

「あんた、本当に間抜けね。きっとそれは天性のものだわ」
ローズが確信したように言った。

一方ローレイは何も言わなかった。

実を言くと、ほっとするのは呆れ返るので何かを言う余裕がなかったのだ。

しばらくして、ローレイはポツリとつぶやいた。

「乗り込むぞ」

天性（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

今回の話は少し遊びました。（笑）

次回は真面目にがんばります！

感想をお待ちしています

更新の励みになります！

闇の島 1

「どうやって乗り込むの？」

ウィルはローレイに大きな声で聞いた。

今、4人は海賊船を見上げていた。

「早くしないと……」

そこでウィルは言葉をきり、リイとローズを順に見た。

言葉を続けなくても、言いたかったことは明白だった。

リイは目を閉じたまま荒い息をしている。さっきよりも苦しそうだ。ローズはしっかりと目を見開いていたものの、紫色になった唇を震わせていた。

激しい雨と荒い波が、着々と4人の体力と体温を奪っていった。

「ちょっと待っててくれ……」

見ると、ローレイはズボンのポケットを探っていた。

「くそ、手が震えてうまく動かねえ……」

その直後ローレイが取りだしたものを見て、ウィルは舌を巻いた。やっぱりローレイはただ者じゃない。

大きなかぎ針つきのロープ。

ローレイはそのかぎ針を右手に持つと、海賊船を見上げた。

客船とは違い、海賊船のデッキは低い位置にある。

そのためロープをかけるのに、さほど苦労はしなかった。

4人はすみやかに海賊船に乗り込んだ。

皆無言だった。それだけ、船の上に上がりたいという気持ちが強い。

野族の者達も雨に打たれながらデッキに立っているのが嫌なのか、そこには人がいなかった。

「身を低くしろ」

それでもローレイは慎重さを捨てなかった。

一同はローレイの後について、看板から階下に行く階段の前まできた。

ローレイは立ち止まり、靴と靴下をぬぎ、リュックにしまった。

「足をふくんだ。全身も軽くふいてくれ。服はしぼるのがいいだろうな。ばたばたしずくが落ちると、後で見つかりやすいからな」

3人は無言で言う通りにした。

「それくらいでいいだろう。少ししずくが垂れても仕方ない。乾くのに時間はかかる」

ローレイが三人を見渡しながら言った。

「ここからはやつらがいる可能性が高い。できるだけ足音を立てるな。声も出すな」

だがその忠告はウィルならまだしもローズとリイに言う必要はなかった。

リイはもともとぐったりしていて、歩くのも弱々しかったし、ローズはローズで寒さのために顔は蒼白で体を震わせており、話したりどずどす歩いたりする元気はなかった。

ウィルもややぐったりはしていたが、ローズやリイよりはましだった。

ローズやリイはウィルよりも長い間雨に打たれていたからだろう。

ウィルはふと湧き上がった疑問を口にした。

「あの、ローレイ。どこに身を隠せそうな部屋があるか分かるの？」

「分かるわけないだろう」

ローレイは眉をひそめながら言った。

「だが、だいたい予想はつく。行くぞ」

ウィルは口をぎゅっと閉じ、リイ、ローズの後に続いた。

認めるのは悔しいが、ローレイの言う通りにしていれば大丈夫という思いがあった。

廊下を歩いた後、4人はさらに下へと続く階段を下りた。階上に比べ、そこは薄暗く少し汚かった。ランプの数も少ない。

4人はなるべく静かに歩いたが、そこまで気をつかなくとも外の嵐がその音を消してくれていた。

ローレイが立ち止まったので、後ろの三人も止まった。突き当りの部屋。

ローレイは自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「5、6人くらいまでならいける、だが、それ以上は……。いや、その可能性は極めて低い」

そしてローレイは後ろの三人に呼び掛けた。

「行くぞ」

静かにドアノブを回し、わずかにドアを開ける。

ウィルはローレイがそうするものだと思った。

だが、違った。

右手は剣の柄に置き、左手でドアノブを回し、音は立てなかったものの、いきなり大きく開けた。

そのため4人の視界に一瞬で一人の男が入ってきた。

「お…お前達は一体……」

「一人か…ラッキーだ」

部屋にいた男の言葉は無視して、ローレイが言った。

「暴れられると、他の奴らに聞こえるかもしれねえから、さっそく」
そういうと、ローレイは飛び出した。

「ひいひいひい!!」

男の悲鳴と同時に、ドスンという音がした。

ウィルが急いで部屋に入ると、男は尻もちをついていた。手には何も持っていない。

自分に向けられた、ローレイの剣を怯えて見ている。

ウィルは少し首をかしげて、男を見つめた。

スキンヘッドの男達とは随分違った体格をしていた。

図体はでかいが、がっしりはしておらず、雪だるまのようにまるまると肥っている。

身長もあまり高い方ではなかった。

少し長めの黒髪はぐしゃぐしゃだ。

「い…命だけは助けてくれ！」

男は嘆願した。

ローレイは呆れ返った顔で肩をすくめた。

「おいウィル、俺の背中のリュックからさっきのロープをとってくれ。そしてローズ、部屋に入ってドアを閉めてくれ」

「どうやら、部屋はビンゴのようだね」

ロープをリュックから取り出し、手渡しながら言った。

その部屋には古びたイスや机、本などガラクタばかりが置いてあった。

ローズとリイは部屋に入ると、壁によりかかって座り込んだ。

「そうだな」

ローレイは相槌を打ちながら、男の両手を縛った。男は抵抗しなかった。余ほど怖かったのか、自分から両手を差し出していた。

続いて尻もちをついた格好のまま、両足を縛る。

「ちよつとでも、大声を出したら」

ローレイはきつく縛りながら脅した。

「命はないと思え」

男は何度も激しく頷いた。

「名前は？」

ローレイが男に聞いた。

「キリル・ベニート……」

ローレイを怯えた目で見上げながら、男は答えた。

ローレイはにやりとした。

「よろしくな、キリル」

その表情は野族の奴らよりも恐ろしかった。

ウィルは寒さのためか、あるいはローレイの恐ろしさのためか小さく身震いをした。

闇の島 1（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
感想をお待ちしています。

闇の島 2

海賊船の倉庫に乗り込み、2時間ほどたった頃。

ローレイによるキリルの尋問は既に終わり、倉庫の中の5人は無言のまま座り込んでいた。

誰も一言も話さない。キリルを除いた4人に関しては、その気力も残されていない。

ウィルも乗り込んだ時はまだ良かったのだが、倉庫に入って安心したせいか、この数時間で疲れがどつときた。ローレイが倉庫の隅で見つけた毛布を身にまとっているが、毛布の中で体が震えていた。海賊の者達に見つかった時のことを考え、服を脱いで乾かすこともできない。

リイとローズの容態はさらにひどかった。2人とも発熱をしているようで、はたから見ると意識があるのかどうか分らない。特にリイはよほどの高熱が出ているらしく、ときどきうなされて、小さく何かつぶやいていた。

ローレイは土族の村で小さい頃から修行を積んできたため、体力には自信があつたが、昨晚準備や偵察などでほとんど寝ておらず、またエシミス島を出発してから四六時中神経を尖らせていたので、さすがに疲れ、その目は空中の一点をぼんやりと見つめていた。

キリルの尋問は円滑に進められた。キリルは内部情報を漏らすのに何の抵抗もなかったようだ。自分の命をかけるほどの仲間及び首謀者への忠誠心はなかったらしい。

この襲来の手謀者はウィゴ・グラーク。海賊として名高く、今回は3隻の海賊船を仕切っている。幸いウィル達が乗り込んだ船とは別の船に乗り込んでいるらしい。酒が好きで、いつも手には酒が握られているらしい。この船の海賊たちはほとんど客船に乗り込んでい

るが、バヤン島に着くまで客船に待機するという計画であった。今頃は客船の食べ物で宴会をしているだろうとキリルは言った。

ここまで来て、運はようやくウイル達の味方してくれた。バヤン島に着くまでこの今いる部屋にいても、見つかる可能性は極めて低い。だがローレイは油断せず、ドアの前にほこりをかぶっていた本棚を置き、簡単に開かないようにし、野族の者が部屋に入ってくる前に窓から外へ逃げられるようにした。

「それで、お前は何をしていたんだ？」

ローレイの最後の質問はこれだった。

「そうじだよ。お…俺は雑用係なんだ」

ローレイは馬鹿にしたように鼻をならした。

「馬鹿にしたきゃすればいいさ。まっとうな人間にも野族にもなれない俺を」

この時だけキリルは声を荒げた。

「だけどこの方がいいんだ。下手に命を懸けなくてもすむ。危なくなったら逃げられる。小心者の俺にはこれがふさわしいんだ」

キリルの声は次第に小さくなっていき、最後は自分に言い聞かせるようだった。

「そうだな。まあ、俺達にはお前が好都合だった」

ローレイはそう言つと、尋問を終わらせた。

一時間以上続いた沈黙の後、ふいにローレイが立ち上がった。

他の者達の視線がローレイにそそがれる。

ローレイは窓のところに静かに歩いて行った。

「足音……」

「え？」

ウイルがローレイに聞き返した時、頭上でドタドタという音がした。客船から数人野族の者が戻ってきたようだ。入港準備。キリルがそう言っていた。

「時間みたいだな」

ローレイは振り返って言った。

その顔は今までよりも険しかった。

「これからが、もしかしたら一番の難関かもしれない。体力もあまり残っていない。しかも、これから足をつける島はバヤン島。安全に休息をとれる場所があるかどうか分からない。でも、死ぬ気で力を振り絞れ。でないと、本当に死ぬからな」

「ああ、そうだ」

同調したのは、仲間ではなく敵だった。

キリルは何度もしきりに頷いた。

「バヤン島。それは恐ろしい島さ。騒動や犯罪が絶えない島。闇の島って言われているんだ。特にお前たちみたいな野族でない者達には、とてつもなく危険な場所だろうな」

「どんなに危険だろうが、俺にとつては野族になり下がって掃除なんかをさせられるぐらいなら、死んだ方がマシだな」

ローレイはキリルの方を見ずに答えた。

「こんなクズと話している場合じゃなかった。行くぞ！」

ローレイの呼び掛けた3人は、それぞれフラフラしながら立ちあがった。

ウィルはふうつと息をはくと、リイに駆け寄り支えた。

リイの顔の表情を見ると、立っているのが奇跡のように思えた。

「浮き袋があるから溺れはしないだろう。泳ぐのは数十メートルだけだ」

『その数十メートルが今の僕達にとつては…』ウィルはそう言いかけたが、すぐに思い直して口をつぐんだ。ローレイだってきつと分かってる。僕よりもずっと賢く、ずっと有能なんだから。僕はおとなしく従うのが一番だ。

「手のロープだけ切ってくれ！」

窓から飛び降りる準備を始めたウィル達に向かって、キリルが唐突に叫んだ。

「こんな状態で仲間に見つかったら、ひどい仕打ちにあう。なあ、

いろいろ教えてやったろう？足のロープは君達が行ってからほどく。もちろん君たちのことは、仲間には話さないよ」

ローレイは振り返って溜息をついた。

「話したらお前がひどい目に会っただろう？仲間のせいだ」

闇の島 2（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

闇の島 3

少年はいつもの道を走っていた。

何度も通っている道なのにやはり落ち着かない。

心臓がバクバクと鳴るのをおさえることができない。

外が怖い。部屋の中にいたい。

外に出るといつもそう思う。

外に出てきてしまったことをいつだって後悔するんだ。

だが仕方がない。

ここに暮らしている以上、外に出ないと死んでしまう。

それに、たった一人の自分が敬愛する人を困らせることになる。

それだけはしたくない。

行き場のなかった自分を受け入れてくれた人だ。

それがどんなに小さなところだろうと、あるのと無いのでは天と地の差。

その場所が無ければ、俺の行く場所なんて無い。

この世界のどこにも。

港で開かれる市場。

この島では比較的安全な地域だが、それでもやはり危険に満ちている。

商人達は多少の危険は顧みない。

金のために、この島の港までやってくる。

真夜中の市場に。

少年は汗ばむ手をさらにぎゅっと握りしめた。

その手に握られている袋の中には、頼まれた買い物と蟻族の者からもらった小包が入っている。

少年が走っているのは堤防。

ここなら人がいたらすぐに認知できる。

昼なら。

だが今は真夜中。

この島の住人にとっては活動の時間。

身を潜められる壁などがない分、建物で入り組んだ所よりは安全だ。

少年の左手には砂浜、そして海が広がっている。

今まで読んできた本の中では、海はたいてい綺麗なものとして扱われていた。

だが自分には理解できない。

この海は海賊達のフィールド。

海賊達の世界。

この海は毎日哀れな人々も連れてこられる。

ランチに会う人々。

奴隷市に出される人々。

手持ちの物をすべて奪い取られるだけで済んだのなら、それはとても幸運だ。

今日も奴隷市が開催されるらしい。

何でもあの悪名高いウーゴ・グラーク主催だとか。

今回の犠牲者は何人だろうか。

自分にできることは、ほんの少ししかない。

人助けにはお金がかかる。

無一文の俺には何も……。

そこで少年は思考を停止させた。足も同時にとめた。

暗闇に包まれた砂浜で、うごめく人を目の端でとらえたのだ。

息を切らせながらその人影を見つめる。
よく見ると、1人ではない。4人いる。
いる、のだろうか？

2人は膝をついている。この2人は「いる」に違いない。
だがあとの2人は砂浜に倒れていた。

この砂浜で倒れている人はそんなにめずらしくないが、大抵絶命している。

2人は遺体として、あそこに「ある」のかもしれない。

近づかない方がいい。危険だ。
今すぐここから離れる。

いつもだったら、そう思う。即座にこの場所を後にしているはずだ。
だが不思議とこの時だけは、そのように思わなかった。

直感が告げていた。
行け、と。

あの人達は安全だと。
行かなければならないと。

少年は吸い寄せられるように、その人たちのもとへ向かった。

闇の島 3（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

次回は誰かさんの過去にせまります&a m p ; # 9 8 3 5 ;
おたのしみに！！

闇の島 閑話

「兄さん、やろう！早く！」

6、7歳くらいの男の子が、自分よりも頭一個分背の高い少年の服の裾をつかんで言った。

「もうちよつと待ってくれ。今、このまき割を終わらせるから」

兄と呼ばれた少年は笑いながら、また斧をふりあげ薪を割った。

「少し下がっている。危ないからな。ちゃんと勝負してやるから」

男の子は素直に2、3歩下がった。

「今日こそは僕が兄さんに勝つんだ。昨日の夜も一人で僕修行していたんだ」

男の子は兄の背後から大きな声で言った。次に男の子は自分の開いた両手を見つめた。

「手に肉刺ができるくらいやったんだ」

「まだまだ俺にはかなわないよ」

まき割の少年は手を動かしながら、答えた。

「俺の方が数年多く修行しているんだ」

「今日こそ勝つさ。絶対勝つ！」

「もう百回も聞いたよ、その言葉」

兄の笑い声に、男の子はムっとした顔をした。

確かにその通りだ。

何回も、何回も手合わせしても、兄さんにはかなわなかった。

たくさん、たくさん練習しても。

しばらく沈黙が続いた後で、男の子はやや元気を無くした声で言った。

「いつになったら、兄さんを抜くことができるの？僕は一生兄さんには勝てないの？」

「さあな、それは君次第だな。不可能ではないさ。鍛錬を続けるこ

とだ」

少年はそう言いながら、また薪を割った。

「俺達は、ライバルだからな」

場面が変わって、そこは人里離れた野原。だがその日は多くの人が見物に来ていた。

人々は目の前で繰り広げられている、1対1の戦いに息を飲んだ。

何と美しい。

もはや強いとかそういう次元の話ではなかった。

闘っている2人の少年の身のこなしには、少しも無駄がない。

まるで舞っているかのように、2人は戦い続ける。

顔は真剣だ。

一瞬たりとも気を抜かない。

先に気を抜いたほうが負け。

誰もがそれを分かっていた。

名誉をかけた戦い。

この試合で見事優勝を勝ち取った者には、一族にとって最高の栄誉が与えられる。

その称号は、最強の者にだけ与えられる。

この試合が開かれるのは約30年ぶり。

この日のために多くの者が修行を積んできた。

ここで多くの熾烈な戦いが行われ、多くの者が悔し涙を落した。

この試合のために、今までの人生全てを賭けていたと言っても過言ではない。

今は最終試合に上り詰めた2人が、もう目の前にある栄誉を賭けて戦っている。

何ということだろう。

よりによってなぜこの2人なのか。

この先2人はどうなるのか。

観衆はもちろん、試合で敗れ意気消沈していた者達も、我を忘れてその試合を見つめていた。
世界最強の者同士の試合。
誰もがそう思った。

2人はほぼ互角。

試合は今までの試合の中で一番長引いていた。

闘っている2人の真剣な顔にやや疲れが見え始める。

闘っているうちの1人。

赤茶色の髪をした少年は一度一步下がった。

同時に相手も動きを構えたまま、ぴたりと止める。

相手のことは何もかも熟知している。

一番よく知っている相手。

一番多く手合わせをしてきた相手。

それは相手にとっても同じ。

前からうすうす気づいていた。

最後の試合に誰と戦うことになるのか。

誰と向かい合うことになるのか。

幼いころは、いつもその背中だけを見ていた。
努力してもなかなか距離を縮めることができなかった。

だが今は違う。

少年は相手を真っ向から睨みつけた。
今はこうして同じフィールドに立っている。

少年は大きく息をはき、そして足を踏み出し、相手のところに飛び込んだ。

予想通り、受け止められる。
しばらく押し合いが続く。

駄目だ。

少年は思った。

このままでは後ろに跳ね返される。
そうはさせない！

少年はまたもや一步下がったが、今度は間髪を入れずにまた前へ飛び込んだ。

また受け止められる。

観衆のほとんどは思った。

また同じだ、と。

だが違った。

少年は相手が受け止めた時、やや後ろに押されたのを見逃さなかった。

体力はどちらもあまり残っていない。

集中力もあと少ししか続かない。

極限状態が続いている。

何て過酷な試合だろう。

どうする？

残された体力をどう使う？

少年は自問した。

そして答える。

持久戦では負ける確率が高い。

ならば。

残された力を腕にこめ、少年は剣を振り上げた。

今までの修行の日々が走馬灯のように頭の中を駆け巡る。

少年は勝負に出た。

早く試合を終わらせないと、自分の勝率はがくんと下がる。

相手の剣に迷うことなく、何度も何度も打ちつけた。

相手も負けてはいない。

何度も何度も受け止める。

今までそうだったじゃないか。

少年は自分を勇気づけた。

俺はあきらめることを知らずに、何度も立ち向かって行っただ。そしてそれは今も同じだ。

剣と剣のぶつかり合う音が、野原に響いた。

そして。

少年の最後の力をかけた、立て続けの押しの攻撃。

ふいに相手が少し後ろによるめいた。

さっとその表情に不安の色がよぎる。

少年は見逃さない。

迷うことなく、全身全霊で相手に向かう。

覚悟はとうにできていた。

一人の剣が持主の手を離れ、空中を舞う。
くるくるとまわりながら。

その場にいた全員の目がその剣を見ていた。

その剣は皆に終わりが来たことを告げた。

わっと観衆が沸きあがる。

剣をなくした相手は、静かに一人その場を後にした。

「まあ、頑張れよ」

一言だけ少年に残して。

笑おうとして失敗した顔で。

ふと少年が観衆に目をやると、母親の姿が目に入った。

興奮している観衆の中で、母は一人泣いていた。

うずくまって。

体を震わせて。

覚悟はできていたんだ。

少年は唇を噛みしめながら思った。

これが士族の者の、上を目指す者の定めだ。
情けが通じるような甘い世界ではない。
分かっていたはずだ。

兄さんだって。

とつくの昔にできていたんだ。

兄を追い越し、一番になる覚悟は。
「バディ」の称号を手にする覚悟は。

何かを得、何かを失う覚悟は。

闇の島 閑話（後書き）

最近忙しくてなかなか執筆が進みません。

小説サイトのランキングでいつもクリックをしてくださる皆様。
ありがとうございます。

それだけを励みにがんばっています。（T^T）

次回は閑話休題。お楽しみに

闇の島 4

「あ！目を覚ました。大丈夫か？目を覚ます直前、アンタうなされてたぞ」

ローレイは、ぼんやりと自分を覗き込んでいる少年を見つめた。ボロボロの服を着ており、肩につくほど伸びた髪もボサボサ、顔には泥がついている。

「ローレイ、起きたの？」

少年の後ろからウイルの声が聞こえた。

ローレイは、ベッドからがばっと上体を起こした。

そこは小さな部屋だった。壁のあちこちが壊れていて、みすばらしい部屋だった。

「ここはどこだ？」

「まだ寝てたほうがいいんじゃないか？」

近くにいた少年が慌てて、ローレイをまた寝かそうとした。

その手をローレイは受け止め、きっぱりと言った。

「大丈夫だ。それより質問に答えろ」

「そんなコワイ顔するなって」

少年は苦笑いをした。

「ここはピエールじいさんの家だよ。僕たち助けてもらったんだ」
ウイルはローレイをなだめるように言った。

ローレイはウイルのその口調が気に食わなかったらしく、プイっと横を向いた。

「ご機嫌ななめって感じたな」

近くにいた少年が笑った。

「あ、遅れたけど俺はアミン・メンへ。よろしく」

ローレイは無視を決め込んだが、アミンは構わず話し続けた。

「あんた一日じゅう寝ていたぜ。もう夜だ」

ローレイはそっぽを向いたまま顔をしかめた。

さっきまで見ていた夢が、鮮烈に頭の中に残っていた。

あの時の兄の顔。

笑い損ねた顔。

あの後兄は行方知れずになった。

母ナニーは「お腹がすいたら帰ってくるでしょう」なんて言っ
て笑っていたが、そうではないことを誰よりも理解していたに違いない。
夜中に母が一人で泣いているのを何度かローレイは見た。

一番見たくない夢だった。

よっぽど疲れていたのだろうか。

自分の体力を読み間違えたなんて。

ローレイは唇を噛みしめた。

「バディ」失格だな。

運に助けられるなんて、情けない。

「おや、目が覚めたのか」

部屋に一人の老人が入ってきた。

人を安心させるような穏やかな雰囲気を持った人だった。

「この人がピエールじいさん。この家の主だよ」

ウィルが説明した。

「昨日の夜のことを覚えているかの？」

ピエールが優しく聞いた。

ローレイは少し気を和らげ、老人の方を向き頷いた。

「だいたい。こいつにここへ連れてきてもらった」

ローレイはアミンの方を向いた。

海に飛び込んだ後、危惧していた通りリィとローズは完全に荒れ狂
う海の中で意識を失ってしまった。

ウィルと協力してなんとか2人を砂浜まで引き上げたものの、そこでウィルも当然のことながら力尽きる。さらにローレイも自分でも驚いたことに立ってもいられないほどの疲労に襲われた。行く末が真つ暗に思えた時だった。

アミンがどこからともなくやってきたのは。

結果的に良かったとは言え、アミンを警戒するべきだったのに、その気力もローレイには残っていなかった。

「……八つ当たりして悪かった。悪い夢を見てしまつて……」

ローレイは素直に謝った。悪い夢のせいで八つ当たりなんて、さらに情けなかった。

激しい自己嫌悪に陥る。

「助けてくれて本当に感謝している。情けないが、お前に助けてもらわなければ今ごろどうなっているか……」

「いいつてことよ」

アミンは笑いながら言った。常に笑っている少年だった。

「それよりお前腹へっているだろう？俺の作ったお粥があるぜ。薬草が入っているから栄養満点だ。おいしいぜ。俺は料理が得意なんだ」

「それがいい。何か口にした方が、回復も早いじゃろ。アミンの料理は本当にうまいぞ」

アミンに続いて部屋を出ると、そこは粗末な台所だった。

「汚い家だが勘弁してくれんかの？」

ピエールが言った。

「いえ、とんでもない。助けてくれただけでありがたいのに」

「そこに座ってくれ」

アミンがローレイの前にあったテーブルを指した。

「今お粥を出すから」

ローレイはおとなしく言うとおりにした。

アミンのお粥は本当においしかった。

スプーンを口に運べば運ぶほど、体がポカポカと温まり、回復していくのが感じられた。

ピエールはローレイの真向かいの席に座り、ローレイがお粥を平らげるのを目を細めて見守っていた。

「こいつもさつき起きたばかりだな。何があつたのかは、こいつから聞いたよ」

ウィルの方を指しながら、アミンがローレイに言った。

「後の二人はかなりヤバイ状態だったけど、今はなんとか落ち着いたよ。まだ隣の部屋で寝ている」

「本当に助かった。恩にきる」

ローレイはそう言うと同時にスプーンをカチャリと皿に置いた、既にお粥を食べ終わっていた。

「だからいいって」

アミンは両手を振りながら、照れたように言った。

「俺も嬉しいんだ。こんなに安くて人助けができるなんて」

「どういう意味？」

ローレイが機嫌が悪いのを恐れ後ろでそわそわと見守っていたウィルが、口を挟んだ。

「この島では人助けをするのに途方もなく金がかかるんだ」

ウィルはアミンの言っていることが理解できず、首をかしげた。

「ピエールじいさんは、野族に捕えられ奴隷市に駆り出される子供たちを助けるためにこの島にいるんだぜ」

アミンは誇らしげに言った。

「まさか市で金を出して子供を買っているのか？」

ローレイが驚いて聞いた。

「ああ、そうじゃよ」

ピエールが頷いた。

「野族の者達に金を払うなんて、本当に口惜しくて嫌なのじゃが、

それが一番安全に子供を助けられる方法なのじゃ」

「だが、金が相当かかるはずだ。助けられるのはほんの数人だろ？」

「そのとおりじゃな」

ピエールは顔を曇らせた。

「わしの財力は見ての通り、ほとんどない。ただ双子の兄が絵の才能があつてのう、その絵を売りさばいて、稼いだお金の一部をわしに送ってくれるんじやよ。それでも助けられるのは、犠牲者のほんの一部。でも何もしないよりはずっといいとは思わんかね？」

ローレイは黙ったまま、ピエールを見つめていた。何かを考えているようだった。

ピエールは続けた。

「わしに助けられた子供たちは、何か胸に残るかもしれんし、そうでないかもしれん。しかし、胸に何かが残ったものはきつと自分もまた何らかの形で力になろうとする。憶測でしかないが、そうなればより多くの子供たちが助けられる。現にな、わしが助けた子供のうちの一人がこの前わずかだが、わしにお金を送ってきたよ。これで他の子を助けてくれとな」

ピエールの曇っていた顔がぱつと輝いた。

「わしはその心づかいが本当に本当に嬉しかったのじゃ。この気持ち分かるかの？」

「分かります」

数秒間をおいた後、ウィルは力強く答えた。

心の底からピエールのことを、凄いと思った。

自分はカミーユ達を見捨てることしかできなかったが、この老人は違う。

僕とは大違い……。

感動すると同時に、苦い気持ちが残る。

自分の無力さ、未熟さを改めて思い知らされる。

カミーユの泣き声が、オジエ婦人の真つ青な表情が、ケンの何気な

い風を装った笑顔が、今でもはつきりと、はつきりすぎるくらい脳裏に残っている。

いつか僕もピエールみたいに、人の役に立てる日が来るのだろうか。ウィルは暗澹とした気持で考えた。

闇の島 4（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
感想お待ちしています。

闇の島 5

ローレイが寝ていた部屋の隣の部屋が開く音がした。

振り向くと、肩にシヨールをかけたリイがいた。

まだほんのりと頬が赤いが、とても顔色が良くなっていた。

「リイ、もう大丈夫なの？」

「ええ、大丈夫よ。手厚く看病していただいたおかげでね」

リイはウィルに向かってにつこりした。

「そんなに大それたことはしてねえよ」

アミンが笑いながら言った。

「でも、本当によかった。あんた相当やばかったからな。そこに座ってくれ。あんたにもお粥を出してあげるから」

アミンはローレイの隣の席を示した。

リイはふと真顔になった。

「私たちを助けてくれてありがとうございました。この恩は一生忘れません」

これ以上にないっていうほど丁重に、リイはアミンとピエールじいに向かってお礼を言った。ウィルは見ていて、身の引き締まる思いがした。

ピエールはやんわりと微笑んだだけだったが、アミンは少し慌てた。

「あんた、大袈裟だよ。そんなに大したことはしてねえのに……」

「いいえ、この野族の島に死にかけの状態で乗り込んできて、このように無事でいられるのはほとんど奇跡と言っても過言ではありません」

リイは、まっすぐにアミンを見て言った。

「いえ、この島でなくても私は回復できる見込みはなかったはずです。本当にありがとうございます。言葉では言い表せないくらい感謝しています」

アミンは照れたのか目をそわそわと動かし、口ごもりながら言った。

「と…とにかくそこに座ってくれ」

リイが席につくと同時に粥が出された。

リイはスプーンを口まで持っていき一口食べた後、溜息と同時にスプーンを皿においた。

「どうしたの？食欲がないの？」

ウィルは心配して聞いた。

「うつん、そんなんじゃないって……」

リイはそこで少し俯いた。

「私はローレイとウォルトにもお礼を言わなきゃいけないの……」

「え？」

「あんな大事な場面で、意識を失うような状態になるなんて……。足手まといとかいう次元の問題じゃないわよね。見捨てて行かれて当然だったのに」

ウィルは客船で部屋を出た直後のことを思い出した。

オジエ夫人と話している時に、突然リイが急変した。

船酔いといっても、あんなに急に容体が悪くなるなんてことは……。

「まあ、契約は契約だからな。お前達と俺達はあの船で取引をし、俺はその取引を守っただけのことだ」

ローレイはゆっくりと、屈託のない口調で言った。

その時ウィルは後ろから、全く意に介していない風を装ったローレイを見つめていた。

ローレイの優しさが感じられた。リイの罪悪感を和らげようとしている。

初めて客観的に見て、少しだけローレイのことが分かったような気がした。

だが。

ふとウィルは思った。

足手まといになったのが、僕がローズだったら果たして同じことを言ってくれただろうか。

答えはすぐに出なかったが、ウィルは今度ゆっくり一考する価値があると思った。

一方リイの硬い表情は変わらなかった。

「言い訳をするつもりじゃないけど、少し話を聞いてほしいの」
そこでリイは顔を上げ、ピエールの方を見た。

「ピエールさんにもぜひ聞いてほしいんです。さっきその部屋で起きた時、聞こえたんです。あなたが奴隷市に駆り出される子供達を助けていると」

「わしらは声をもう少し小さくして話すべきだったようじゃのう。
病人を起こさないように」

ピエールは、穏やかに笑いながら言った。

「何かこの老いぼれに話したいことがあるなら、謹んでお聞きしましょう」

リイはピエールに向かって弱々しく微笑み、話し始めた。

オーラムステラ島の南西にある平族の集落。

忘れもしない、あれは紅葉の美しい、山の月50日のこと。

リイが8歳の誕生日を迎え、あまり日がたっていない時だった。

「リイ、そろそろお使いにいつてくれる？夕食の材料を買ってきてほしいんだけど」

「はい。そういえばお母さん、おばあちゃんに手紙を書いてたよね？私ついでに市場にいる蟻族の人に出してくるよ！」

リイはにつこりして、大好きなお母さんに向かって言った。

それはいつもと変わらない日。

母セリーヌが台所において、居間には3歳の妹シャウがいる。

「リイは本当に気が利くのね。お父さんに似て頭のいい証拠ね。あ

なたならきつとこの先どんなことだってできるわ」

セリー又は優しい眼差しで娘を見つめながら言った。

居間のすみに置いてある本棚には、輝くような笑顔のお父さんの写真が置いてある。

お父さんは2年前に病気で亡くなってしまった。

生計はお母さんが洋服を作って、立てられている。

決して豊かな暮らしではない。

家は狭い上に、いつ崩れてきてもおかしくないほどだったし、家がある土地の地主、レズリア男爵と言って下流貴族であったが、ここ最近借地料が値上がりしていてなかなか期限内に払えず、いつ追いつ出されてもいい状態だ。

それでもリイは幸せだった。

お金はなくても、大好きなお母さんと妹たちと暮らせていた。

貧しいなんて平族に生まれたからには当たり前のこと、ここ平族の集落にはリイの家族のように貧しい人々ばかりだったから、自分を惨めには思わない。

それに数日前には、立派な誕生日会をお母さんが自分のために開いてくれた。

友達もたくさん呼び、セリー又はお金がないのにもかかわらずおいしいケーキを作ってくれた。御馳走もすばらしかった。

8年間で一番素晴らしい誕生日会だった。

「手紙は出さなくてもいいわ。ちょっと書き忘れたことがあったから。はい、これルクよ」

セリー又は本棚から小さな水晶を出してきた。水晶には首から掛けるための紐がついていた。

「落とさないようにね。それから、これが買い物リスト」

リイは水晶とメモを受け取った後、首をかしげた。

「この水晶、いつものと違うね」

「ええ、そうね。昨日日本棚を掃除していたら、お父さんが昔使っていた水晶が出てきたのよ」

「へえ、そうだったの」

リイは遠い日を思い出しているかのように、ぼんやりとして言った。セリーヌはそんなリイを思慮深げに見つめる。

セリーヌの目はリイと同じ明るい茶色だ。

「それはそうと、いつもよりルク多く入ってるね」

リイは嬉しそうに言った。

「また服がいい値段で売れたの？」

セリーヌはにつこりした。

「そのとおりよ。だから今日はちょっとした御馳走を作るわ。それよりリイ、落とさないようにしっかりと首にさげなさい。そして水晶は服の中に入れるのよ。最近強盗とか多いらしいから」

リイは素直に言うとおりにした。

リイが水晶を服の中に入れるのを見届けると、セリーヌは玄関のドアを開けた。

「それではいつてらっしやい」

「いつてらあっちゃあい！」

シャウもセリーヌの後ろから、大きな声で呼びかけた。

「うん！行ってきます！」

リイは元気に返事をする、駆け出した。

市場に向かって。

いつものように。

あの抜け道を今日も通つていこう！

リイは走りながら、考えた。

それは最近リイが見つけた抜け道だ。

抜け道といっても壊れた塀の穴をくぐり、今は空き家の庭を通るだ

けなのだが、普通の道を通るよりも数分早く市場に着くことができる。

リイはその抜け道を発見したことを得意に思い、何度も母セリーヌに自慢した。

セリーヌはいつも優しく微笑んで、辛抱強くリイの話を聞いてくれる。

お使いの度に通る抜け道。

後にリイは何度も抜け道を通ったことを悔やんだ。

塀をくぐった瞬間、何者かに取り押さえられた。

「おとなしくしろ」

低い男の声だった。

口を腕で強く抑えられ、苦しかった。

煙草と酒のおいがした。

目がかすみ、意識を失う直前に頭にセリーヌと妹たちの顔が浮かんだ。

「おかあ…さ…」

「それからは悪夢を見ているみたいだったわ」

そう語ったリイの目は、どこか遠くを見ていた。

その場の者は、皆沈黙していた。

ウィルは、今リイはここにこうして安全にしていると分かっている、先を聞くのが怖かった。

リイは続ける。

「もう分かると思うけど、私はバヤン島に来るのは2度目なの。ここで奴隷市場に駆り出されたわ。市場はそれはもう恐ろしかった。自分に値段がつけられるのよ。まるで物であるかのように」

「申し訳ないのう」

ピエールが静かに言った。その目には悲痛な色が見られる。

「わしはその時あなたを助けなかった」

「いえ、とんでもありません。ピエールさんを責めるためにこの話をしたんじゃないんです。ええ、もちろん違います」

リイは両手をふりながら、慌てて言った。

「それに別の子供を助けてくれたんでしょ。それで良かったんです。私は運良く、良い伯爵家に……か……買われたのですから」

「でも、そこを脱走してきたんじゃないのか？」

ローレイが鋭い声で聞いた。

「嫌だったから抜け出して来たんだらう？」

「いえ、伯爵様にはお世話になりました。普通の召使みたいに扱ってもらって。確かに抜け出てきたことは否定しませんが、それはいろいろ別にあつて……」

「いろいろ」が何なのかウィルは聞きたかったが、リイの表情を見て聞かない方が良いと判断し、別の質問をした。

「ローズとはどこで？」

「えと……同じ伯爵家に仕えていたんです」

「ということは、ローズも以前この島に来たことがあるということ？」

「それは分からないわ」

リイは少し思案するように言った。

「ローズはあまり過去を話したがらないの。どうか聞かないであげてね」

「分かった」

ウィルは頷いた。

リイとローズは傍目からは何も感じなかったが、実は話すのもつらい暗い過去があるのだらう。

それに比べると、僕は随分幸せに育ったな。

ウィルは、一人小さく苦笑した。

「つらかったらうね」

ピエールがリイに向って静かに言った。

「話してくれてありがとう」

リイは一瞬泣きそうな顔をしたが、すぐに真剣な顔つきに戻った。

「奴隷市に駆り出されたことあるからこそ、ピエールさん、あなたのお金や危険を顧みない行動が本当に嬉しいです。本当に」

「ありがとう」

ピエールは微笑んでいった。

「さあ、アミンのお粥を食べなさい。そしてもうひと眠りすれば、体調もぐつとよくなるはずだから……」

ウィルとローレイは静かにお粥を食べるリイを見守った。

実はこの時台所の4人以外にリイの話を聞いている者がいた。

その人物はドアに背中をつけて話を聞いていたが、話が終わったことが分かると、足音を忍ばせてベッドに戻った。

リイはお粥を食べ終わると、ベッドの部屋に戻った。

ベッドは2つ置いてあり、1つにはローズがすやすやと寝ていた。

この家は引き取った子供を一時的に住まわせるため、ベッドが多い。

2階にも部屋があり、ベッドがあるとアミンが言っていた。

ここはもともと宿屋だったそうだ。

リイは静かにベッドに横になった。

天井をぼんやりと見つめていたが、ふいに目から涙がこぼれてきた。奴隷市に駆り出された思い出が、とてつもなく恐ろしいせいではない。

値段をつけられたことに、悔しさを感じたからではない。

涙の理由は伯爵家にひきとられてから1年がたった頃、寒い風の月のことにあった。

リイは町の路地を歩いていった。

市場での買い物を言いつけられたからだ。

市場にはたくさんの人だからできていた。

夕食の材料の買い出しのためだ。

雪が降る日だった。

白い息を吐きながら、リイは頼まれた野菜が売っている店を探していた。

買物はあの事件以来、好きではなかった。

いつも早く終わらせることだけを考えて。

皮肉なことに一度奴隷になると、身の安全は保障される。

それでも、リイは買い物が、特に一人での買い物が嫌いだった。

店から店へと目を走らせていると、ふいに一人の男と目が合った。

体が凍りついた。

あの男だった。

忘れもしない。

1年前のあの日。

人生が狂った日。

逃げたい。

だが体が動かなかった。

目が男に釘付けになる。

男はリイをじっと見た。

何かを思い出すように数秒顔をしかめていたが、合点したような顔になると、にやにやしながら、リイに近付いてきた。

「よお、久しぶりだな」

あの時と同じように煙草と酒の匂いがした。

全身に震えが走った。

逃げたい。
離れたい。

「お前、今は安心して町を歩けるんじゃないか？その首にあるもののせいで」

リイは何も言わず、ただ震えていた。

男は構わず話し続けた。

「俺を恨むなよ。あれは正式な取引だったんだ」

リイは言葉の意味が分からず、一度恐怖心を停止させ、男の顔をまじまじと見つめた。

「今頃、悪くない生活をおくってると思うぜ。お前についた値段の半分は送ったんだから。俺も良心的だよな」

「な…何の事を言ってる…」

「お前の母親のことだよ。セ…セーラ？いや、セザンヌだったかな？まあなんでもいい。お前の母親は俺と取引したんだ」

世界が止まった。

「お前は売られたんだよ。母親にな」

今まで自分をかろうじて支えていたものが、音をたてて崩れていくのはつきりと感じた。

「かわいそうにな」

リイの青ざめた表情を楽しむように眺めながら、男は言った。

「でも、あの女も母親らしいところはあったんじゃないか？お前が首から下げているルクは取り上げるなって、俺に頼んできたもんな」

嫌だ。聞きたくない！

あの後リイは必死に男の言ったことが嘘だと、信じるように努力しようとした。

何度も何度も嘘だと自分に言い聞かせた。

あの男はそうやって人をどん底に陥れる最低なやつだと。

だけどそう信じ込もうとすればするほど、多くの疑念が生じた。

どうして男はあの抜け道で待ち伏せしていた？

人通りがほとんど無いところで、なぜ私があると知っていた？

あの男はなぜ服の内の水晶のことを知っていた？

一度も見えていないのに、なぜルクを持っていたと？

どうしてあの日、お母さんは私に手紙を頼まなかったの？

私が市場に行けないことを知っていたから？

どうしてあの日、水晶にいつもより多くのルクが入っていたの？

わざわざ服の内に隠させて、もしかして餞別のつもりだったの？

ねえ、どうして？

長い年月がたった今でも、リイの心からは血が流れていた。
長い年月がたった今でも、涙が止まらなかった。

闇の島 5（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

お陰様でPVアクセスが10000突破しました！

こんな駄文を読んでくださって、感激です。

今後ともよろしく願います。

闇の島 6

それからしばらくの間、ウィル達はピエールの家でお世話になることになった。

アミンの作るおいしいご飯も手伝って、4人は順調に体調を回復していった。

その日、ウィルは目覚めの良い朝を向かえた。体がすごく軽く感じた。

今までよっぽどストレスと疲労が溜まっていたのだろう。

朝御飯の手伝いをしようと思い、ベッドが立ち上がるうとした時、隣のベッドに寝ていたはずのローレイに呼び止められた。

「おい！」

「ローレイ…起きてたの？」

「話がある。ここを出ることについてだ」

ドスンと重い物がウィルの胃に落ちてきた。

「もう…出発するの？」

「いやまだ方法を考えていないから、今すぐというわけにはいかない」

ウィルはほっと胸を撫で下ろした。

良かった。

「だが」

ローレイが釘を刺すように言った。

「こんなところでモタモタしているわけにはいかないだろう？方法をを見つけ次第、すぐに出る。まあ、商人達の船に乗るのが妥当だと思うが」

そこでローレイは言葉を切り、考え込んだ。

ウィルはしばらくローレイを見つめていたが、今まで一番気になっていた質問をした。

「リイとローズはどうするの？」

「取引は終わった」

ローレイは簡潔に答えた。

予想通りの返答だった。

ウィルはがっかりした。

さらに気分が沈む。

いつからかローズとリイに仲間意識が芽生えていた。

きっと絶体絶命の危機を、一緒に乗り越えてきたからだ。

ここでお別れか。

「そうだね……」

ウィルは小さくつぶやいた。

「おう、おはよう、ウォルト」

台所に行くと、アミンがさわやかな笑顔で挨拶してきた。

手にはフライパンが握られており、中ではベーコンがじゅっじゅつと音をたてて焼けていた。

「おはよう」

ウィルもつられて笑顔で返した。

アミンの笑顔は好きだ。

いつも温かい気持ちになる。

「僕も手伝うよ。何をすればいい？」

「ありがとう。野菜を切ってくれるか？」

「分かった」

ウィルはアミンの隣に行き、野菜を切り始めた。

薬作りで包丁はよく使っていたので、慣れていた。

「ピエールさんは？」

「部屋でいろいろしているよ。ああ見えても、結構やらなければならぬことが多いんだ」

「凄い人だよな。本当に」

「そうだよな」

アミンはベーコンを皿に盛りながら、相槌を打った。

「あの…アミンもピエールさんに助けられたの？その……」
ウィルは口ごもった。

アミンはすぐにウィルの聞こうとしていることを悟った。

「いや、俺は違うよ。ただ拾ってもらったんだ。路上を一人さまよっているところを」

「この島で？」

「ああ」

その時テーブルを拭いていた、アミンの顔が少し曇った。

ウィルはそれを見逃さなかった。

「ごめん、余計な事を聞いた」

「いや、いいんだ」

アミンはきっぱりと言った。

だがその後、しばらく気まずい沈黙が流れた。

ウィルの包丁の音だけがむなしく響いた。

ウィルは誰かが台所に入ってくるのを期待したが、誰も来なかった。

ローレイはまだ部屋で何やら考え事をしている。

「あのな、俺…」

唐突にアミンが口を開いた。

「俺…きつと軽蔑すると思うけど…俺…野族なんだ」

ウィルは息を呑んだ。

「汚らわしいだろう？」

アミンは自嘲するように言った。

「父親が野族なんだ。母親は知らねえ。結婚なんてしてなかったみたいだし。父親は大方の野族のように、ろくでもない人だった。俺

は野族の腕輪をつけられた後、すぐに捨てられたよ」

ウィルは言葉が出なかった。

「野族の腕輪を見たことがあるか？」

アミンの顔からはいつものさわやかな笑顔が消えていた。

ウィルは言葉なく、首を横に振った。

「暗い緑色なんだぜ。腕輪から腐ってる感じがする」

アミンはそう言うと、左腕の袖をめくり始めた。

肩に近いところで、アミンの言ったように暗緑色の腕輪が現れた。

「これは純野族の腕輪だ」

「どういう意味？」

ウィルは腕輪を恐る恐る見ながら、小さい声で聞いた。

「生まれた時から野族という者は、実は少数派なんだ。たいていは他の族の落ちこぼれが自分の腕輪を暗い緑色に染めて野族になり下がるんだ」

「ヒビが入っているね」

「ああ。外したかったからな。こんなの。憎んださ。俺はこの腕輪のせいで、この島に縛られている。他の場所に行ったらって、周りの人から敬遠されるだけだろう？」

ウィルは黙ってアミンを見つめた。

「でも、この腕輪びくともしない。まあ、外すことができたとしても俺は血も腐ってるけどな……」

「そんな……」

ウィルは絶句した。

うまく言葉にはできなかったが、アミンは間違っていると思った。何か言ってあげたいと思ったが、無言でいるしかできなかった。

「そんなの関係ないだろう」

ウィルが振り返ると、いつの間にかローレイが台所に入ってきていた。

ローレイは腕組みをしたまま、壁に寄り掛かっていた。

「野族がどうかである前に、お前はお前だ。親なんて、ましてや腕輪なんて関係ないだろう。大事なのはお前自身だ。お前がどうあるかだ」

ウィルが言いたかったことを、ローレイが代弁してくれたかのようにだった。

アミンは不思議そうにローレイを見つめた。

「お前はピエールじいさんと同じことを言っただな。でも、この腕輪は外れないんだ……」

「腕輪なら外せるよ。ちゃんと職人に頼めば、外してもらえる。あとは好きな族に入れよ。どこの族でも、長老もしくは長の許可が下りれば入れるはずだ」

「でも野族の者を受け入れてくれる族なんて」

「確かに難しいかもしれないが、」

ローレイは遮るように言った。

「不可能ではない。後はやはりお前次第だ」

そこでアミンは口を閉じた。

顔が明るい表情になっていた。

「ありがとう」

「よかったのう、アミン。わしの言った意味が分かったじゃろう？」

今度はピエール、続いてローズとリイが入ってきた。

どうやらドアの向こうで盗み聞きをしていたらしい。

「たまにはいいことを言うじゃない」

ローズが余裕の笑みをたたえながら言った。

ローレイは顔をしかめると、ふいと横を向いた。

「ありがとう。話して良かったよ。すっきりした」

アミンはいつもの笑顔で言った。

「リイのお陰だな」

「え？」

リイが驚いたように聞いた。

「リイの昨日の話を聞いて、感動したんだ。あんたは自分の過酷な運命にも真っ向から立ち向かってきただろう。話を聞いて、俺は心を動かされたんだ、リイは強いよ」

リイはまじまじとアミンのくしゃりとした笑顔を見つめた。

崩れていくものもあれば、積もっていくものもあるのかもしれない。まだはつきりとは分からないけど。

その狭い台所に暖かな空気が流れた。

ついでにおいしそうなベーコンの匂いも漂っていた。

「さて朝食にしようかの」

ピエールは楽しそうに言った。

その言葉を合図に、一同はテーブルにつき始めた。

だがウィルはしばらくぼんやりと突っ立っていた。

あのアミンの腕輪に入っていた亀裂。

前にも見たことがある。

そう、エシミス島のあのなつかしい小屋で。

トムは腕輪にも同じような亀裂が入っていた。

トムはどうして……どうして土族を辞めたいと思ったのだろうか？
いつ、そんなことを？

ローズの自分と呼ぶ声に、ウィルははっと我に返った。
そして無言で食卓についた。

闇の島 6（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

ストーリーがなかなか遅々としてすすみません。（泣

展開を早くするよう、がんばります！（><）

認められし者 1

ローレイは突然ピエールに切り出した。

「あの、ここを出ることについてですが……」

それは、太陽が傾き始めたころ。

アミンの腕輪の話を聞いてから、数日経った日のことだった。

皆、台所に集まり、アミンが焼いたアップルパイと共にお茶をしている時だった。

ウィルは沈んだ表情でローエイを見た。そろそろ切り出すのではないかと危惧していたところだった。

ピエールは途端に悲しそうな表情をした。

「もう出発せねばなんのじゃな？」

「ええ、先を急いでいるので。お世話になりっぱなしで、誠に申し訳ないのですが、適当な船を見つけ次第出発するつもりです。こいつと二人で」

ローレイはウィルをちらりと見ながら言った。

ウィルには考えすぎかもしれないが、今のセリフがピエールよりもリイとローズに向けられたように思えてならなかった。特に最後の部分。

ローズとリイの方見ると、ローズは何か言いたそうな顔をしていたが、リイがそれを止めるようにローズの手に優しく触れた。その目がローズに語っていた。駄目だと。

ローズはリイの目を見て不服そうな顔をしたが、一瞬の間の後観念したように目を伏せた。

「どうやってこの島をでるつもりなのじゃ？」

「市場の商人の者たちの船に乗り込もうと思っています。ルクをある程度出せば乗せてくれるでしょう。ここ数日夜の市場にアミンに連れて行ってもらい、観察をしていましたが、ここまで危険を冒してやってくる者です。金の亡者である彼らは、きっと引き受けてく

れると思います」

「そうじゃな、確かに彼らは引き受けるじゃろな。現に商人の船に乗って出ていくものも少なくはないからな」

そこでピエールはお茶を一口飲んだ。

「じゃがな、わしから提案があるんじゃが……」

「どんな提案でしょう？」

「確かオーラムステツラ島に向かうと言っていたな？ここからおそらく船なら4日はかかるが、飛んで行ったら2日でいける。どうじゃ、飛ぶのは。嫌かね？」

「飛ぶ……？」

ウィルは目を丸くした。

アミン以外の他の者も驚いていた。ローレイも一瞬驚いて固まっていたが、はっとした表情になると口を開いた。

「あの…飛ぶといいますと……。どうやって？」

「正確には乗っていくというのかの。大鷲に」

ピエールは楽しそうに言った。皆が驚いているのが、面白いらしい。

「大鷲？ですが、大鷲は蟻族のもの共しか扱えないと聞いております」

「蟻族に頼めばいいじゃろ」

「蟻族は飛ぶことを誇りに思っている。『飛ぶ』という他の者には決して得られない自由を第一に大切にしている。確かに蟻族の者は金に目がありませんが、そんな簡単に承諾するとは思えな」

「するんだよ。承諾。ピエールじいさんが頼んだならな」

アミンがじれったそうに言った。

「市場で助けた子供たちも、その大鷲で他の島に送っている」

「速くて安全じゃからな」

ピエールが付け加えた。

「ですが、どうして……？」

ローレイはまだ納得がいかないような顔をしていた。

「頼みを聞いてくれるのは、一人の蟻族の者だけじゃ。以前そやつ

が嵐のせいで倒れているのを助けたことがあったの。その恩返しに子供達を運んでくれるんじゃない。ちょうど3日後に会う約束をしている。どうじゃ？安全性を考えると一番いいと思うのじゃがな」

ローレイはしばらくピエールじいの爛々とした目を見つめていた。その後、なぜかふと笑みをたたえ、口を開いた。

「本当にご迷惑かけてばかりで申し訳ないのですが……」

「了解ということじゃな？」

「……よろしく願います」

ウィルは信じられない思いで2人を見ていた。
飛ぶ。

まさかそんな日が来るとは思わなかった。

正直もう船はうんざりだったので、ウィルはピエールの提案がすごく嬉しかった。

「さて、わしは今晚出かけねばならなのでな。準備をしてくるとしよう」

ピエールが椅子から立ち上がりながら、言った

「あれ、今晚だったわけ？」

アミンが頭を掻きながら言った。

「そうじゃよ。アミン、お前さんにも来てもらうから」

「分かってるよ、じいさん」

アミンはピエールを遮って、言った

「ちゃんと準備しておく」

ピエールは柔らかにほほえみ、台所を後にした。

ピエールが出て行った後、ウィルはアミンに聞いた。

「どこかに行くの？」

「ああ、今晚奴隷市が開かれるらしい」

氷のように重くて冷たい空気が、場に流れこんだ。

「でもな、悔しいけど、救えて一人だな……」

ウィルは目の端で、リイがカップをぎゅうつと握りしめるのを見た。

「どうやってその一人を選んでの？」

ローズの声は、なぜかとても小さかった。

「一番年少の子を助けてる。選ぶということは本当につらいが、ピエールも言ったようにだからと言って何もしないのはおかしいと思うんだ」

「僕も行く」

それは唐突だった。

ウィルはカップの中のお茶を見つめながら、ぽつりと言った。

「え？」

アミンが聞き返す。

ウィルは顔を上げると、はっきりと言った。

「僕も行きたい。連れて行って！」

「駄目だ」

答えたのではアミンではなく、案の定ローレイだった。

「自分の立場を踏まえて行ってるのか？」

ローレイの一睨みに、ウィルは一瞬たじろいだ。すぐに自分を奮い立たせた。

「でも行きたい！この目でしっかりと見ておきたい！」

ウィルの声はだんだん大きくなっていった。

「そりゃ危険だろうし、見てもつらくなるだけだと思うけど、見ておきたいんだ。そうするべきな気がする。アミン、連れて行って！」

「俺はいいけど……」

アミンはちらりとローレイを見た。

「前から思ってたけど……」

ローズが口を挟んだ。

「ローレイってやけにウォルトには過保護じゃない？」

ローレイは表情を硬くして、完全にローズを無視した。『好きでやってるんじゃない！』とその表情が訴えていると、ウィルは思った。

「ローレイ……」

ウィルは勇気を出して、ローレイをまっすぐに見た。仲間で、同じ年代のローレイをどうしてこうも恐れないといけないのか、という考えはこの際頭の隅に押しやった。

「行きたい。ローレイも一緒に行けば、安心でしょ？ローレイも一緒に来れば大丈夫でしょ？」

「安心じゃない」

ウィルのローレイを持ち上げる作戦は瞬時にガタガタと崩れた。

「客船脱出の時によく分かった。お前は、ヘマをすることにかけては、人を抜きんでている」

「な……」

これにはさすがにウィルも顔色変えたが、爆発ギリギリのところでブレーキをかけた。

自分自身に冷静になれと、言い聞かせる。

これはきつと大事なことだ。

そう直感が告げている。

それに……。

自分の感情をおさえ、一言一言噛み締めるように言った。

「見ておきたいんだ。見ておかないといけない気がする。そこに何かある気がする。そこに……僕がこれから……これから進むのに……」

ローレイもまっすぐにウィルを見た。

しばらくの間二人はお互いの目を見つめ合っていた。

先に目をそらしたのは、ローレイの方だった。

「……ヘマをするなよ」

「え？」

ローレイはそのまま無言で立ち去った。

「あら、珍しくあなたが勝ったわね」

ローズがのんびりと言った。

『珍しく』ではなく初勝利だ。

ウィルは、ローレイが姿を消したドアを振り返った。

気のせいかもしれないが、ローレイの先程の挑発は、わざとしい

るように思えた。まるで、ウィルがどう出るのかを見ているかのよう
うに。そしてウィルは感情を抑え、ローレイの合格基準を満たした。
だからローレイはウィルの申し出を聞き入れた。なんとなくそんな
気がした。

実際ウィルの感じたことはまんざらでもなかった。

部屋をローレイが立ち去る時、満足げに緩んだ口元をリイは目撃し
ていた。

認められし者 1（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

この章から木箱やペガサス、王家の秘密について迫ります。

認められし者 2

「お酒のにおいがすごい……」

ウィルは歩きながら、顔をしかめた。

ウィル、ローレイ、アミン、ピエールは真夜中に開かれる奴隷市へ向かっていた。ローズとリイは腕輪の色のため、この島をふらつくと非常に危険なので家に残ることになった。もっとも二人は「行きたい」とは、決して言わなかった。

あたりには酒場や胡散臭い店が所狭しと立ち並んでいる。

人通りも多く、4人ははぐれることのないよう細心の注意を払っていた。

「あいつらは毎晩毎晩大量の酒を飲んでいるからな……」

ウィルの前を歩いていて、アミンが答えた。

「そして酔いつぶれて、昼すぎまで寝ているんだ」

普通の町だったら、ウィルはキョロキョロとあたりを見回しながら進むところだが、今度ばかりは肩を縮ませて、前だけを見て歩いた。それくらい、危険な町だった。町を歩いている人のほとんどが、健全ではなかった。あの客船に乗っていた大男二人のようなやつらがここにはうようよいいるのだと思うとウィルは吐き気とめまいを感じた。すぐに「行く」と言い出したことを後悔し、弱音をほとんど吐きそうになったが、なんとかこらえた。

見ておかねばならない。

どうしてそう思うのか、ウィル本人にも分からなかった。

ほとんど直観だ。全く根拠がない。

だがその直感が、ウィルの忍耐をかるうじて持ち堪えさせていた。

「その坊や」

もくもくと前を進むウィルに話しかけてきたのは、露出度の高い服をみにまとった女だった。酒の臭いがきつかった。

「どこに行くの？ ねえ坊や、私と一緒に少しお話をしましょ。お姉さんが、かわいがってあげる。あなたのそのかわいい顔、私は好きよ」

けばけばしい顔、だらりと垂れた金髪の髪、酒の臭い、話し方。どれを取ってもウィルに激しい嫌悪感を抱かせるものだった。こんな女もいるとは、ウィルはついぞ知らなかった。ウィルは無視を決め込んだが、女はしつこくついてきた。ウィルの歩調に合わせ、横を歩いてくる。店の薄暗い明りに、左腕にある暗緑の腕輪がぼんやりと照らされていた。

「ちよつと、冷たくしないで。お姉さん、傷ついちゃう」
女は最後まで言い切ることができなかった。突然声もなくバタリと倒れた。

ウィルは驚いて、倒れた女を見つめた。通行人でその女を気にする者は、ウィル以外誰もいない。

「早く行け」

後ろを歩いていたローレイが、どすの利いた声で言った。

「でも、なんで突ぜ」

ウィルはそこで口をつぐんだ。ローレイがちょうど一本の剣を腰に下げているところだった。どうやら鞘におさめたまま、後ろから剣で殴ったらしい。

ウィルは無言で前に向きなおり、再び歩き始めた。

虫唾が走るくらい嫌な女だったが、それでも女だ。少しだけ気の毒に思えた。

「着いたぞ」

アミンが振り返って、言った。

誰とも目が合わないように、下を向いて歩いていたウィルは顔を上げた。

そこは町の広場のようなところだった。

「ここ？」

ウィルは訝しげな顔をしながら、あたりを見回した。

人ごみが今まで通ってきた中で一番ひどかった。ここにいる人々は動かずに止まっているので、通りから人が流れ込むにつれ、混雑はますますひどくなっているようだった。

市場という割には、そこにはほとんど何もなかった。

大勢の人以外に目に入るものと言えば、古い木のステージと白い大きなテントだけだ。

キョロキョロしているウィルの肩を掴みながら、アミンは言った。

「俺は白いテントの前に張ってある、リストを見てくる。今日売り出される人々の性別や年齢が乗っているんだ。ローレイとウォルトはピエールじいさんからはぐれないようにしてくれよ」

「了解」

ウィルはなおも辺りを見回しながら、上の空で答えた。アミンは少し困った顔をしたが、ウィルの背後にいたローレイの「大丈夫だ」という目配せを受けた後、にかつと笑いテントの方へ走って行った。

「そんなに珍しいかね」

ピエールがゆったりとした、口調で聞いた。

混雑の中でも、不思議とピエールの言葉は静かに聞こえた。

「い……いえ……」

ウィルは見回すのをやめ、少し俯いた。

場にそぐわない浮薄な態度を非難されたようで、なんとなく恥ずかしかった。

「予算は１０００ルク……」

「え？」

ウィルは顔を上げた。

「１０００ルクを上回ったら、助けることができん」

「だいたい、いつもはどれくらいなんですか？」

「毎回違うが、平均して７００ルクというところかの……。年少の

子はやや安い値がつくもんじゃ」

「安い……」

ピエールは、口を閉ざしたウィルが何を考えているか察したように言った。

「人は、お金で買えるものではないのじゃがの。甚だ承知いたしかねることじゃが、これ以外適当な救出法がなくてな」

「じいさん！」

人ごみに揉まれながらも、テントの方からアミンが戻ってきた。

「今日は6歳の男の子が最年少みたいだぜ」

「そうか。ありがとう、アミン」

ウィルはふと疑問に思ったことを口にした。

「周りの人達って、多くが野族の人っぽいけど、奴隷が買えるほどお金を持っているの？」

「いや」

アミンが答えた。

「こいつらは、貴族や他の族の金持ちのやつらに雇われてここに来ている。やつらは代理で奴隷を買った後、依頼者のもとに送り届けるんだ」

アミンが言い終わると同時に、ステージの方から大音量の声が聞こえてきた。

「レディース&ジェントルマン!!」

見ると、ステージに場にそぐわない白い背広を着込んだ男が立っていた。わざわざセットしたのか、髭が優雅にカールしている。

ステージの男の呼びかけに、周りの人々が「ウォー」と歓声を上げたが、その歓声を上げたどの人も恐ろしいほど「レディース&ジェントルマン」からかけ離れていた。

「毎度ありがとうございます！今日もたくさん出品される予定です。盛り上がって行きましょう！」

男の呼びかけに応え、広場の人々がまたもや一斉に大声を上げる。身震いしたくなるような人々の熱気が感じられた。

「それでは一人目！」

ステージの男がステージの脇へ移動し、テントの方を手で示した。テントの中から一人の図体のでかい男がやせ細った少年の腕を乱暴に引っ張りながら出てきた。少年は抵抗することなく、男に引っ張られるままステージに上った。

目がうつろだった。

近くで少年を品定めする声が聞こえてきた。

「見るからにひ弱だな」

「そうだな。きつとすぐに使い物にならなくなる」

ウィルは目の前の光景に呆然とした。

アミンが耳元で囁いた。

「あの少年がつけている、金属の太い首輪が見えるか？銀色のやつ」
ウィルは唾をぐくりと飲みながら頷いた。

「あれは奴隷の証なんだ。あの首輪を外すには鍵が必要で、その鍵は奴隷を買った者、つまり主人に渡される」
ステージの男が叫んだ。

「14歳、男。それでは行きましょう！」

「200ルク！」

ウィル達の近くにいた男の声で、競りが始った。

「300！」

「450！」

非常に速いテンポで値は上がっていった。

ウィルは次第に競りの声が聞こえなくなるのを感じた。
信じられなかった。

こんなに恐ろしいことが、ここでは当たり前のように行われている。
異を唱える者はどこにもいない。

少年の生気のない顔をウィルは直視することができなかった。

「1350！」

甲高い叫び声と共に、少年の競りが終わった。

少年は男にまたもや引っ張られながら、ステージを降りテントに戻

った。

2人目は10歳の少女。

3人目は18歳の少女。

そして、4人目。

5人目。

競りは滞ることなく、順調に進んでいった。

銀色の首輪をはめた者達の顔は、どれも深い絶望に満ちていた。10歳前後などの幼い子供達の中には、競りの間泣き叫ぶ子もいた。8歳の男の子は泣き叫びながら、自分を抑えている男の腕の中で激しくもがいていたが、一発激しく男に殴られると意識を失ったのかピタリと静かになった。

ウィルは目が熱くなるのを感じた。

やめろ。

やめてくれ。

叫びだしたかった。

おかしい。

同じ人なのに。

間違っている。

やめてくれ！

ウィルの心の叫びも虚しく、次々と人に値が付けられていった。

そして、14人目。

ウィルは棍棒で殴られたような気がした。背後でローレイが身じろぎをするのを感じた。

テントから現れた人。

それはオジエ夫人だった。

すっかり変わり果てた形なりをしている。

体はやつれ、髪は乱れていた。絶望に打ちひしがれた表情をしている。

「34歳、女性！芸族出身！」

ステージ男の声を合図に、また競りが始まる。

オジエ夫人はぼんやりと、どこか空間を見つめていた。

ウィルの頭の中で子供の泣き声が反芻する。

カミーユ。

カミーユはどうしたのだろうか？

まだ幼かったから、奴隷にはできないはずだ。

「アミン」

ウィルはかすれ声で聞いた。

「働けないくらい幼い子は…野族に捕えられたとして…親子で捕えられたとして、どうなるのかな？」

「まず親子が引き離されるのは確実だな」

アミンはあっさりと答えた。

「んで、子供は、生きていられたら、それはすごくラッキーということだ」

とどめとも言える衝撃に、ウィルは頭がくらくらした。

カミーユ。

あの時、僕はカミーユを見捨てた。

そして自分だけ助かった。

なぜカミーユは捕えられ、自分は捕まらなかったのか。

カミーユを見捨ててまで逃げる価値が、自分にはあるのだろうか？

ウィルはもはや何も聞こえなかった。何も見えなかった。

小さな男の子がステージに出てきたのも、ピエールが「750ルク！」と叫んだのも気づかなかった。

ただその時、息をするのがとても苦しかった。

胸が張り裂けそうだった。

大声で叫びだしたかった。

なのに、自分にはどうすることもできない。

ウィルは爪が食い込むほど、両手の拳を握り締めた。

絶望的な無力感が次第に怒りへと変わり始める。

ウィルは心の底で沸々と湧き上がるものを感じた。

自分への怒り。世界への怒り。

怒りで震える全身を、ウィルは抑えることができなかった。

認められし者 2 (後書き)

読んでくださってありがとうございました！

認められし者 3

はつと気付くと、ウィルはピエールの家の前に戻っていた。

いろいろと頭の中が混乱していたため、市場の終わりの帰り道など何も目に入らなかった。

「あれ、アミンは？」

ウィルはあたりを見回しながら言った。

「何、寝ぼけているんだ？」

ローレイはピエールに続けて家に入りながら、呆れたように言った。

「さっきの6歳の子供を引き取る手続きをするため、まだ残るって言うってただろう？」

「そうだった？」

「お前が顔色が悪かったから、先に帰るよう促してくれたんだ」

「……」

「おかえりなさい」

台所でリイとローズが出迎えた。

「ウォルト、顔色が悪いけど大丈夫？」

リイが心配そうに聞いた。

「え……あ……うん」

ローズは無言でウィルをじっと見つめていた。

「私お茶を入れますね、ピエールさん」

リイはにつこりとして言うと、お茶の支度にかかった。

「これは、嬉しいの。ああ、そうじゃ、ウォルトとローレイ」

「何ですか？」

ローレイが答えた。

「非常に言いにくいことなんだが、蟻族の者にお金を払わないといけないんじゃない？」

「あ、僕持つてきます」

ウィルはそう言うと、急いでリュックを取りに台所を出た。

自分たちが泊まらせてもらっている部屋に入ると、ウィルは溜息をついた。

湧き上がった激しい憤りに、ウィルはどう対処すればいいのかわからなかった。

無力感、怒り、困惑。

さまざまな感情が混じり合い、ウィルを混乱させていた。

自分はどうすればいいのか？

それが差しあたったの大きな問題だった。

「ウォルト、自分を責めちゃ駄目よ」

ずっと考えに耽っていたウィルは、我に返ってリイを見た。

アミンを除く5人は、台所でゆったりとお茶をしていた。

「え？」

「あなた、自分を責めてるんじゃないかと思って」

「……」

「さつきローレイから聞いたんだけど、船で会った親子の母親が市場に出されていたらしいわね。でも、それは決してあなたの責任じゃないわ」

リイは的確にウィルの考えていることを当てていた。

「ウォルトが野族に捕まったところで、状況は少しも変わってなかったわよ」

ウィルはやや俯いた。全くもってその通りだと思った。

「そうよ」

ローズが横から身を乗り出しながら言った。

「気にしすぎるのは、よくないわ。つらくても、忘れることも大事よ」

「……」

分かつてる。

ウィルは思った。

分かっているんだ。

あの時自分にはどうしようもなかったって。

選択肢はなかった、助けることはできなかったって。

でも、悔しい。

悔しくて、悔しくて、それなのに何もできない自分が腹立たしい。

何かできるようになりたい。

ピエールさんのように、人を助けられるようになりたい。

いつか、いや早くそうになりたい！

突然ポツリとローズが言った。

「光ってる……」

「え？」

ウィルはローズの視線の先を辿った。

そこには、さつき部屋から持ってきた、ウィルのリュックがあった。ローズの言うとおり、光っていた。いや、正確にはリュックの口から光が漏れていた。しかもただの光ではない。それは紫、紅紫色こうしの強い光だった。

ウィルはおそろおそろリュックに近づいた。その場にいた者達の、強い視線を感じた。

ウィルはゆっくりと光溢れる、リュックの口をのぞきこんだ。予想通りだった。あのトムからもらった木箱が、光っている。ウィルは震える手で木箱を掴み、取り出した。

薄暗い部屋の中で、その光は美しく輝いた。ウィルは我を忘れて、その木箱の光を見つめた。その他の者たちもみな見とれているようだった。一人を除いては。

「ウォルト、どうして王家の木箱を？なぜ……？もしか、おぬしは……」

ピエールはそこまで言うと、口をつぐんだ。その声に、いつもの穏やかさはなかった。

ウィルは、ゆっくりとピエールを振り返った。

ピエールは食い入るように、ウィルの顔を見つめた。

「わしとしたことが、どうして今まで気付かなかったのか。似てい
るではないか。そっくりだ。……エレン殿に」

ピエールは大きく息を吸って言った。

「先帝：ラゼル王の息子。……ルーテン国賢族カシュー家の末裔ウ
イル・カシュー」

ウィル・カシュー。

自分の名前なのに変な感じがした。

久しくこの名前を、呼ばれていなかった。

「なんですって!？」

ローズは驚愕した表情で、叫んだ。その横にいたリイは、顔色を変
えていた。

「あなた……ウォルト・キャラハンとやらは偽名」

「そんなことは、今はどうでもいい。ウィル、その木箱を開けるの
じゃ」

ウィルには、何がなんだか分からなかった。ピエールが、木箱が、
自分の正体が。

ウィルは救いを求めて、ローレイを見た。だが失望に終わる。ロー
レイも全くこの状況を理解できないでいるらしかった。

「とにかく開けるのじゃ」

ピエールは繰り返した。

どうでもいいや。分からない。

ウィルはやけくそになり、その木箱を開けた。

開けるやいなや木箱の中から、4つの小さな丸い光が勢いよく飛び
出てきた。

ウィルは驚いて、木箱をほとんど落としかけた。

やはり紅紫色に光っている。光は蛍のように木箱の周りを円になっ

て、飛び始めた。

ウィルは木箱の中を見て、あることに気づいた。

「あ…中に…」

空だったはずの木箱の中には、一枚の紙が入っていた。その紙は折りたたまれて入っていたが、ボロボロで一目でかなり古いものだと分かった。

「もともと入れていた紙か？」

傍に来たローレイが聞いた。

ウィルは激しく首を横に振った。

ローレイはゆつくりと手を伸ばすと、紙をとった。

その瞬間、くるくる木箱の周りを回っていた光が、一気に散らばった。

その光の一つは真つすぐに、ウィルの方へとやってきた。

後ずさりする間もなく、光はウィルの心臓があるあたりにぶつかり、まるでウィルの体内に吸収されていくように消えた。

同時にリィ、ローズの悲鳴が部屋に響き渡る。リィやローズ、また驚いた横顔を見るにローレイにも同じ現象が起きたらしかった。

ウィルは息を飲んだ。

「一体……」

「怯えることはない」

ピエールは落ち着きを払っていった。

「全ては紙に書いてある」

「何て書いてある……？」

ウィルはローレイに小声で聞いた。

ローレイはゆつくりと紙を開き、読み始めた。

汝らをルクパティ・エカルイアの名において、認めん。
認められしものは、王の試練を課される者。

その者はその証として、ラー ज्याの恩恵を得ん。
試練を課すものは世界の民。

王の選定者はラー ज्या。

認められざる者に口外することなかれ。

さもなくば、死が汝を待つのみ。

「ということじゃ」

ローレイが読み終わると、ピエールがいつもの穏やかな顔で満足げに言った。

この場でたった一人、状況を理解しているらしい。

後の4人はただただ呆然とするだけだった。

「質問をする」という打開策に最初に行き着いたのは、ウィルだった。理解できない、訳が分からないといった状況に対し、4人の中で一番免疫がある。

「ピエールさん、何が何だかさっぱりなんですけど……」

「ウィル・カシュ」。それはおぬしらが理解せねばならぬことじゃよ。わしに聞いてはならぬ。おぬしは認められし者。つまりわしが話したところで、わしは死ぬことはない。だが知る者から答えを得た者は、王にはなれぬ。トム殿から聞いてはおらぬのか？」

「き…聞きました」

ウィルはがっかりして答えた。

「ただ少しかこの木箱について、ヒントをあげよう。王宮の者達の常識程度なら、ラー ज्याも許してくれるだろう」

ピエールはそこで椅子に腰をかけた。テーブルの上で手を組み合わせ、そして口を開いた。

「この木箱は王家の秘宝の一つ。初代王ルクパティ・エカルイアの宝じゃ。王位につく者は皆一つラー ज्याの恩恵を受けた宝を作る。ルクパティの宝が、それなんじゃ」

「ラー ज्याって誰なんですか？紙にも書いてありましたが……」

「ラー ज्याはペガサスのことじゃよ。その木箱は秘宝の中でも、もっとも強いラー ज्याの力が宿っておる」

「ちよつと待って！」

ローズが口を挟んだ。

「ラー ज्या：つまりこの国の守護神ペガサスは実在するっていうの？」

「いかにも」

ピエールは頷いた。ローズもリイも信じられないというような顔をした。

「ラー ज्याと王家のつながりは古来から続くもの。それはルクパティとラー ज्याの契約により長い間続いている。木箱は王の選定にも使われるが、それ以外のことも大きな役割を果たしている。木箱は本当に素晴らしい秘宝じゃ。その力は計り知れぬ。おぬしら4人が巡り合ったのも、わしと出合ったのも、もしかしたらその木箱の力によるものかもしれぬ」

質問すれば訳の分からないこの状況も、少しは收拾がつくだろうと思ったが、ウィルはピエールのヒントを聞いて、ますます混乱していった。

「それにしても」

ピエールは嬉しそうにウィルを見た。

「エレン殿にそっくりじゃの、ウィル。無事に生きていて良かった。未来に少し希望が見えてきた。長生きも悪くないかもしれんな」

「ピエールさん、あなたは一体……？」

「わしは……」

そこで少しピエールの表情が曇った。

「今は言わないでおこう。もし次に会うことがあるなら、その時に教えよう。その時は既にわしが誰なのか知られているかもしれないがな」

ピエールは数秒ウィルを無言で見つめた後、立ち上がった。

「さてわしは口をうつかり滑らせてしまわないよう、退室すること

にする。おぬしらも時間が必要じゃろう。ゆっくりじっくり考えるが良い。答えはきつと見えてくる。その木箱を王たるものを導くために作られた。ウィル・カシュー。おぬしが本当に王の素質があるのならば、必ずや試練は達成されよう」

ピールはそこまで言うつと、その場を後にした。

後には「認められし者」4人が残った。

途方に暮れた状態で。

まず試練に乗り出すことができるかどうか、それすらも分からない状況だった。

認められし者 3 (後書き)

読んでくださってありがとうございます!!
感想&評価、お待ちしております

認められし者 4

ウィル、ローレイ、リイ、ローズは、ウィルとローレイの部屋にいた。

どこかで見たことがある光景だった。

一方のベッドにウィルが座り、向い側のベッドにリイとローズが座る。

ウィルは手に木箱を握っていたが、木箱の光は先ほど消えてしまった。

部屋には重苦しい沈黙が続いていた。

とりあえずアミンが帰ってくることを考慮し、ウィル達の部屋に移動した。

だが、そこでまた行き詰る。

誰も何から話せばいいのか、分からなかった。

長く長く続いた沈黙の後、最初に静寂を破ったのはリイだった。

「ウォル…え…えっと……」

リイは思い切って口を開いたものの、すぐにしぼんでいった。

原因を察したウィルは慌てて言った。

「ウィル…ウィルでいいよ！」

リイが沈黙を破ってくれたのが、とても嬉しかった。

一人でこのまま悶々と考えていたら、気が変になりそうだった。

リイは真剣な面持ちで、ウィルを見た。

「それでは、まちがいないのね。あなたは……」

「名前はウィル・カシュ。それは、まちがいないよ。15年間その名前を呼ばれて育ったんだ。ただ、僕には自分が何物かはつきりとは分からない。というか、自覚がないんだ。僕だって、つい最近知ったことだから」

「こいつが王家の者であることは、100%まちがいない。残念なことにな」

ウィルには反撃する気力が残されてなかった。それにローレイの最後の言葉は、自分でももつともな意見だと思ってしまった。

「そんなことないわよ」

リイが優しくフォローした。

「あなたが王様だったら、きっと素敵な国になると思う。あなたみたいに優しい人がなってくれたら……」

「……ありがとう」

ウィルは素直にお礼を言った。たとえ嘘だとしても、気を使ってくれたのが嬉しかった。

「そんなことより」

ローズがキッとウィルを睨みつけた。

周りに不穏な空気が漂っている。

「さっきの紙に書かれてあった文章の最後の部分、もう一回呼んでくれない？」

ウィルは言われた通り、木箱からまた紙を取り出し、読んだ。

「認められざる者に口外することなかれ。さもなくば、死が汝を待つのみ」

「つまり、誰かに話したら……」

「死ぬんだね」

ウィルはローズの言葉を引き取った。

「ちよつと!」

ローズはベッドを立ち上がり、ウィルに詰めよった。

「な……何？」

「あんた、責任とんなさいよ!こんな物騒な掟、あんたのせいだよ!？」

「そんな……」

「それはこちらのセリフだな……」

腕組みをしてローズを見ていたローレイが、しっかり聞こえるようにつぶやいた。ウィルは一波乱ありそうな予感に、身を縮ませた。

「何がこっちのセリフだな、なのよ!？」

ローズが予想通り、食ってかかった。しかも、ローレイの口真似付きで。

「迷惑しているのはこっちだろ！お前たちを助けたせいで、この木箱は何を血迷ったのか、お前たちを「認め」た。お陰で、俺達はいれからも、お前たちに縛られることになった。本当に厄介だ！いい迷惑だ！」

「その迷惑だったら、私達もでしょ！？」

ローズはすごい剣幕だった。ウィルは直視するに堪えなかった。

「あんた達がこんなめんどろな奴らだと分かっていたら、客船でもきつと別の人に頼んでたわ！」

「助けてもらった身分でよく言うよな。砂浜で死にかけてたくせに、ほつといてくれば良かったんだ」

「何ですって！？もう一度言って」

「ストップ、ストップ！」

ついにリイの制裁が入り、ウィルはほつと胸を撫で下ろした。

リイはローズとローレイの間に入って、言った。

「もっと有効な時間の使い方をしましょう。前に進むために考えるのよ。後悔とか馬鹿なケンカとか何もたらさないわよ」

ローズとローレイは、はつとしたような顔になると肩を落とした。だが、まだ睨み合っている。

陰悪なムードを何とかしようと、ウィルも頑張った。二人とも考え込むような、難題繰り出してみる。

「あの光は何だったと思う？」

「ラー ज्याの恩恵とかいうやつだと思うわ」

「……」

リイが即答してしまった。ただ、リイはその後付け足した。

「それが、こういうものは分からないわ。でも、あの光が紙に書いてあった恩恵だということは、まちがいないと思うんだけど」

ローズはローレイを睨むのをあっさりやめ、質問した。

「どうして？」

「あの光は紅紫色だった。紅紫色はペガサスの象徴よ」

ローレイも睨むのをやめた。

「象徴……。ペガサスとかに詳しいのか？」

「全然」

リイは慌ててローレイに向って手を振った。

「でもね、王宮の歴史とか王家の秘宝とかペガサスに関する本が好きだったの。王立図書館で関係する本を読み漁ったわ。もちろん、核心に触れた本は皆無だった。でも事実かどうかは分からない伝説は、好きだったから結構知ってるつもりよ」

「王立図書館？」

ローレイが不審そうに眉をつりあげた。

「あそこにはある程度身分の高い者じゃないと、入れないと聞いたが……」

「あ…仕えていた伯爵家の方が、いつも連れて行ってくれたの」

「伯爵家にしては割と親切じゃないか……。それでも抜け出してるなんて、相当嫌なことがあったのか？」

「いろいろあったのよ！」

答えたのはローズだった。少し顔が赤かった。

「あんたはきつと知る必要があると考えるでしょうけど、大事なのはこれからでしょ。誰だって触れられたくない過去は持つてるわ！ローレイはややいきり立っているローズを怪しげに見たが、何も言わなかった。

「聞きたいことがあるんだけど……」

ウィルが割って入った。

「あのエシミス島発の客船、オーラムスツテラ島行きだったでしょう？どうして逃げてきたのに、またもとの島に戻ろうと？」

「あの時、王国の軍隊が来てたのよ」

答えたのは、またローズだった。

「それがどうかしたの？」

「私達を捕まえに来たかと思ったわ。それで、慌ててあの船に乗っ

たの」

「まさか。たかが奴隷2人のために王国の軍隊が、動くと思ったのか？」

ローレイが信じられないという顔をして、言った。

ローズはまたもや反発をした。

「そうよ、悪い？あんたは奴隷の世界を知らないのよ。私達は運がよくてできたけど、普通だったら逃げられる可能性はかなり低いわ」

「そうなの？」

ウィルが聞いた。

「その通りよ」

リイが頷いて言った。

「銀色の首輪。あれを付けている限り、私達は主人なしで外泊ができないの。夜にさまよってたら、周りの人に通報される。そして通報した人は、お金がもらえる」

そこでリイは一度口を閉じ、まっすぐにウィルを見つめた。

「ウォル……じゃなくてウィル、奴隷制度は貴族と野族の間だけで成り立っていると思うたら大間違い。脇でその制度を受容している人が多くいる。それが制度を確固たるものになっているわ」

「つまりこの国全体が、問題ということだね？」

「ご名答。未来の王様」

リイは、につこり微笑んだ。リイは少しごまかしたが、笑顔の裏の真摯な望みをウィルは見逃さなかった。

「それで、この島を出てどこに向かうの？」

ローズが腕組みをしながら、聞いた。

答えたのはローレイだった。

「オーラムステツラ島。華族の村に行く。こいつの母親の妹がいるんだ」

「エレン様は華族出身だったわね。華族の中でも際立つ、絶世の美女だったらしいわ」

「それにしても」

リイが考え込みながら言った。

「華族に行くなんて、これは導かれてるのか、偶然なのか……」
「どういうことだ？」

ローレイが聞いた。

「よく分からないんだけど、裏で王家と強い結びつきがあるみたいなの。オーラムステッラ島行っても、北西の山の向こうの田舎に華族はいるのに、王家は代々華族とのつながりを大事にしているわ。まあ、行つて調べるしかないわね」

ウィルはリイを感嘆の眼差しで見た。

リイは「認められし者」で当然だと思った。すごく心強い。
ふと気付いた。

肩の荷が前より軽くなっている。

最初は王になるなんて絶対にあり得ないと思つてたけど、今はほんの少し、ほんのほんの少しだけ道が開いた気がする。

認められし者 4（後書き）

読んでくださってありがとうございます！
次回オーラムステッラ島へ！！

花咲く村 1

ウィルは、言うべき時が来たと確信した。

「僕は君に会ってから、体のあちこちが傷つけられている」

出発で忙しい朝。そんな場合ではないと分かっている、今回はもう我慢ならない。

「君は人を一体何だと思っているの？僕は君のクッションじゃないんだ！」

「あつそ。とにかく、そこをどいて。邪魔よ。通行の邪魔」

ローズは全く臆さなかった。むしろ、強烈な睨みを効かせてくる。

ウィルは負けじと、目のあたりにぐつと力をこめた。

「だいたいあんたがぼおつと、いつもいつも突っ立ってるからそうなるんでしょ？」

「違う。君がいつも僕を激突の楯にするんだ。今日だって椅子に足を取られたあと、壁ではなく真つすぐに僕の所に倒れてきたじゃないか。おかしいよ。角度がおかしい」

「ああ、もう！ ツベコベうるさいわね。そこどいて。荷造りがまだ終わってないんだから」

ローズは、手に持っているリュックを激しく振った。

「倒れる方向を決められるなんて、君って本当にすごいよ。技術も根性も。見てよ。おかげであちこちに痣ができているんだ」

ウィルはいくつかの痣を見せようと、体を捻った。

だが当のローズはリュックを掴んでない手を腰に当て、顔は別の方に背けていた。全く見ていない。

ウィルが一生懸命ローズの前で体をくねらせている時、ローレイとリイが近くを通ったが、

ローレイはあからさまに怪訝な顔をし、リイは困惑した顔をしたが、かわらない方がいいと判断したらしく二人ともそのまま過ぎて行った。

「その馬鹿。どきなさいよ」

ローズが低い声で唸った。

ウィルはようやく体捻りをやめると、溜息をついた。

「君もリイみたいな性格だったら良かったのオヴッ！」

言い切る前に、ローズのリュック顔面に凄い勢いで飛んできた。

あまりの痛さに、ウィルは両手で顔を押えて座り込んだ。

そこにはもう、ローズはいない。

今までで一番痛い、ウィルは涙をにじませながら思った。

「おう、終わったか？」

にこにこしながら、アミンがウィルのもとにやってきた。

「笑い事じゃないよ」

ウィルは手で鼻をさすりながら、抗議した。

「ものすごく痛い。鼻が折れているかもしれない」

「うーんと」

アミンはそう言うと、ウィルの顔を覗き込んだ。

「大丈夫だ、ウォルト。正常に鼻は前を向いてるよ」

「そう？よかった」

アミンは木箱関連のことを、全く知らない。そのためローズ達はまだウィルのことをまだウォルトと呼んでいた。ウィルは姓を名乗らなければ、関係のない人でも大丈夫ではないかという申し立てを他の3人に見てみたが、ローズの言葉で即却下された。

あなたの年代またはそれより下の年代で『ウィル』と名乗る人は少ないわ。だって不吉じゃない。悲劇の王子の名前なんて。あなたは毒殺されたという噂も結構ひろまってるのよ。私だったら絶対にそんな名前、子供につけないわね。

ウィルはようやく立ち上がると、聞いた。

「ヴィタリーは？」

「まだ寝てるよ。体がまだ完全に回復していないから、起こさない」

でおうと思うんだ」

ヴィタリーとは、この前の奴隷市で助けられた男の子のことだ。ここに来た日は強いシヨックのせい、衰弱しきっていたが、手厚い看病のおかげで順調に回復してきていた。

「きつとあいつ悲しむだろうな。リイが行っちまうから」

「そうだね」

ヴィタリーはこの数日で、かなりリイに懐いていた。リイは必死でヴィタリーの看病をしており、寝かしつける時には美しい子守唄まで歌っていた。

「元気にやっつけていけよ」

アミンがウィルの背中をたたきながら言った。

「あーあ。お前たちがいなくなると寂しくなるな。当初は2人出発の予定だったのに、一気に4人になってしまったからな」

アミンはくしゃつと笑うと、鼻歌を歌いながら台所に向かった。ウィルは複雑な思いで、その背中を見つめた。

「船も海もこりこりよ」

ローズが、海に背を向けながら言った。

昼過ぎ、ウィル、ローレイ、リイ、ローズ、そしてピエールは海岸に立っていた。

この島は、昼は夜と打って変わってとても静かだ。

波が打ち寄せる音だけが聞こえる。

アミンはヴィタリーのために残ると言い、一行は再開を約束してピエールの家で別れた。

ピエールが空を見渡しながと言った。

「もうそろそろ来るころじゃ」

ローレイが突然ウィルを振り返る。

「ヘマをして落ちるんじゃないぞ」

「お、落ちないよ」

「どうだか」

ローレイはにやりと笑った。

「この前船の上で、大鷲に驚いて尻もちをついたのはどこの誰だ？」
ウィルの顔は真っ赤になる。

「な……」

「あ！来たわ」

横を見ると、リイが空の一点を指さしていた。

その先には小さな影が3つある。

ローレイの意識もそちらに向けられる。ウィルはちらりとローレイを見た。

気のせいだろうか。

久しぶりに、ローレイの顔に余裕が戻っているように見える。

ここ数日、何となくローレイの元気がないことをウィルは感じ取っていた。

もしかしたら、ただの思い過ごしかもしれないが……。

「ウィル殿」

気づくと、そばにピエールが来ていた。

「また会えることを願っている」

「僕もです。ピエールさん。ありがとうございます」

「聞くのを忘れておったが、トムは元気かね？」

「あ……少し体調を崩していましたが、大丈夫だと思います。今頃土族の村でゆっくりと休養をとっているはずです」

ウィルは話しながら、心がしくしくと痛むのを感じた。

「そうか。それは良かった。ところでそのルクパティの木箱、それは時と場所を選ぶと言われておる」

「時と場所を選ぶ……？」

「そうじゃ。とにかく強大な力を持つておるとのことじゃ。その木箱に力を引き出させるには、王の素質が無ければならん」

「素質……」

「一方でもう一つ必要なものがある」

「それは何ですか？」

「それはウィル殿、お主が見つけないならぬ。今の世界を見ることじゃ。目をそらさずに、できる限り見ておくのじゃ。そうすれば、きつとお主なら見つけれられるとわしは思う」

バサツという音がして、三羽の大きな鷲がウィルたちの目の前に降り立った。

もちろんウィルは、こんなに近くで大鷲を見たのは初めてだ。

相手を見る大きな目は鋭く、その爪は人の命を一裂きで奪えそうである。

一番ウィル達に近い所に降り立った大鷲の背中から、一人の蟻族の者が降りて来た。（背が低いために、正面からは見えなかった。）降りてきた蟻族の者は、ピエールと同じくらいの年齢で、白髪と白髭がボウボウに生えている。ウィルはフランクじいを思い出した。フランクじいも背の高い方ではなかったが、この目の前の蟻族の者はさらに慎重を縮めた感じた。

「こんにちは、ピエール」

甲高い声だ。

「変わらず元気そうじゃな、レラ。ルクは受け取ったかの？」

「もちろんだ、恩人よ。さもないければ、私はここにはいない。前払いは蟻族の基本中の基本だ」

「その通りじゃな。紹介するぞ。左から、ローレイ、ウォルト、リイ、ローズ。こちらは飛族のレラじゃ」

「そしてこつちが」

レラがピエールの後を引き取って言った。その視線は大鷲に向けられている。

「私が乗ってきたのが、雄の大鷲カパッチ。その隣がカパッチの双子の弟チリ、そしてその隣がまだ若いメスのアクイラだ」

当然のことながら、大鷲は愛想を振りまかない。むしろどう猛にウィル達をにらみつけている。ウィルは思わず後ずさりをした。その時、信じられない言葉を聞いた。

「かわいい！」

目と耳を疑った。

ローズが恐れもせずに、アクイラに歩み寄っている。

「止まれ、危険だ」

レラが甲高い声で叫んだ。ローズの足がピタリ止まった。

「大驚は私ら蟻族以外の者には懐かない。特にアクイラはまだ若いから凶暴だ。一人で近づくな」

「そうなの」

ローズはじつとアクイラを見つめている。アクイラは爪で砂浜をかいて砂を大きく散らしていたが、目の端でローズを捕えていた。

「でも何だか、大丈夫な気がするわ」

そう言うと、ローズはレラが止めるのも聞かず、一気にアクイラに近寄り、頭を撫でようと手を伸ばした。

その時だった。アクイラが突然紅紫色の光につつまれた。

「え……」

ウィルが瞬きをした後、その光は消えていた。

ローズは驚いて伸ばしかけた手を寸前で止めている。

ちらりと見ると、ローレイにもリイにも表情に驚愕の色が浮かんでいた。

だがレラはというとアクイラの散らしていた砂が目に入ったらしく、しきりに目をこすっており、ピエールは和やかに微笑んでいる。

驚くべきことが続けて起こった。

アクイラが突然甲高い鳴き声を上げたかと思うと、ローズの伸ばしかけた手に頭を押し付けてきた。頭突きではない。誰がどう見ても、それは甘えだった。

ようやくこするのをやめたレラは、目を見張った。

「そんな……。アクイラが……？」

「まあ、いろいろと世の中には不思議なことがあるものじゃ」

ピエールがとりなすように言った。

「さて、レラ。そろそろ出発した方が良からう。夕方までに着かな

いと、この4人を待っている者達が心配するじやろうからな」

先日ローレイは華族のウイルのおばに、行く旨を伝える手紙を出していた。

「ああ、そうだな。ではウォルトとローレイやら。チリの方に来てくれ。慎重に」

ウイル達を誘導しながらも、その目はまだアクイラにそそがれている。ウイルは振り返って仰天する。ローズは今やアクイラに抱きついていて、リイが少し困惑したように、後ろに立っている。ウイルのすぐ後ろで、ローレイが誰に言うわけでもなくつぶやいた。ウイルは心の底から、同意してしまった。

「似た者同士」

「さて、お別れじゃな」

ピエールは大鷲の背中に乗った4人に向って言った。

ウイルは潮風を肺いっぱい溜めこんだあと、口を開いた。

「本当にありがとうございました」

他の3人もそれぞれピエールに向って、お礼を言った。

「ウォルト、わしの言ったことを忘れるでないぞ」

ウイルは力強く頷いた。

「近いうちにまた手紙を書くぞ、レラ」

「分かった」

ピエールに別れの言葉を述べると、レラはカパッチに呼びかけた。

「行くぞ、カパッチ」

大鷲は人間の言葉を理解するらしい。それとも気持ちか。

カパッチは大きな羽を砂浜で2、3回羽ばたかせると、一気に飛び立ち、ローレイとウイルを乗せたチリ、ローズとリイを乗せたアクイラもそれに続いた。

今日の空は、吸い込まれそなくらい青かった。

花咲く村 1（後書き）

まちがって原稿のデーターを消してしまい、やる気ゼロになっていたちょこみるくです。

読んでくださってありがとうございます。
よろしければ、感想＆評価をお願いします

花咲く村 2

飛び立って、どれくらいの時間がたっただろうか。
今のウィルにはそんなことは、どうでも良い。

眼前に広がる世界に全てを奪われていた。

太陽に照らされ、きらきらと青く美しく輝く海。

緑に輝く島々の景色もとても綺麗である。

海の月らしい青と緑のコントラクションだと、ウィルは思った。

心地よい風が、ウィルの髪をなびかせる。

大鷲の羽の力強く動く音が、さらなる興奮を呼んだ。

前にいる、ローレイは飛び立ってから一言も口をきいていないが、
きつとウィルと同様感動しているに違いない。

嘗てない、最高の気分だった。

その島が視界に入った時、ウィルは驚いた。
指をさして、聞く。

「あの島は……？」

だがローレイは何も答えない。

仕方なく、近くを飛んでいたレラに大声で聞いた。

「あれは、ポルテフラ島だ」

レラも大声で返す。

「見れば分かるはずだ。枯れている木が目立つだろう？」

「死の島……」

ウィルはその島を凝視した。

美しい景色の中で、その島は明らかに汚点だ。

確かにレラの言うとおり、枯れ木が目立つがそれは島の一部に過ぎ
ず、他の部分は黒くて何も見えなかった。

近づくにつれ、島が大きく見えてくる。

ウィルは長い間、その島を見つめ続けた。

島の真上あたりという所で、ようやくウィルは気付いた。

島はそれ自体が黒いのではない。

いや、もしかしたら黒いのかもれない。

だが今黒く見えている理由は、黒いスモッグのような得体の知れないものが島のほとんどを覆っていたからだ。

レラがカパッチをチリにぴったりと横につけ、ウィルに向かって言った。

「最近、妙な噂を聞く」

「どんな噂？」

「あの島はもともと死の島なのだが、ここ最近その環境がさらに悪くなっていつているらしい。不思議な病気が、一つの種類に限らず蔓延しているという話だ。ポルテフラ島のすぐ東にある、小さい島が見えるか？」

「うん、見える」

黒いスモッグのせいでその島全体は見えなかったが、正常な緑を持つ小さな島が確かにそこにある。

「あれはエコイカウン島。あの島で病気が蔓延しているという話だ。それに最近、上流貴族の使いがあこの島によく来ている。どうも不穏な動きがある。私達は極力ここには近寄らない」

ポルテフラ島に怪しげな動きがある

トムの小屋で聞いた、ローレイの報告。その怪しげな動きを封じるためにも、早く王になれとトムは言った。

だがもし遅れたらどうなるのだろうか？　なれるかどうかさえも、難しい状況というのに。

そう考えると、胸がざわつく。

一体この島で何が……？

そこで思考停止させ、ウィルは無理やりその島を視線から外した。気分まで悪くなってきたからだ。

後で考えよう。

後で、リイに相談してみよう。

ウィルはそう心に決め、他の所に目をやった。そこで水平線にもう一つの島が見えてきたことに気づく。かなり大きい島だ。海岸線がずっと横に伸びている。聞かなくても、あの島が分かったような気がした。

一番大きい島だと聞いた。

この世界の中心。王都がある島。

レラが叫んだ。

「オーラムステツラ島だ」

ウィルは興奮の波が押し寄せるのを感じた。

この国の繁栄の中心。その一方で、今の元凶の中心ともなっている。その島の上空にたくさんの大鷲が飛んでいる。そして港には、数えきれないくらいの船。

だんだんと、その島はウィルに姿を見せ始める。

島の東部に、大きな岩山が見えた。そのふもとは森林で覆われている。非常に独特な形だ。

頂上は西部の方に向かって伸びているが、一つの山を頂上から真下に二つに割ったように、その先は崖になっている。直角三角形の直角を西側の地面に据えて、置いたような感じだ。

「あれは……？」

レラが答える。

「『世界の果て』だ。もちろん、知っているだろう？ あれは私達蟻族の聖地でもある」

さすがに「世界の果て」のことは、ウィルも知っている。この世界で一番高い山。一番点に近いところ。

レラの声には誇りが混じっているのを感じ取れた。

「あの頂上には蟻族の者しか、行くことができない。普通の人には、あの岩山を登ることは不可能だ」

「行ったことがあるの？」

「もちろんだ。だがあの天に向って細く伸びている頂上には、足をつけたことはない」

「どうして？」

「恐怖に気を失うと言われている。一寸先は、世界で一番大きな崖だ。私達の中でも、あの頂上に立った者は、少ない。相当の精神力の持ち主でないと、立つことはできないと言われている。クリストフ・ボーディンを知っているね？」

「知らない」

ウィルは即答したが、レラは顔をしかめた。気を悪くしたようだ。

「私達蟻族の英雄だ。有名なんだが……。彼はあの『世界の果て』の頂上で、大鷲を操る力を入れたと言われている。私達の族はその時代奴隷として扱われていたが、それ以来確固たる地位を会得した。自由を手にしたのだ。空を飛ぶという自由、それは私達のみに与えられた『自由』だ」

ウィルは黙って、レラの話聞いていた。なんとなくレラの話は、好きになれない。

蟻族の者は皆こうなのだろうか。自分達に誇りを持つことはいいとだと思いが、少し自尊しすぎているような気がする。それにルクへの執着も、聞いていた通りすごい。

「大鷲を扱うことができる力。それは私達蟻族の証でもあり、クリストフ以来代々受け継がれてきた貴重なものでもある。特別な、選ばれた力だ。君らは幸運だ。一時とはいえ、飛ぶことができたのだから。普通の人は決して」

レラの長い話に適当に相槌を打っているうちに、島の中心が近付いてきた。

海岸近くとは雰囲気ガラリと変わり、大きな城が密集している。上空には蟻族の者が多くいた。レラに片手をあげて挨拶をし、飛び去っていく蟻族も何人かいた。ひゅんつという風の音と同時に、一羽の大鷲がウィル達の乗っているチリの右横に並んだ。

後ろをついて来ていた、アキラだ。

「見て！」

ローズの興奮した声が隣から聞こえる。

「私の言うことを聞いてくれるの！ アキラが私の言葉を理解するの！」

レラはローズに気づかず、まだ何かを話し続けていた。

「あの大きな城の集落の中に宮殿があるのかな？」

「まさか……」

ローズが信じられないといった顔をした。

「宮殿はもつともつと、大きいわ！ もう少し北にあるわよ」

「ここらへんの地理を知っているの？」

答えたのは、ローズの後ろにいたリイだ。気のせいか、少し顔が曇っているように見える。

「私達が仕えていた伯爵家の城は、ここあたりにあるの」

「大丈夫よ。絶対に見つかりっこないわ」

ローズはリイというより、自分に言い聞かせるように言った。

「あら」

ローズは、ずっと黙っていたローレイの顔を覗き込むようにしながら、言った。

「顔がすごく青いわよ、ローレイ」

ローレイは何も答えない。不思議そうにしていたローズの顔に、笑みが広がった。

「分かった！ あんた高所恐怖症なのね！ 案外かわいいところあるじゃない」

ローズは遠慮なく、笑い始めた。ローレイは相変わらず、無言だ。だがウィルはその背中から、不吉なオーラが出てくるのを確かにはつきりと感じた。ローズの笑いとは反対に、ウィルは恐怖を感じる。リイもウィルと同じだったらしい。ローズの気をそらすのをねらったかのように、一点を指さして叫んだ。

「見て！ 宮殿よ！ ほら、シャーンティヒ宮殿」

ローズの注意も、ついでにウィルの注意をそちらに向けられる。息を飲んだ。

真っ白な宮殿だった。しかも周りの大きな城に比べ物にならないくらい、大きい。

優雅な建築様式。美しい庭園。その中央には大きな噴水がある。周りにはたくさんさんの塔が立ち並び、敷地内にはいくつか森もある。花が咲き乱れる中庭。堂々とした威厳を感じさせるファサード。全てが壮大だった。

「敷地内を全部回るには、一週間かかるそうだ」

いつの間にか蟻族の話を終わらせていたレラが、横から言った。

ウィルはローレイの背中の横に身を乗り出しながら、食い入るよう見つめた。

自分はここで生まれ、お母さんとお父さんはここで暮らし、ここで死んだ。

エカルイア家の者は今ここにいます。

言うまでもなく、自分と繋がり深い場所。

ウィルの中で、さまざまな感情が混じりあい、そしてこみ上げていった。

花咲く村 2（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

花咲く村 3

眼前に広がる多いな城と町。そして空と海。

大鷲に乗って飛行しながら、ウィルはこれまでに感じたことのない感情に戸惑っていた。

なぜだろう。

不思議な感情が下からぐつとこみあげてくる。

大声で叫びたい気もした。

泣きたい気もした。

目を閉じ静かにしてたい気も同時にした。

この感情を言葉で表すことは不可能だった。

いろいろ迷った挙句、ウィルがした行動といえば大きく目を見開き、今この場所から見える光景を可能な限りはつきりと頭に焼き付けようとした。

「あそこが華族の村だ！」

そうレラが叫んだのは、もう日が傾き始めてるころだった。

レラの指の先には山があり、その向こうには限りなく広がっている花畑が見えた。

「あそこが……」

ウィルがつぶやくと同時に、レラが隣で叫んだ。

「着陸態勢！」

これまで平気だったウィルも一気に青ざめた。視界が急スピードで変わり始めた。空が猛スピードで遠くなり、町が同じスピードで近づいてくる。髪が上になびいた。リイの悲鳴が聞こえる。

つまりは……落ちている！

「ああああああ！」

ウィルは恥も忘れて、声の限り叫んだ。ローレイはどうだったか分からない。だが、ただ一人ローズはこの「落ちる」という瞬間を満喫していた。

「最高！このスリル癖になりそうだわ！」

「はあ、はあ、はあ…コホ、コホン。もう僕…はあ…二度としない」前かがみになり息絶え絶えになりながらも、ウィルは宣言した。硬い地面の上に立つ喜び感じながら。

「情けないわねえ……」

手を腰にあて、しゃきつとした姿勢のローズはウィル、そしてその隣で気持ち悪そうにかがんでいるローレイを見ながら言った。時は夕暮れごろ。

周りには一面に花畑が広がっている。本来なら見とれるところなのだが、一同はローズ以外その余裕がなかった。

「最近の若者はどうしようもないな……」

そうばやいたレラは、早くもまた大驚にまたがり出発しようとしていた。

「もう行かれるんですね……」

少し悲しそうな声を発したのは、ローズだった。ウィルは不思議に思い顔を上げると、ローズがゆっくりとアクイラに近づくのが見えた。

「ローズ……？」

「もうお別れね、アクイラ」

ローズが手をアクイラの頭におくと、アクイラはゆっくりと瞳を閉じた。まるで撫でてと言っているかのように。

「行くぞ、アクイラ。出発だ」

レラは全く容赦がない。チリは既にカパッチの隣でその大きな翼をゆっくりとはばたかせていた。

「キヤウツツ」

突然アクイラが鳴いた。その時だ。またアクイラが紅紫色に輝き始めたのは。

ウィルは慌ててレラを見たが、やはりその光が見えていないらしい。光はまたすぐに消えた。

見えているのは、ローズ、リイ、ローレイ、そしてウィルだけ。

「なんだ、アクイラ？」

レラはややイライラしたように、アクイラに問いかけた。

「キヤウツツ」

またアクイラが甲高く鳴いたかと思うと、ローズに背中を向けそして……。

「……アクイラ？」

アクイラは身を低くローズの前でかがめていた。

誰がどう見ても、ローズに背中に乗ってくれと言っている。

「アクイラ、その女は飛族の者じゃないぞ！」

そう叫んだレラは、何かに殴られたような顔をしている。

「そんな……。ありえない。大鷲は私ら飛族の者だけに忠誠を尽くす。決まっているんだ。私たちの先祖クリストフが勝ちえた栄誉だ！」

「まあ、いろいろと世の中には不思議なことがあるものよ」

ローズがピエールの言葉をそのまま引用した。

レラは咄嗟にローズを睨んだ。誇りを傷つけられたと思ったらしい。

ローズは少しも怯まなかった。むしろ余裕の笑みを浮かべている。

「アクイラは私に忠誠を尽くすみたいよ。そうでしょ？アクイラ」

ウィルはローズの自信満々な態度に驚いた。アクイラの心が読めているとでも言うのだろうか。

アキラはローズに答えた。

「キャウッ」

アキラの甲高い声が赤く染まり始めている空に、響き渡る。

「ふん、勝手にしろ」

レラはそっぽを向いて言った。アキラのことをあきらめたらしい。
「行くぞ、カパッチ」

レラはそう言いつつ、ウィル達への別れの挨拶もなしに飛び立って行ってしまった。

「何だっただんたろう？あの光。君たちも見えたでしょ？」

レラが飛び立つとすぐに、ウィルは他の3人に向かって聞いた。

「さあ、分からないわ」

そう答えたリイの顔は、まだ少し青ざめている。

「でもあの光は、王家の木箱の光と同じ……」

「ラー ज्याの恩恵……」

ウィルがぼつりとつぶやいた。

「え？」

ローズが聞き返したが、ウィルは首を横に振った。

「……まさかね。ううん、なんでもないよ」

「それはそうと……」

ローズはアキラに視線を戻し、次の瞬間アキラに飛びついた。

「これからよろしくね！ アキラ！」

「キャウッ」

サクッ。芝生を踏む足音がすぐ近くでした。振り返ると小太りの男が、鎌を手にはらりと持った状態で立っていた。服のあちこちに土や草がついている。

「おかしな鳥が鳴いていると思ったら……、ご到着だったのかい」
男は満面の笑みを浮かべて言った。
「華族の村へようこそ」

花咲く村 3（後書き）

久しぶりの更新です - - ;
次の更新はなるべく早くなるよう頑張ります < >

花咲く村 4

「ようこそいらつしゃいました」

澄んだ声で迎えてくれたのは、ウィル達と同年代の美少女だった。外観からは気品が溢れていて、その微笑はとても優しい。華族の人たちはみなこの子のように美しいのだろうか、ウィルはみとれながら思った。

「私の名前はフローラ・レファです」

家の中に案内しながら、少女が振り返って言った。ウィルたちもそれぞれ自分の名前を名乗った。

「ウィル・カシューです」

久々に自分の本当の名前を口にする。

「キツチンで母があなた達を待ちわびていますわ」

「今日はごちそうだな」

活気のいい声が聞こえた。ウィル達を先ほど迎えに着た、小太りの男ハレだ。ハレが案内した家は、ウィルがこれまでに入ったことのない、大きくて立派な家だった。広い応接間にウィル達の足音が響く。至るところに花瓶がおかれており、そこにいけられた花たちはまるでその美しさを競ってるかのように咲き誇っている。

「お父さん、お客さんの前ではちゃんと遠慮してね」

困ったような顔をしながら、フローラが言う。

「親子……？」

ローズが驚いて言う。

「はい。私の父です」

「に……似てないんですね」

ハレは人懐こそうな親しみやすい顔をしているが、とてもハンサムとは言えない。

「ははは。フローラがわしに似たら困るだろう」

ハレは大笑いしながら言った。フローラも一緒に少し笑った。

食卓の席で迎えてくれた、アンナおばさんもまた美しい人だった。

「あなたがあのウィル……。こんなに大きくなって。どちらかというと、エレンに似てるのね」

おばさんの声は震えていた。おばさんはゆっくりとウィルに近づいてきたが、最後の方は駆け寄るようにしてウィルをしかと抱きしめた。

「よく来てくれたわ。私のかわいい甥」

ウィルは困惑し、自然に身が硬くなるのが分かった。母親がいなかったら分らないのだが、「お母さん」とはこういう人のことを言うのだろうか、とウィルは思った。

数秒後、ウィルにはものすごく長く感じられたが、アンナおばさんがようやくウィルを放すと、ローレイたちの方を見た。

「こちらは……」

それぞれ自己紹介をする。

「あなたがバディなのね」

アンナおばさんがローレイに微笑みかけながら言った。

「はい」

「うちでゆっくりしていつてね」

アンナおばさんはローズとリイの方も見る。

「もちろん、あなた達もね」

「ありがとうございます」

「お…恐れ入ります」

そこでアンナおばさんは表情を曇らせた。

「いつまでもいってと言いたいのだけど、そうは行かないのですね……」

「まあまあ、とりあえず飯にしようじゃないか、母さん」

とりなすように、ハレが言った。

「そうね」

フローラも柔らかい微笑みで同意する。

大きな長テーブルにはごちそうが並んでいた。船でのディナーパーティの御馳走に少しもひけをとらない。いや、むしろ華やかさでは、色とりどりの花を使用しているためか、こちらの方が上だった。

「今日は疲れているでしょうから、早めにぐっすりお休みになるといいわ」

アンナおばさんが、花のサラダをウィルのお皿にとりわけながら言っただ。

「ありがとうございます」

お皿を受け取り、ウィルはにつこりして言った。おばさんが言った通り、空の旅は思った以上に体への負担が重く、ウィルはもうヘトヘトだった。

「こんなおいしい食事をとったあとですから、今日はぐっすりと眠れそうです」

そう言ったリイは、ちょうどハーブの入った Pasta をおかわりしている。

ローズも同意した。

「そうね。今日は久しぶりにゆっくりと安心して寝られそうだね」
ウィルも口にサラダを入れ、自身も大きく頷こうとしたが、その前にむせてしまった。

「ゴホッ。ゴホッ」

「あんた、詰めすぎよ。口に。全くだらしないわねえ」

ローズがウィルの背中を軽くたたきながら、あきれたように言う。

「お料理はどこにも逃げないから、ゆっくり食べるといいわ」

おばさんにウィルは目を涙でうるませながら、頷いて答えた。
非常に残念なことに花のサラダが口に恐ろしく合わなかったことは、口が裂けても言えない。この花のすっぱさは、とても人が口にするべきものじゃないとウィルは思った。

隣で同じサラダを口にしたローレイの体が一瞬凍りつき、その後お

茶をがぶ飲みしたのをウィルは見逃さなかった。

花咲く村 4（後書き）

読んでくださってありがとうございます

虹花伝説

（虹花物語）

昔々ある国のあるお城にそれはそれは美しいお姫様、レイーズ姫が
おりました。

求婚する他の国の王子様が後を立たないほど、美しく多くの人々か
ら愛されていました。

しかし、困ったことにレイーズ姫はどの王子の求婚も受けようとし
ませんでした。

姫の父、その国の王様は求婚になかなか首を縦に振ろうとしないレ
ィーズ姫に、ほとほと困っていました。

ある時王様はレイーズ姫に聞きました。

「お前はどんな人と結婚したいんだね？」

お姫様は答えました。

「私は虹が好きです。しかし虹はめったに見ることができません。
もし、どなたかが虹を私にくださったならば、私はその方と結婚し
ましょう」

そこで王様は世界中の王子に虹をレイーズ姫に与えたものに、娘を
やると公表しました。

世界で一番小さい国の王子もその虹の話を聞きつけた王子の一人で
した。勇敢なことで知られていた王子は、胸を躍らせました。

「虹をとりに行く旅か。おもしろそうだ」

王子はすぐに支度をし、旅に出ました。王子が真っ先に向かったの

は、ペガサスが住んでいると言われていた険しい岩山でした。猛獣が出ることから、人々がよりつかない岩山でしたが、勇敢な王子は臣下を連れて勇猛果敢に進みました。

さまざまな危機を乗り越え頂上に着くと、王子は満月の明るい夜、天に向かつてのびている崖の方に向かつて一人歩き始めました。満月は世界を明るく照らし、臣下たちはその崖の高さに恐れをなして王子の後に続くことができませんでした。

王子は一番高い、崖のぎりぎりのところに立つと大声で叫びました。

「ペガサスよ。いるのなら、私に力を貸してくれ」

次の瞬間、王子の姿が崖からふと消えました。

しかしそのまた数秒後、臣下たちは王子を目にしました。

その時、王子はペガサスにまたがっており、顔には輝かしい笑顔を浮かべていました。

さて数日後、念願の大きな虹が空に出ました。

王子はペガサスにまたがり、空を飛び虹に向かって手をのばしました。

しかし、虹にその手が触れた瞬間、虹はちりぢりになって世界中に飛びちってしまいました。

王子は一度は落ち込みましたが、花と姿を変えた紫色の虹をすぐに見つけ、残りの赤、橙、黄、緑、青、藍、それぞれの色の虹を探の旅に出、全て集めるとレイーズ姫に献上しにお城へと向かいました。

虹の花を受け取ったレイーズ姫は大変喜び、またさまざまな冒険をしてきた王子の勇敢さにも惹かれ、めでたく王子と結婚することになりました。

それから二人は未永く幸せに暮らしました。

「ねえ、素敵なおとぎ話でしょ？」

話終わるとフローラはウィルにつこり笑って言った。

ウィルは曖昧に笑って言った。

「素敵な話だね」

面白さがよく分からなかったというのが、正直な感想だ。

ローズ、リイ、ローレイ、リイは華族の村にたどり着いた次の日、フローラに花畑を案内してもらっていた。

「その前に、あんたがこの有名な、すごくすつごく有名なおとぎ話を知らなかったというのが驚きよ」

ローズが手を腰にあて、あきれたように言った。

「一国の王子が、そんな調子でいいわけ？」

ウィルはむっとして言った。

「おとぎ話なんて知らなくても困らないだろ」

「それにしても」

リイが睨みあつて二人の間に割って入る。

「これが虹花伝説に出てくる虹花なのね」

その目には一面に広がる黄色の花畑が映っていた。

「そうよ」

フローラはにつこりして答えた。

「ここにあるのは黄色の虹花^{レイズ}。他の6色の花はおとぎ話の中とおなじように世界のどこかで咲いてるわ」

ローズは花をよく見ようと、座り込んだ。

「バラに似てるのね」

「ええ、バラと違ってとげはないんだけどね」

「あれ……」

「どうかしたの？ローズ？」

ウィルが見ると、ローズは眉間にしわをよせていた。

「私赤の虹花^{レイズ}見たことがあるわ。でも、そこでは別の名前で呼ばれてたけど……」

「虹花はそれぞれの地域で別の名前で呼ばれているそうよ」

フローラが答えた。

「だから集めるのが大変なの。全ての花を集めることができるのは王族のみと言われているわ」

ウィルは即座に聞いた。

「王族が？なぜ？」

「分からないわ。勇敢だからとかそんな理由じゃなかしら。とにかく華族の私たちでもここにある黄色と、あと2、3種類の虹花の場所しか知らないわ」

「興味深いわね」

リイが考えこむように言った。

「それにしても……」

フローラはローズを見た。

「赤の虹花をどこで見たの？私はその花があるのは、シャティレティ女王が創設したこの世界のNO・1を誇る学園、シャティレイ学園だと聞いていたけれど。まさかその学園に……？」

「まさか！」

ローズが慌てて言った。

「ちよつと貴族に仕えていたから、見たことがあっただけよ……」

ウィルは、少し俯いたローズを見た。貴族の話になると、いつもローズの顔が暗くなる。貴族に仕えていた時は、やはりそれだけとてもつらかったのだろうか。

「そういえば、ローレイは？」

リイがあたりを見回しながら言った。

「ローレイさんならあそこに」

フローラが指した先を見ると、花畑の後ろにあった木によりかかって寝ている。

ローズが立ちあがりながら言った。

「全く人の話を聞かないなんて、どうしようもないやつね」

「ローレイさんはおとし話とか花には興味がないみたいです」

太陽が既に傾き始めていた。

「母が夕飯の支度を始めるので、私もそろそろ戻って手伝うことにしますね」

「私たちも手伝うわ」

「夕食楽しみだな」

「ちよつとあんたも手伝うのよ」

ローズがウィルを睨む。

「わ…分かってるよ」

今日はサラダが出されないといいな、とウィルは密かに考えた。

その時だった。

すやすや寝てたはずのローレイが目を開けた。

「客人のようだぞ」

虹花伝説（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

黄金の腕輪 1

自由が欲しかったの。

空を自由に飛ぶ鳥のように、世界に出たかった。
今の暮らしの喧騒から逃れたかった。

「本当にお客みたいですね」
フローラは振り返りながら言った。その目は遠くに人影を認めている。

「お客が来るの？」

「ええ。花を買い求めにお客さんが来ますよ。たいていは貴族の召使いとかが多いですけど」

「き…貴族」

ローズの顔が曇る。

「フローラ、私達先に戻って、夕食の手伝いをしててもいいかしら？あまりその召使いとやらに会いたくないわ……」

「ええ、もちろん」

「リイ、行きましょう」

「……」

「リイ……？」

ウィルがリイを見ると顔が青ざめている。

「どうしたの？リイ、気分でも悪いの？」

「リイ？」

リイは自分の顔を覗き込んでいる、ローズを見た。

「ローズ……。後ろ……」

ローズはゆつくりと振り返った。

そこには中年くらいの身長の高い女性が一人。

しばらく二人は見つめあっていた。

「ローズお嬢様……!」

突如その中年女が叫んだ。

ローズの顔はこれ以上にないくらい青ざめている。

「メ……メアリ……。どうして……ここに?」

「それは私が聞きたいですよ。お嬢様は今までどこにおられたのです? お父様もお母様も大変心配なされたのですよ? 家中の者がどれほど探されたのかご存じなんですか!？」

「やめてよ。そんな嘘」

ローズは耳を塞いで叫んだ。

「心配する? ふざけないでよ。大嘘つくのもほどほどにしなさいよ、メアリ。お父様も、

お母様も私を心配してるのではなく、家のことを、地位とか名誉、

体面を気にしてるのよ!!」

突然、メアリが息をのんだ。その目はローズからリイへと移っている。

「なんてこと！ リイ。あなたも！ あなた……。首輪は……!？」

リイはメア리를凝視しながらも、一步下がった。

「なんてこと！ 大犯罪よ！首輪をはずすなんて。奴隷のくせに。うまくローズお嬢様に取り入ったのね」

フローラは予想だになかった事態におろおろしていた。ウィルも何がなんだか分からなかったが、メアリとかいう中年女がすごくムカツクやつということだけ分かった。ローレイもウィルときっと同じことを思ったのだろう。

背後でカチャッと手が剣に触れる音がした。

「ローズお嬢様を欺くことはできても私はできませんよ。奴隷のくせに、こんな大それたこと。ご主人様が優しく接してくださったことで、いい気にでもなったのかしら？ 全くおぞましいわ」

「黙りなさい!!」

『黙れ!!!!』

ローズとウィルとローレイが同時に叫んだ。

ウィルはキツとメア리를にらみつけた。こんなムカツク女がこの世界にいるなんてついぞ知らなかった。

リーの顔は蒼白だった。もう少しで泣きそうな顔をしてる。

メアリは口をつぐむと、ローレイの剣をちらりと見やり、一步下がった。

「とにかくローズお嬢様、家出ごっこは終わりです。全くボードレール家の恥ですよ！ お父様とお母様の顔に泥をぬることになります」

「ボ……ボードレール家？」

フローラがかすれた声で聞いた。その驚愕した顔はローズに向けられている。

「ボードレール家っていったら、伯爵家として有名じゃない……」

「爵位が何よ。そんなものくそくらえよ！」

「まあ……」

メアリが息を呑んだ。

「ボードレール家の長女がそんなこと言うなんて……。ローズお嬢様、許されませんよ！！一体どうなされたんですか。そんなことを口にするなんて。その脱走奴隷に何を言われたんですか」

「もう一度リーのことを侮辱したら……」

ウィルの後を、ローレイが続けた。

「切るぞ」

メアリは再び口をつぐんだ。

ウィルはローズの方をむいた。

「よく話を読めないんだけど、ローズ、君は貴族なの？」

「そうよ！ 悪い？」

ローズは顔を真っ赤にしている。

「私も偽名使ってたの。姓はアルカデルトではなく、ボードレール。伯爵家の娘よ」

「……」

「それが何よ」

ローズは沈黙しているウィルとローレイに食ってかかった。

「それが悪いっていうの！？ あなた達からしたら、私の存在はきつと憎いんでしょうね。このカラーにも嫌悪を感じるでしょうね」

ローズはぐいっと乱暴に服の裾をたぐりあげた。

その上腕には他のカラーと違ってさまざまな装飾が施された、金の腕輪が光っていた。

ウィルは息を吞んで、そのカラーを見つめた。

「でも、なりたくて貴族なんかになったわけじゃないわ！ 戻りたくない」

ローズはメアリの方を振り返った。

「私は戻らない。絶対に。あんな家に戻るくらいなら、今ここで死んだほうがマシよ！ あの高慢ちきな女の顔も二度とみたくないわ！」

その場にいる者全員が固まっていた。誰もがどうすればいいのか分からなかった。

ローズはずっと肩を震わせていたが、二度ほど大きく息を吐くと、つんと顔をあげ、メアリを見据えた。

「メアリ。今すぐ立ち去りなさい。私は帰らない。お父様にもしつかりとそれを伝えることね」

威厳のある声だった。その立ち居振る舞いが高貴な家の出身であることをより感じさせる。

「私は絶対、戻らない。ローズ・ボードレールはもうこの世には存在しないわ」

黄金の腕輪 1 (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

「んで……この状況を一体どうしてくれるんだ？ バカ伯爵娘が」

ローレイは恐ろしく不機嫌だった。

そばに立っていたウィルはそろりそろりとローレイから距離をとった。

離れると経験と直感がウィルにつづている。

「どうしろって一体何が？」

ローズは相変わらず全く動じない。

ローレイの突き刺すようなにらみにも。

「何がって、お前この状況が読めないほど大馬鹿なのか！？ 俺とコイツが立場的に貴族を避けたい立場にあるのは明らかだろうが！
！」

「ええ。知ってるわよ！」

「なら、他人事みたいな言い方をさせないぞ。あの調子だと明日にはボードレル家の者が大勢の人を連れてこの村にやってくる。軍隊かもしれない。伯爵家と言えば、財力と兵力は十分持っているはずだ」

「兵力も！？」

この言い争いに口出しはしないと決めていたウィルだが、つい口を出してしまった。

「ああ。伯爵家なら数百人の兵力を持つててもおかしくない」

「簡単なことよ。逃げればいいじゃない」

ローズをさらりと言った。

「簡単に言っな！ 人を巻き込んでおきながらよくそんな大口がたたけるな！」

「意図してじゃないわ……。知ってると思うけど。とにかく……」

そこでローズは後ろでおずおずと様子をうかがっているリイを振り返った。

「私たちは逃げるわよ。リイ支度しなきゃ。やすやすと捕まってたまるもんですか」

「どうやって？」

ウィルが聞いた。

「ウィル、本気でそんなこと聞してるの？　今の私には逃げるなんてたやすいことよ」

「……？」

ローズは顔をしかめるウィルの前で、指を口に加えピーと指笛を吹いた。

「キャウー」

返答は即座だった。

ウィルが空を見上げると、アクイラが大きな翼を広げながら降りてくるところだった。

アクイラが優雅に着地すると、ローズは傍により頭を撫でた。

「また私を乗せてくれるかしら？」

「キャウー！」

ローレイは腕組みしながら、苦々しい顔でそれを見つめてる。

「自分たちだけ逃げるってわけか……。全くいい性格してるよな、お前は」

「でもローレイ……」

ウィルがおずおずと割って入った。

「確かに僕は貴族には会わない方がいいけど、まだはつきりと顔がわれてるわけじゃないし、今は大丈夫なんじゃ……？」

「たぶん、ウィル駄目よ」

答えたのはリイだった。まだ顔は青ざめている。

「私たちのことでこんなことになってホントごめんね。でもね、今国王は世界のあちこちに兵をさしむけてる。今まではその理由が分からなかったけど、今なら分かる。言うまでもなく、あなたを探しているのよ。そして国王は探すのに、貴族たちに協力を求めていると思うわ。あなた達を見て何も察しない保証はどこにもないわ。やはりここは用心深くいったほうがいいと思うの」

「やばいのはあんたでしょ、ローレイ」

ローズがローレイに背を向けたまま言った。

「あなた達土族は今の国王を認めないとはつきり公言し、バディを国王に献上しなかった。先代国王のバディ、トムを筆頭に堂々と今の王に対して逆らったのよ。ただですまされないことは分かっているでしょ？」

「……」

ウィルは大きくため息をついた。華族の村について、しばらくは落ち着いた生活がおくれるのだろうと思っていたのに、二日目でこれだ……。

「それじゃ、どうすればいいの？ 僕達……」

「できれば……一緒にここを出ましよう」

答えたのはリイだった。

「どちらにしろ、ウィルとローレイ、あなた達のゴールはこの華族の村じゃないんでしょ？ こんなところでゆっくりしてる時間はホントはないんじゃないの？ 人に迷惑をかけておいて厳しいことを言うのもなんだけど……」

「……」

「どこに行けばいいのかわからない。何をすればいいかわからない。お手げ状態なんだ。知ってると思うけど……」

「あの……話の途中口を出して悪いんですけど……」

「今までずっと黙ってなりゆきを見守っていたフローラが、割って入った。」

「ローズさん、今日は大鷲さんに乗っていくのはやめたほうがいいと思います」

「どうして……」

「今日の新聞の天気予報欄に明日は大雨で強風の恐れがあると……」
「……」

「そして向こうに咲いている青い花畑が見えますか？」

「ウィルは目を凝らしながら、フローラが指さしている方向を見た。」

「あの花がどうかしたの？」

「あの花はウエイトピーという花なのですが」

「あの花はウエイトピーという花なのですが、あの花は雨が降り始める前は青色に染まるのです。普段は薄いピンク色の花ですが……なので、もうすぐ天気が崩れるのはまちがいないかと……」

「……。雨はまだしも、風はちよつと痛いね。アクイラの負担も大きくなるわ」

「なので、よろしかったら馬車をお呼びしましょうか？ それで今夜できるだけこの村から遠ざかればきっと逃れられるはずです」

「それは助かる」

「答えたのは、ローレイだ。」

「馬車なら4人乗れる。どちらにしろ、俺とウィルはそれしか逃れる手段がない。迷惑掛けてすまないが……」

「ええ、すぐに私が手配しましょう、父と母にも事情を話しておきます。あ、それとウィルさん」

「何？」

「貴族の方には十分警戒してくださいね」

「え？」

「ここは華族の村。あなたのお母様、エレン様は私の母の姉であり、この一族の出身。母も父もあなたに何も言いませんでしたけど、ここは既に国に……」

「目をつけられているということか……」

ローレイが後を続けた。

「ええ。ただここは都会から離れているうえに、都心とはその大きな山で阻まれてますから、なかなか偵察がしにくいのも事実です」
「阻まれてるって、馬車は大丈夫なのか？　すぐに山を越えてこれるのか？」

「ああ、それは大丈夫です。先程のお客さ……たいていのお客さんは山の向こうの町とこのことをつなぐ列車に乗って来るのですが、それとは別に山と山の間で谷なっているところに、もう一本の抜け道があり、華族の村の者だけが使用しています。馬車は華族の者の馬車業を営んでいるものから手配しますので、安心してください」

「……ありがとうございます」

「それでは、私は先に家に向かってますね」

フローラはそういうと、くるとこちらに背を向け、家の方に向かって駆け出した。

太陽はもうほとんど海に沈み、あたりは夜に飲み込まれつつあった。

フローラが離れると、ローズはウィルを向いてきつとにらみつけた。

「ちょっとあんた！」

「え？」

「あんた、認められし者の自覚あるの？　その木箱を無防備にズボンのポケットにつっこむのやめてくれる？　それにさっき、私はあんたがフローラの前で余計なことを話してしまうんじゃないかという気がなかったわ！」

「仕方がないだろ？ 木箱は肌身離さず持つてきたいんだ。いつ光りだすか分かりやしない。それに、僕はちゃんと分かってたよ！」
ウィルは膨れて言った。

「いつ僕がまずい話をしそうになったと言っん」

悲しいかな。既にローズは聞いてなかった。

「ところでリイ。聞きたいことがあるんだけど、アクイラが光につまれてたでしょ？ あれって……」

「あの紅紫色のでしょ？ 私の推測が正しければ、あれは木箱の光と同じ色だから、ラージャの力。つまり、あれがラージャの恩恵の証じゃないかしら？」

「やはり、リイもそう思うか……」

「なるほどな……」

ローレイも会話に加わった。

「本来蟻族しか手に入れることのできない、大鷲。それがお前への恩恵ということか」

ローズは再びウィルの方を向いた。

「あんたはさつき何も手がかりがないみたいなこと言ってたけど、私はアクイラのこととかもあってそうとは思えないのよね。これは試練。木箱は試練を助けてくれる道具じゃないわ。答えはきっと自分たちで導かないといけないのよ」

「導くって言ったって……。何からどうすればいいか……。ペガサスを探せなんて漠然としすぎてる」

「そのことなんだけど……」

リイはレイーズの花畑の前に座り込みながら言った。

「私、意外に虹花伝説にヒントがあるんじゃないかと思うの……」

「あのつまらないおとぎ話に？」

ウィルが驚いて聞いた。

「つまらないって何よ！」

ローズは憤慨して言った。

「あんたは感性というものがないのかしら？」

「ローズ、ウィル、話を進めるわよ？ 私が知ってる限りペガサスにまつわるおとぎ話はその虹花伝説しかない」

「確かにそうだな」

ローレイが頷いた。

「俺も母親にいろいろとおとぎ話をガキの頃から聞かせてもらっていたが、ペガサスにふれるおとぎ話はその虹花伝説以外聞いたことがない」

「でも……」

ローズは顔をしかめて言った。

「おとぎ話はおとぎ話にすぎないんじゃないかしら。現実とは違うわ」

「このおとぎ話に出てくる花は実在してたわ。そしてペガサスがいることも分かってる」

リイは一輪の黄色のレイーズをちぎると、立ち上がり振り返った。

「この花が何か鍵を持つてる気がするの。もちろんおとぎ話が全部現実にあるとは言わないわ。まず、虹は花にはならないし、お姫様も、王子様もない。でも何かを暗示してるような気がする」

リイは突如話すのをやめた。

それがなぜなのか後の3人は聞かなくても分かっていた。

その『理由』が今目の前で起こっている。

すっかり暗くなった小道である種の光と静寂が突然現れた。

しばらくして、ローレイが口を開いた。

「へえー。ゴメンゴメンとかが」

黄金の腕輪 2 (後書き)

読んでくださってありがとうございます。
感想など頂けると幸いです。

黄金の腕輪 3

「大変ご迷惑をおかけしてすみません」

ウィルはアンナおばさんに心の底から謝った。

そして同時に背後のアンナおば宅を名残惜しそうに見る。

日はすっかり沈んで、あたりは真っ暗だった。

せつかく落ち着いた生活がしばらくできると思ったのに。

「迷惑だなんて……。どうか気をつけてね。無事を祈ってるわ」

おばさんはウィル達の早すぎる旅立ちを本当に悲しんでいるようだった。

「たいしたおもてなしも、協力もできなくて申し訳ないわ」

「いえいえ、とんでもないです」

「お！」

ハレが一方を指さして、変わらないひょうきんな声を出した。

その指の先には一台の馬車の影。

「馬車がきたみたいだな」

ローレイも重ねてお礼を言う。

「馬車の手配までしてもらってすみません。本当に何から何まで…

…ありがとうございます」

リイとローズも続けてお礼を言った。

生温かい風が吹いてる。

「最後にこれをあなたに渡しておきたいと思うの」

アンナおばが取り出したのは、金の装飾が施された首飾りだった。鎖も金だ。

見るからに高価そうな首飾り。

「これはあなたのお母さんが使ってたものの。その鎖についてる丸いペンダントは開くのよ」

ウィルはおばさんから首飾りを受け取った。

ペンダントは手のひらよりひとまわり小さい。

ウィルはさっそく開けてみた。

「鏡だ」

開くと両面鏡になっていた。

「姉さまはそのペンダントを大変気に入っていたわ」

「ありがとうございます。大切にしますね」

僕のお母さんが使っていたもの。

お母さん……。

一体どんな人だったのだろうか。

アンナおばさんに似た感じのひとだったのだろうか。

ウィルはペンダントを眺めながらぼんやり考えた。

今までこんなことを考えもしなかった。「最後にお聞きしたいことがあるのですが……」

そう切り出したのはリィだった。

「今日フローラさんが見せてくださった、虹花^{レイズ}。他の色の花の場所、

分かるのだけ教えてくださいませんか？」

フローラは不思議そうな顔をした。

「ええ……いいですけど。えと……赤はもうご存じなんですよね？」

えと橙がエキスプレシオ島、緑がエコイカウン島。だったよね、お母さん？」

アンナおばは頷いた。

「その通りよ。フローラ」

その口元が少し綻ぶ。

「なつかしいわ……虹花かあ。ウィル」

「え？」

アンナおばはそこでクスリと笑った。

「あなたのお父さんは、虹花を全種集めて、それを半永久的に植物を保存できる特殊な瓶に詰めて、それをあなたのお母さんにプレゼントすると同時に求婚なされたのよ」

「全種……」

ウィルは父親の求婚話よりも全種の虹花というところに興味を持った。

フローラは王族だけが全種虹花を集めることができると言っていた。お父さんは虹花を全種集めることができたらしい。

少し考え込んでいるウィルを見て、アンナおばの表情はふと真顔になった。

そして確かにこういった。
ポツリと。

「始まりはそれで大丈夫よ」

「え……？」

アンナおばは答えずに、馬車にちらりと目をやった。

「さてそろそろ出発したほうがいいわね。長く待たせちゃ悪いし。ただでさえ、長旅になるというのに」

「道中気をつけるよ。抜け道は整備さえてねーからな。たまに馬車が横転しちゃうんだよな。ハハハ」

ハレは威勢のいい声で笑いながら言う。

「……」

ウィルの近くでローズが小声で毒づく。

「気をつけるつつたって、どうしろって言うのよ……」

「ちよつとハレ、怖いこと言うんじゃないの」

アンナおばは夫に向かって顔をしかめた。

「ああ、ハハハハ。スマン、スマン。ローズマリー」

ハレはしばしばおばのことを「ローズマリー」と呼ぶ。あだ名みたいなものらしい。

「脅かすつもりはなかったんだ。本当にたまにだからそう怯えんでもいい。よっぽどの強い風が吹かんと、倒れんさ！ ハハハ」

直後生温かい風が唸り声をあげながら、辺りの木や花を強く揺らした。

ローズがますます表情を硬くしていく横で、ウィルはレファ親子をぼんやりと眺めていた。

これが夫婦。

これが親子……なのだろうか。

よく分からないけど、なぜかすごく暖かい。

自分は一度もこういうのとは無縁……。

いや。

ウィルはそこで思い直した。

トムとフランクじいの笑った顔が浮かぶ。

ウィルも確かにその暖かさをかつて持っていた。
あの山奥で。

自分もその暖かい「何か」を持っていたことが分かり嬉しくなる一方で、ウィルは寂しさも同時に覚えた。

トム……。

フランクじい。

元気にしてるかな……。

フローラの声で、ウィルは我に返った。

ローレイに茶色のバスケットを差し出している。

「これ、さつき母と作ったサンドイッチです」

「すまない……」

さて、本当に出発しなきゃ。

ウィルはもう一度レファ親子に向かって深々と頭を下げた。

「本当にありがとうございました。それじゃ……僕達、もう行きま
すね」

4人が馬車に乗り込むと、すぐに馬車は走りだした。

ローズはアクイラに馬車に付いてくるよう指示し、アクイラはそれを理解したようだった。

「キャウ」

一同は馬車から身を乗り出し、見えなくなるまでレファ親子に手を振った。

親子の姿が見えなくなると、さつそくりイは切り出した。

「次はエコイカウン島が妥当かもね」

ローレイは腕組みをしながら同意した。

「そうだな……。また船旅か。まあ、あのようなことはないだろう。」

危険海域ではない」

「でも船に乗り込む前にいろいろと必要なものを買い足したほうが良さそうね。地図とか食糧とかいろいろ必要でしょ？ お金は足りるかしら？」

「大丈夫よ。まだ十分余裕があるわ。足りなくなったら、ウィルが稼ぐつてのもありなんでしょ？」

ローズが自分のバッグの中を覗き込みながら言った。

高価そうなバッグ。

たっぷりルクの入った水晶。

ウィルは納得した。

どうしてそんなものをローズが持っているのか今は理解できる。

「それはそうと、私達すごいよね」

ローズはにつこりと笑っていた。

「すごいと思う。すごくない？ だってこの世界の秘密に関わって、その確信にどんどん近づいていってる！ 自分たちの力で危機を乗り越え、知恵を絞って。こんな楽しさ、私知らなかった。今まで全然！」

ローズは声に出して笑った。

「楽しいって……」

ウィルは緊張感のないローズにあきれた。ローレイは顔をしかめており、リイは微笑をしていた。

確信にどんどん近づいていってる！

それは確かかもしれない。

ウィルはポケットに入っている木箱をポケットごと握りしめた。

リイが摘んだ黄色の虹花は紅紫色に光りながら、ウィルのポケット

に入っていた木箱の中へと消えていった。

そして木箱の示した2番目の啓示はこうだった。

持てる知性出されるべし

鍵 いにしえ 古より伝承されしものの中にあり

そして、さつき確かにアンナおばは言った。

ローズの言う通りだ。

確かに近づいて行っている！

ローレイとローズが何か言いあっている横で、ウィルは少しだけ表情を緩めた。

黄金の腕輪 3 (後書き)

読んでくださってありがとうございます！

蛇道村 1

外はひどい雨だった。

馬車のカーテンの下から雨が入り込む。

隙間風も容赦なしだ。

甘く見ていた。

馬車の旅がこんなにつらいとは全く思いもなかった。

外で風がごうごうと唸っている。

道はハレの言った通り、整備されておらず、ガタガタしているらしく、馬車もそれに合わせてゴトゴトと音を立てて大きく揺れた。

馬車の揺れる音

風と雨の音。

4人はぐったりと、このこの上なく不快なアンサンブルを聞いていた。

馬車が揺れるせいで体が痛い上に、隙間風のせいですごく寒い。

あの海賊船での悪夢が再来したようだ。

「ま……とりあえず安全な状況にあるだけいいよね？」

ウィルは他の3人というよりも自分に言い聞かせるように言っただけ。ずっと寒さに震え続けてる自分を励ましたかったのだ。

「安全？」

ローズの食ってかかるような声が返ってきた。

ローズは顔を紅潮させ、手を絶え間なくこすり合わせている。

その表情から、不機嫌さがマックスであることが窺える。

「この風の音が聞こえないの！？ いつ馬車が横転するか分かったもんじゃない。それに何この寒さ！ 凍え死にしようよ！ こんな乗り心地の悪いボロ馬車が存在するなんて知らなかったわ」

「それは君がお嬢様育ちだからだろう！」

ウィルはめずらしくローズに反撃した。

いつもは怖いし、10倍になって返って来るから、言い争いは極力避けるようにしていたが、ウィルもこの最悪なコンディションのものと気が立っていた。

「御者の人はもっともつとつらいはずだよ。感謝しなきゃ……」

ウィルはカーテンの隙間から見える外の雨模様をちらりと見やりながら言った。

周りの木々が大きく揺れていて、まるで馬車に向かってお辞儀しているかのようだ。

「それならあんたが代わってきてあげなさい！」

「……どこまで君は自分勝手なんだ。もとはと言えば、こんなにも早く出発しないといけなくなったのはローズ、君のせいだろ！？ほんと、こっちは大迷惑だよ」

「なんですって！！ もう一度言ってみなさい！」

「ちよつと二人とも……」

ローズと同じように頬を紅潮させたリイが背もたれにぐったりもたれかかりながら、力なくとめに入った。

だが二人はすぐには黙らなかつた。

しかと睨みあう。

外の轟々という風の唸り声が、二人の苛立ちに拍車をかけた。

「あんたみたいな馬鹿に非難される以上に腹立つことってないわ」

「君ほどにお高くとまった人、僕会ったことないよ！ やっぱりどうあがいても君は貴族なんだね。リイとはやっぱ態度とか全然違う」

「……っ！」

次の瞬間、ローズの皮でできた、しかも中に水晶やらその他もろもろぎっしり詰まったバッグが顔面に飛んできた。

「痛っ！！」

「ちょっとローズ、危ないじゃない！ ウイル大丈夫？」

「あんたなんか潰れちゃえばいいのよ！ 最低！！」

ウイルスは飛んできたバッグを足元にたたきつけた。

「最低なのはどっちだよ！？」

さすがのウイルスもぶち切れ寸前だった。

出発時、自分たちの進歩に満足し、決意を人知れず新たにしたものもつかの間、すぐに機嫌を折られてしまった。

「おい！」

ずっと目を閉じていたローレイが口を開いた。

どうやら寝ていなかったらしい。

「いい加減にしろ……」

落ち着いた声だったが、殺気を後の3人に十分に感じさせた。

ウイルスとローズは互いに睨みあったまま、口を閉じた。

ローレイを本気で怒らせてみる気力と体力は二人には残っていない。

しばらく黙ったままウイルスを睨みつけていたローズだったが、ふと息を大きく吐くとカーテンの隙間から外を見た。

「アクイラ……大丈夫かしら」

「とりあえず」

ケンカが収まってほっとした調子のリイは、元気づけるように言った。

「真夜中には山を抜けたところの村に着くって、ハレさんが言ってたからあと1時間とちよつとくらいだと思うわ。そこで宿をとってベッドにもぐりこめることができる」

「寝る前に1杯あったかいココアが欲しいわ……」

「きつとあるはずよ」

「ところで何と言う村っていったかしら？」

「えと……確かサーペン村だったような……」

「サーペン村……。ああ、思いだした。多分ドムトリ子爵の領地ね……」

ローズはぐつたりと壁にもたれかかりながら、疲れた調子で言った。
「貴族の土地なの？」

ローズとはしばらく口を聞くまいと心に決めていたウィルだが、好奇心は抑えることはできない。

「ええ。シャーンティヒ宮殿の周りには貴族たちの家が立ち並んで、さらに海岸の方へ行くと主に平族の村が広がっているわ。まあオーラムステラ島の8割は貴族に所有されてる。王族はずっと貴族の権勢を落とそうとしたけど、なかなか成功しなかったのはそのせいでもあるわ」

「8割も……」

「貴族はもとは王家だった者や素晴らしい働きをしたことで勲章とかをもらった者の子孫にあたるのよ。もとは他の族にもひけをとらない優秀な人たちがいたのよ。ただ子孫まで優秀で賢人とは限らない……」

「……」

「とりあえずドムトリ子爵は警戒するにあたらない人だと思うわ。何度かパーティーで会ったけど、ぼおつとしてる脳なしだったわ。その娘は根の曲がった高慢ちきの馬鹿女だったけど……」

平静でもローズの口の悪さは変わらない。

ウィルは思わず苦笑した。

そして考えた。

ローズは家を飛び出すまでどんな生活をおくってきたのだろう。欲しいものは何でも手に入れることができる、満ち足りた生活だったはずだ。

なのにどうして、飛び出したりしたのだろう。

コトコトコト。

馬車が揺れる。

温かくて甘ったるい一杯のココアまで、もつ少しの辛抱だ。

蛇道村 1（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

よろしければ励みになりますので、感想等よろしく願いします^

^

蛇道村 2

馬車は一軒の宿屋で止まった。

「わしはこの近くに親戚が運営している酒場がありますんでそこに行きますわ」

髪も髭もすっかり白くなっていた御者は、快活に言った。

年の割にはかなりタフらしい。少なくともウイル達よりはシャキッとしていた。

激しい風や雨にもろに打たれていたはずではあるが。

ウイル達は十二分にお礼を言った後、御者と別れた。

「いらつしえー」

威勢のいい声で迎えてくれた、宿屋の主人は気さくな人だった。一見図体がでかく怖そうな人だったが、客に対し口を大きく開いて笑って答える。白いハチマキを頭にまいており、客たちからは「ハチマキの旦那」とか「ハチさん」と呼ばれていた。

宿屋の中は明るく、外とは違ってとても明るい。多くの人でにぎわっており、外の不快な音もここでは小さなノイズとなってしか聞こえない。

「ほらよ！ ココア4つお持たせー！」

ウイル達は酒を飲んだり騒いだり歌ったりしてる人々の声を聞きながら、温かいココアを一杯飲み、その後4人とも言葉少なげにベッドへと向かった。

4人とも疲れきっていた。

「ちょっと！　いつまで寝てんのよ！　起きなさい！」

次の日、もうすぐお昼というところに、ウィルはローズにたたき起こされた。外はまだ激しい雨が降っている。少し肌寒い気温だ。

目をこすりながら、何かぶつぶつ文句言っているローズの後をついて階下へ降りると、ローレイとリイは遅めの朝食をとっているところだった。

「おお、最後の寝坊客様が降りてきなせった」

ハチマキのおじさんが元氣よくウィルに挨拶をした。何やら客と話していたらしく、カウンターに座っている。ウィルが挨拶を返すと立ち上がりカウンターの裏に回ってコンロの鍋に火をかけた。

「お寝坊客さん、朝食はダーミージョウでいいかね？　おいしいぞ」大きな器にたつぷりと注がれたダーミージョウは、ウィルが今まで見たことのないお粥だった。お粥の中には大きめにきられた鶏肉が入っており、白ネギと生姜が上に添えられている。鶏肉をつけるためのタレも、小さな容器に入って隣に添えられていた。湯気がたっており、おいしそうなにおいが鼻孔をくすぐる。

ローレイとリイも寝ぼけ眼ながらも、同じものを口に運んでいた。

「ローズはもう朝食とったの？」

ウィルはスプーンを手に取りながら聞いた。白い陶器でいたスプーンだ。ピンクの花が描かれている。

「ええ、とっくに。だいたい何時だと思ってるの？！　寝坊するに

も程があるわ！」

「だって昨日すごく疲れて……。まだ体のあち……。こ……。ホフ、熱！ あちこちが痛つ……。ハフって……」

「食べながら話さない！」

「はひ……。ハフっ……」

熱いお粥をやつとゴクリと飲むとウィルは、すぐにオーナーの方を振り返った。

「ハチマキのおじさん、これすつごくおいしい！ こんなおいしいお粥初めて食べたよ！」

宿主は嬉しそうにニーっと笑った。

「そうかそうか！ それはよかったあ。こんな雨の激しく降る朝は冷えるからな、お粥がびつたりなんさよー！」

ふいにローズが横から耳を引っ張って、ウィルの顔をテーブルに戻す。

「いいから早く食べなさい！ 話すことがあるんだから……」

「……はい」

ウィルが再びお粥を食べ始めると、ローズはため息をついた。

「食べながらでいいから3人とも聞いて！ この村に一番詳しいのは私だと思うから。昔家族と一緒に観光にきたことあるし……」

「こんな辺鄙^{へんび}な村にか？ 伯爵様御一行が何の用事で？」

すっかりお粥をたいらげたローレイがスプーンを置きながら聞いた。

ローズはきつとにらみつける。

「観光と言ったでしょ？ それにその言い方、癢に触るわ、やめてちょうだい。この村は別名蛇道村とも言うの。なぜかという、昨日少しでも道の形を見たなら分かると思うでしょうけど、この村は小さくて古い建物がクネクネと曲がってる道に沿って所狭しと並ん

でる。その建物の並びと並びの間が蛇みたいにクネクネに並んでる
か蛇道村っていうのよ」

「……単純だな」

「まあ、それはいいとして、今日私は、あなた達と違って、朝早めに起きて新聞を買いにちよと出かけたわ」

そこでローズはテーブルにポンと新聞を投げ置いた。花の月96日。あと4日で海の月がやってくる。

「この天気予報によると、今日夕方以降は雨がやむみたい」
ウィルがにらむように窓の外を見た。

「とてもそうは見えないけどね……」

「まあ、あたるかどうかは分からないわ。そこは運任せね。誰も100%の予測はできない。でも、晴れたら絶対チャンス！」

「どういうこと？」

「ここは夕方から夜にかけて行われる有名な市場が毎日開かれてるの。あ、毎日っていうか天気が良い日は必ずってことね」

「へえー」

「お店とお店が布で仕切られた特徴的な市場でね、もともとせまい路地であるのも手伝って、かなり混雑するわ。だけど、いろんなものが手に入るの！ 売られるのもさまざま」

リイが頷きながら口を開いた。

「私も一度聞いたことがあるけど、本当にいろんなものが売られてるらしい。それも安くでね」

「そう、売り方も特徴的なよ。お客はその市場では値切るのが常識なの。商品に値札は一切ついてないわ。お店の人が最初に言った値段を値切っていくのがその客の主流」

「確かに特徴的な」

ローレイが腕組みをしながら言った。

「普通の店で値切るということは行われなくてもないが、値切るのが主流とまではいかない。値札はたいてい貼られてるし……。それに布で仕切られてるって言うのも」

「そう一時的なお店だからね。布と机だけでできたお店だから、誰でも簡単にお店が開けるってわけ。店開く側も客も仕事終わってく感じるなのよ。まあそれが起因しているんな人が店開けるから、当然いろんな商品があるってことなのよ」

「それじゃ、僕たちがいろいろ買い物するのにぴったりって……ここホツと？」

最後の一口を頬張りながらウィルは聞いた。

ローズがコクつと頷く。

「そういうこと！」

カチャンとウィルはスプーンをテーブルに置いた。

「それじゃ、決まりだね」

「必要な物をそれまでにリストアップ、そして外出の準備をしなきゃね」

ローズはそう言いながら、立ち上がった。

「どこ行くの？」

「部屋に戻ってペンとメモ帳をとってくるの。あんた達はその食器片付けてもらってなさい……」

ローズはきびきびとした調子で階段を上り、階上の自室へと向かった。

数秒の静止。

残された3人はぼかっと口を開けてローズの後ろ姿を見守っていた。ふいにウィルが小さく咳払いをし、リイに問いかけた。

おもしろさ半分、恐ろしさ半分といった面持ちで。

「どうしたの？　ローズ。僕達が見てない時に、なんか変なもので食べたんじゃないの？」

見ると、リイはニコニコ笑っている。

「あれでもね、責任感じてるのよ。だから少しでも役に立とうと思
ってるんじゃないかしら」

「責任？」

「そ。自分のドタバタに巻き込んだっていう責任」
「へえー」

驚くウィルの横でローレイがぼそりとつぶやく。

「分かりにくい女……」

リイはクスリと笑った。

「そうだ、お客さん達」

テーブルを片付け終わった宿屋の主人が、ウィル達に声をかけた。

「モーリーホワチャーを飲まんかね？ おいしいお茶なんさよ！。
まだやわらかい茶葉を摘んだやつだから、香りも味もいい。体にも
当然グッドだ」

「『『ぜひ頂きます！』』」

蛇道村 2 (後書き)

読んでくださってありがとうございます

蛇道村 3

「すっごい人だなあ」

ウィルは辺りを見回しながら言った。

クネクネと曲がった狭い路地なのに、次から次へと人が流れ込んでくる。

「もう少しで市場につくわ！ はぐれないようにね」

ローズは白い紙を覗き込みながら言った。

先程ハチマキのおじさんに描いてもらった地図だ。

「はぐれないのって無理なんじゃない？」

傍の人に押されてローズから離されながら、ウィルは大声で言った。周りの雑音が煩く、大声を出さないと届きそうにない。

「ちょっとはぐれないでって言ってるでしょ！？」

地図から目を上げたローズの一声。

と同時にローズの腕がひゅっとウィルの方に伸びてきて、服を掴みぐいっとローズのもとへ戻した。

「しっかりして！ こんなところではぐれたら大変よ。探すのにすごい時間かかるわ！」

「無理だよ、次から次へと人が僕を押すんだから。それに、あのさ

……」

また視線を地図に戻しながら、ローズはいかにも機嫌悪そうに聞き返した。

「何よ？」

ウィルはそこでため息を一つつくど立ち止まり、今度は自分がローズの服を掴んだ。

「何？」

ローズが怪訝そうな顔つきでウィルを見る。

「気づいてないようだから言うけど、後ろについてきてたはずなんだけど、いないんだ」

「は？」

「リイとローレイ」

そこでローズは両手を上げて天を仰いだ。

「最低、最悪。信じられないわ。本当についてない」

ローズの悪態は長く続いていた。

ウィルは適当に相槌をうちながら、その隣を歩いている。

スルーが一番。

これは経験から学んだこと。

「どうしてよりによって、あんたと取り残されるのよ」
「あーそうだね」

恐ろしく棒読みな返答。

だがローズはそんなこと気にも留めずに続ける。

「あんたみたいな愚鈍なやつと一緒にいたって、なんのメリットもないじゃない」

「うん、そうだね」

「買い物リスト、リイに預けたままだったし……。あんた、あのリスト欄覚えてる？」

「うーん……、そうだね」

「覚えてるかって聞いてるの、馬鹿！」

「え？ あ……何を？」

「買・い・も・の・リ・ス・ト」

「少しくらいなら覚えてるよ。地図でしょ、あとは……えーという日用品？」

「あーごめんごめん。聞いた私が馬鹿だったわ。ま、そうね、とりあえず地図は一番必要だから探しましょう。しっかりしてよね、未来の王様」

あからさまに棘が入っている最後の一言。

ウィルはスルーすることも忘れて膨れた。

「好きでやってるんじゃないんだ。そんな」

「あ！ ほら、あそこが市場の並びの始まりね！」
ローズは少し弾んだ声で言った。

その指した指の先には、ウィルも抗議をやめて目を丸くした。

「これが市場……」

「サーペン市場よ。こういう形式の市場はここで見られないわ」

狭い路地の両脇には一定の間隔でカーテンのような布が細い棒をつたってたらされていた。

路地の真ん中には大人2人かろうじて通れるほどの隙間がある。

布と布の間にはテーブルや台などが置かれてあり、なにやら商品らしき細々したものが所狭しと並べてある。

仕切りの布に網をめぐらせ商品を吊り下げたり針金でとめたりして並べてるところもあった。

「すごい！」

前もって話を聞いてはいたものの、生の市場を前にするとやはり驚かざるにはいられない。

狭い路地をさらに狭くして作られた、簡易的な市場だが、人びとの活気に満ち溢れている。

「なんでもありそうだね」

「そうね。お店を開くことがここでは簡単にできるから、売る人も売り物もその種類の数は期待できると思うわ」

ウィルは早く店を回りたいとうずうずしていた。

「とりあえず、地図を探すんでしょ？ 早く店を見て回ろうよ！」

好奇心で輝いてるその顔を見て、ローズはため息をついたが、あき

らめたように同意した。

「そうね。ついでにリイ達とも早く合流しないといけないわ。この市場まではローレイはともかくリイなら人に聞いたりなんたりでたどり着けるだろうから、2人を探しながら店を見て回りましょう」かくして、2人は狭い通路の人の流れに加わりながら、市場に足を踏み入れた。

「わあ、ここすごい。何種類ものサングラスがあるよ！　ローズ！」

ウィルの興奮は最高潮に達していた。
始めてみるものが多すぎて、目と頭を動かすのに忙しい。

「ここは調味料がたくさんおいてある！！　塩だけでもすごい数だ！」

当初の目的など、ウィルの頭からはさっぱり消えていた。

辺りは盛んな声が飛び交っており、左右の店員達ははしきりに行き来している客達に声をかけている。

「おい、その君。水晶を見ていかんかね！　今はルクをちよつとだけいれておくための小さい水晶や貯金用の水晶、いろいろと新しいのが開発されてるんだよ」

たくさん水晶に囲まれて座っているおじさんに声をかけられ、ウィルは足を止めた。

「へえー。すごいなあ。この大きい楕円型の水晶が貯金用？」

「ああ、そうだよ。最新型水晶を見たいかい？　まだ在庫があまりないから売らないつもりだったんだが、特別に見せてあげるよ」

「本当に！？　ありが　ぐうえっ！」

ここで当然と言うべきか、我慢の限界に達したローズの鉄拳が飛んできた。

ローズは無言だったが、その鋭い睨みが全てを語っていた。

ウィルは頭をさすりながら、素直に謝った。

「すみません。地図を探します。あとローレイとリイも」

ローズはよろしいと言った調子で、厳かに頷くと歩を進めた。

足を止めて中をじっくりみたいという欲求を抑えながら歩いてると、ウィルの視界に本がたくさん置いてある店が飛び込んできた。

「ローズ、あそこに地図ありそうじゃない」

「そうね……。聞いてみま」

「ローズ！ ウォルト！」

見ると、リイとローレイが店の奥にいた。

「ここにいたら、会えると思って。よかったわ！ ごめんね、二人とも。はぐれちゃって」

「うっん、いいのよ、リイ。この馬鹿が悪いんだから」

いきなり指されて、ウィルは驚いた。

「え……僕のせい！？」

「それより見つかったの？ リイ？」

「地図か？」

答えたのはローレイだ。

同時に右手を上げる。

その手にはくるくると巻かれた、若干古めの紙が握られていた。

「さすが。購入済みのようね」「当然だ。時間たつぷりあったからな。お前達二人は一体どこで油売ってたんだ」

「ああ。この馬鹿のせいでいろいろと遅くなったの」

「だから……なんで僕のせい」

「お前さん達は旅の者かい？」

そのしわがれ声は、店主。

白髪の老女だった。

紫の布を頭からすっぴんかぶっており、ウィルは昔読んだ本に出てきた魔女を連想した。

老女は目を細めて4人を見た。

「お前達は変わってるねえ。ケヘヘヘ。なかなか興味深いよ」

老女のじろりとした視線にかち合い、ウィルは身震いした。

笑い方もその目つきも、ウィルは好きになれない。

他の三人も怪訝な顔をしているので、恐らく心地は良くないのだろう。

「次はどこを目指すのかね？　もしかしたら、わたしや良い情報もってるかもしれないよ。わたしや、こう見えても情報通でね」
誰も答えようとしない気まずい沈黙が数秒流れたので、ウィルは仕方なく口を開いた。

「次は確かエコイカウン島……」

「ほお。それまた、おもしろいところに行くねえ」

「はあ……」

「そこは今病気が蔓延している島だときく。隣の島から海を越えて病がやってきたそう^{やまい}な」

「隣の島？」

「ポルテフラ島ですね」

横でリイが口を開いた。

真剣な眼差しで老女を見ている。

「何が起こってるのか噂とかあったりするんですか？」

「そうだね……。ケヘヘヘ」

含みのある笑いに、老女の顔がいつそう不気味さを増す。

「いいかい、ポルテフラ島は知ってる通り死の島。死。つまり無。無だから他に対して何も影響を及ぼさない。ただ“ある”だけの島だった。最近までは。今その島ではなぜか人の出入りちらほら見受けられるという。又聞きの話だから嘘か本当かどうかは分からないがね」

ウィルはトムの言っていたことをぼんやりと思い出した。

「これは噂でもなく、ただの憶測にすぎないがね。歴史を繰り返そうと企む者がいるのかもしれないねえ。舞台はあの死の島。憶測が外れることをわたしや、祈るね。今度それが起きたら、ポルテフラ島だけでは済まされないだろう」

ウィルはゴクリと唾を飲み込んだ。

老女はふいに台の上に無造作においてある本の山に手を伸ばすと、一冊の埃をかぶった緑の背表紙の本を取り出した。

「貴重な本だ。島の歴史が載っている。この類の本はほとんど燃やされたらしいからね。シャーンティ宮殿にあるのを除いて、世界に出回ってるのはこれを含め数冊だろう。なので、高価な本なんだがね、今なら1000ルクで売るよ。ケヘヘヘ」

ローレイがふつと息を吐いた。

「なんだ、ただの商売話かよ……」

「どうとるかはお前達の勝手。買つか買わないかも当然お前達の勝手だがね」

「どうする？ リイ。無駄遣いはできるだけ避けたいところだけど

……」

ローズが眉を潜めて、小声でリイに話しかけた。

リイは真つすぐに老女を見つめている。

しばらくローズの問いには答えず口を閉ざしていたが、ふと視線をウィルに向けた。

「ウォルト、あなたはと思う？」

「え……僕？」

自分に意見を聞かれるとは思ってなかったので、ウィルは驚いた。

リイは真つすぐにウィルを見つめている。

前に船の上でも見た、何もかも見透かされてしまうような目で。

トムは警告した。

国の者がポルテフラ島に出入りしていると。

だからこのおばあさんの言う噂は本当なのだろう。

だがその後の憶測は憶測だ。

1000ルク。

いくらまだ余裕があると言っても、ローズの水晶が豊かであると言っても当然底なしではない。

でも。

ふと空から見たあの黒い島が頭の中で蘇る。

あの時すごいオーラを放っていた。

なかなか目を離すことができなかった、死の島。

ウィルは静かに目を閉じ、しばらくしてまた開いた。

「僕は買いたい」

その答えにリイは笑みをこぼした。

「それなら、いいかしら？」

その問いはローレイとローズに向けられたものだ。

ローレイは肩をすくめ、ローズは黙って水晶を取り出した。

銀色の液体が振動で揺れている。

4人は本を購入すると、他に必要なものを揃えるべく、その店を出た。

真上の空には既にいくつかの星が輝いている。

だがふとウィルが東の空を見ると、そこには不気味な色の雲が漂っていた。

蛇道村 3 (後書き)

読んでくださってありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9117d/>

ルーテン国英雄伝 ブラックボールの謎

2010年10月9日17時36分発行